

室蘭工業大学研究報告. 文科編 第10巻第4号 全1冊

| | |
|---------------------------------|---|
| その他（別言語等） のタイトル | Memoirs of the Muroran Institute of Technology. Cultural science vol.10 no.4 |
| journal or publication title | Memoirs of the Muroran Institute of Technology. Cultural science |
| volume | 10 |
| number | 4 |
| year | 1982-11-30 |
| URL | http://hdl.handle.net/10258/2954 |

室 蘭 工 業 大 学

研 究 報 告

文 科 編

第 十 卷 第 四 号

昭和五十七年十一月

MEMOIRS
OF
THE MURORAN INSTITUTE OF TECHNOLOGY

Cultural Science

VOL. 10 NO. 4
NOV., 1982

MURORAN HOKKAIDO
JAPAN

Editing Committee

| | | |
|--------------|-------------|---|
| M. Yoshida | President | <i>Chairman of the Committee</i> |
| K. Okubo | Prof. | <i>Electrical Engineering</i> |
| F. Komatsu | Prof. | <i>Industrial Chemistry</i> |
| Y. Sawada | Prof. | <i>Mineral Resources Engineering</i> |
| K. Matsuoka | Prof. | <i>Civil Engineering</i> |
| M. Naito | Prof. | <i>Mechanical Engineering</i> |
| T. Tachikawa | Prof. | <i>Metallurgical Engineering</i> |
| T. Takeuchi | Prof. | <i>Chemical Engineering</i> |
| H. Saito | Prof. | <i>Industrial Mechanical Engineering</i> |
| T. Yoshikawa | Prof. | <i>Architecture and Building Engineering</i> |
| S. Nomura | Asst. Prof. | <i>Electronic Engineering</i> |
| K. Suzuki | Prof. | <i>Applied Material Science</i> |
| J. Tanimura | Prof. | <i>Literature</i> |
| A. Suginome | Asst. Prof. | <i>Science</i> |
| T. Sakaguchi | Asst. Prof. | <i>Electrical Engineering (Evening Session)</i> |
| H. Kanoh | Prof. | <i>Chief Librarian</i> |

All communications regarding the memoirs should be addressed to the chairman of the committee.

These publications are issued at irregular intervals. They consist of two parts, Science and Engineering and Cultural Science. When they amount to four numbers, they form one volume.

室蘭工業大学研究報告 第 10 卷 第 4 号

文 科 編

目 次

| | | |
|---|-----------------------|-------------|
| 自尊感情 (self-esteem) と学生生活への適応に関する一考察 | 清水 信 介 | 4 (1) 473 |
| 現代自由論の研究 (二) | 白 石 正 夫 | 4 (21) 493 |
| 復活神話としての「てんとう虫」 | 寺 田 昭 夫 | 4 (67) 539 |
| <i>there</i> 構文の意味主語としての定冠詞つき名詞句について | 東 毅 | 4 (91) 563 |
| 韻律理論による母音調和の分析 | 橋 本 邦 彦 | 4 (109) 581 |
| 歌曲「野ばら」に関する覚書 | 坂 西 八 郎 エルンスト・シャーデ | 4 (141) 613 |
| 教官学術研究発表集録 (昭56. 4. 1~57. 3. 31) | | 4 (219) 691 |

自尊感情 (self-esteem) と学生生活 への適応に関する一考察

清水 信 介

A Study on the Relations Between Self-esteem and Some Indices of Adjustment in Student Life

Nobusuke Shimizu

Abstract

The present study was designed to assess the relation between self-esteem and adjustment pattern in student life as measured by questionnaire. Subjects were 232 freshmen and 179 juniors at Muroran Institute of Technology. The self-esteem of the students were measured by Rosenberg's self-esteem scale. In the freshmen group, 32 high scorers were selected as high self-esteem (H-SE) group and 37 low scorers as low self-esteem (L-SE) group. And also in the juniors, 31 high scorers and 34 low scorers were selected. The responses on each item of the questionnaire about adjustment in student life were compared between H-SE and L-SE groups.

I はじめに

自尊感情 (self-esteem) は、自己概念あるいは自己同一性の中核をなすものであり、個人の人格適応や社会行動を規定する重要な内的要因の1つである。

自尊感情については、W. James (1890) の論考以来、多くの人々によってその重要性和意義が指摘されている。近年注目されている Erikson の人格発達理論においても、人生早期からの自尊感情の獲得と発達が自我同一性の形成にとって重要であることが強調されている。そこで言われる自尊感情の高さとは、

幼児的な万能感の自己愛的な確認ではなく¹⁾、また単なる自己評価の高さとは必ずしも同義ではない。それは、具体的な対人交流や社会的現実の中で自己の行動が受容され承認される体験を通して、個人が得てくるところの現実的な自己評価、自己確信なのである。

ところで、自尊感情自体についての実証的研究の歴史はまだ比較的浅いものである。近年、自尊感情の測定に関して、質問紙法 (Coopersmith (1959)²⁾、Rosenberg (1965)³⁾、投影的方法 (Ziller et al (1969)⁴⁾、SD 法(意味微分法)によるもの (Lyell (1973)⁵⁾、Rathus (1973)⁶⁾) など種々の方法が考案されてきた。我が国でも、海保ら (1968)⁷⁾、松下 (1969)⁸⁾、遠藤ら (1972)⁹⁾、1974¹⁰⁾) によって自尊感情の測定が試みられている。こうした測定法の開発とともに、自尊感情の社会的形成条件、自尊感情の機能や他の変数との関係などについて実証的研究が蓄積されつつある。

本研究は、大学生を調査対象として、自尊感情と学生生活へのかかわり方の関係を検討しようとするものである。

大学生活の始まりは、内的にも外的にも多くの変化を学生にもたらす。外的な面と言えば、たとえば住居、生活様式、教育形態、人間関係などの面での変化を、また内的には受験による拘束・重圧からの解放、目標の達成や喪失、失意や挫折の経験をはじめとするさまざまな変化を体験する。そうした変化を契機として、それまで潜在していた、もしくは棚上げになっていた問題が噴出してくることも少なくない。学生は、大なり小なり、そのような内外の変化や問題を経験しながら自己の生活を再体制化していくのであり、それら全体を通して自己の確立という青年期における発達課題を達成していく訳である。そして、そのような過程において自尊感情の問題が重要な役割を果たすことを、われわれはスチューデント・アパシーをはじめとする臨床例を通じて知っている。

そこで、以下では、一般学生に関して、質問紙法によって測定された自尊感情の高い群と低い群の学生生活へのかかわり方、適応状況を比較検討する。

II 調査方法

1. 被験者および調査手続

本研究で用いる資料は、昭和56年11月下旬から12月上旬にかけて室蘭工業大学工学部第一部および第二部の学生に対して実施された「学生生活に関する調査」¹¹⁾の一部である。この調査は、工学部第一部においては、1年目学生は全学科、2, 3, 4年目は特定6学科の学生を対象に行なわれたが、ここでは第一部1年目232名および3年目179名の資料にもとづく結果を報告する。

2. 測定項目

(1) 自尊感情尺度

Rosenberg (1965)³⁾によって作成された self-esteem scale を星野 (1970)¹²⁾が邦訳したものを使用した。この尺度は、10項目から成り、各項目は4段階で評定される。自尊感情得点は理論上10~40の範囲に分布する。Rosenberg の自尊感情尺度では、自己に対して「これでよい (good enough)」と感ずる場合、つまり自分が価値のある人間であると感じ、ありのままの自分を尊敬する場合を測定しようとする。

(2) 学生生活への適応に関する測度

学生生活へのかかわり方、適応状況をとらえるものとして、以下の測度を用いる。

① 所属学科への満足度

これは、設問「あなたは今の学科に満足していますか」に対して「1.全然満足していない～5.非常に満足している」の5段階尺度で評定させ測定した。

② 学科に対する適性度評価

設問「自分が今の学科に適していると思いますか」に対して5段階尺度で評定させた。

③ 入学時と比較した現在の勉学意欲

設問「入学時に比べると現在のあなたの勉学意欲はどうですか」に対して「あがっている」、「さがっている」、「わからない」の3件法で回答させた。

④ 普段の勉強の程度

設問「あなたは、ふだん（試験時期を除いて）どの程度勉強していますか」に対して4段階で回答させた。

⑤ 学生生活の諸側面についての期待度と充足度

学生生活の諸側面として13項目を用意し、それらについて「入学時にどの程度期待していたか」、また「現在どの程度満たされているか」を5段階尺度で評定させた。

⑥ 現在の不安・悩み

現在不安に思っていることや悩んでいることの有無を問い、その内容について予め設定した14項目の中から複数選択でチェックさせた。

III 結果と考察

1. 自尊感情尺度における高得点群と低得点群の設定

1年目学生 232名の自尊感情得点の分布は図-1のとおりである。得点の平均 26.18, 標準偏差 5.11 でほぼ正規分布を示している。

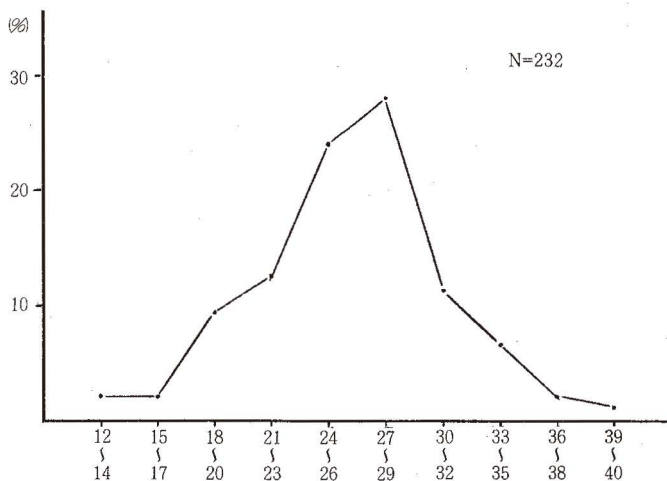


図-1 自尊感情尺度の得点分布—1年目—

ここでは、平均値 + 1 標準偏差以上の者を自尊感情の高い群 (得点 31.29 以上。以下 H-SE 群と呼ぶ)、平均値 - 1 標準偏差以下の者を自尊感情の低い群 (得点 21.07 以下。以下 L-SE 群と呼ぶ) とする。結果は表-1 のようになる。なお、H-SE 群と L-SE 群の自尊感情得点の間には有意差が認められる。

表-1 1 年目学生における H-SE 群, L-SE 群

| | 人 数 | 平 均 | 標準偏差 | t 検定 |
|--------|-----|-------|------|-------------------|
| H-SE 群 | 32 | 34.40 | 2.40 | t= 27.42 P<.01 |
| L-SE 群 | 37 | 18.05 | 2.48 | |

3 年目学生 179 名 (平均 26.89, 標準偏差 4.69) についても、同様の手続で H-SE 群, L-SE 群を設けた (図-2, 表-2)。

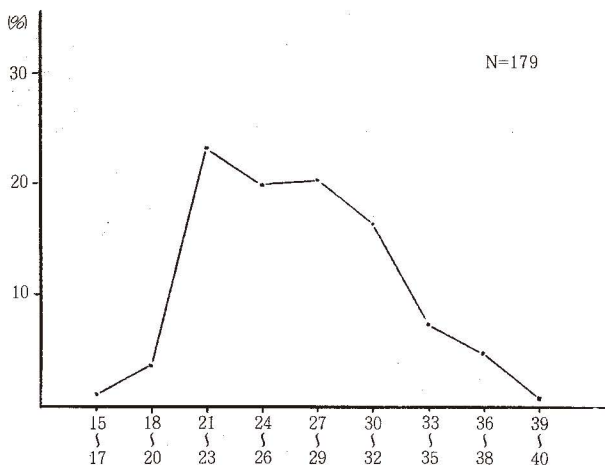


図-2 自尊感情尺度の得点分布-3 年目-

表-2 3 年目学生における H-SE 群, L-SE 群

| | 人 数 | 平 均 | 標準偏差 | t 検定 |
|--------|-----|-------|------|-------------------|
| H-SE 群 | 31 | 34.19 | 2.13 | t= 30.32 P<.01 |
| L-SE 群 | 34 | 20.88 | 1.55 | |

以下、1年目および3年目学生において、H-SE群とL-SE群の学生生活への適応の測度の比較を行なう。

2. 所属学科への満足度

図-3は、1年目および3年目におけるH-SE群とL-SE群の所属学科への満足度を示したものである。

1年目のH-SE群ではL-SE群におけるよりも有意に満足群（「かなり満足している」、「非常に満足している」と回答）が多く、不満足群（「あまり満足していない」、「全然満足していない」と回答）が少ない（ $\chi^2=7.70$, $df=2$, $P<.025$ ）。

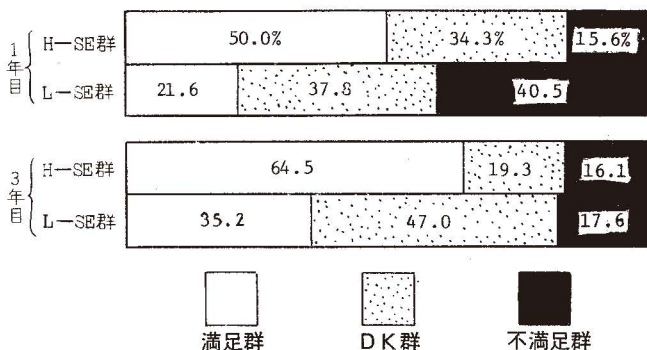


図-3 所属学科への満足度

3年目においても、同様に、H-SE群の満足群が有意に多くなっているが（ $\chi^2=6.51$, $df=2$, $P<.05$ ），それとともにL-SE群においてDK群（「わからない」と回答）が47%を占めているのが注目される。

以上の結果から、1年目、3年目とも、自尊感情の高い者が低い者よりも自己の所属する学科に対して満足しているといえる。

3. 所属学科に対する自己の適性度評価

図-4は所属学科に対する自己の適性度評価の結果を示したものである。

1年目のH-SE群ではL-SE群におけるよりも有意に適性群（「どちらかといえば適している」、「適している」）が多く、非適性群（「どちらかといえば適していない」、「適していない」）が少ない（ $\chi^2=14.09$, $df=2$, $P<.01$ ）。

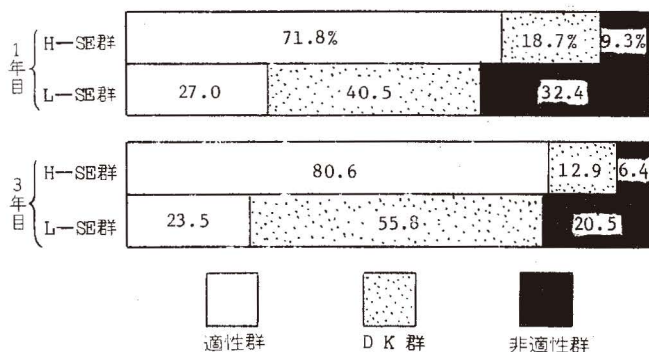


図-4 所属学科に対する自己の適性評価

3年目においても、H-SE 群は L-SE 群よりも所属学科に適しているとみる度合が有意に強い ($\chi^2=21.22$, $df=2$, $P<.005$)。

また、1年目、3年目ともに、L-SE 群において DK 群が多いことが注目される。これは、自尊感情の低い者が置かれた状況とのかかわりで自己を評価したり定位したりすることが出来にくいことを示唆するものであろう。しかも、それが3年目においてより強く認められる点は興味深い。

4. 入学時と比較した現在の勉学意欲

入学時と比較した現在の勉学意欲についての回答結果は図-5 のとおりである。

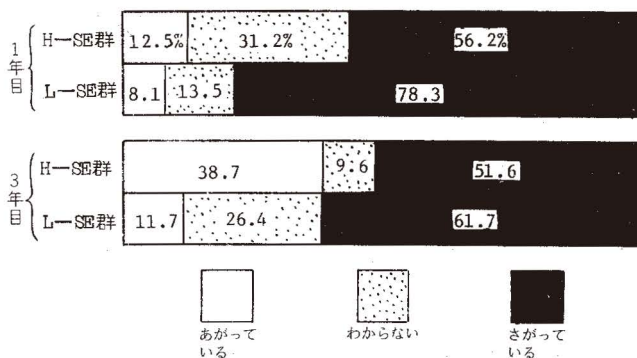


図-5 入学時と比較した勉学意欲

1年目学生についてみると、勉学意欲がさがっているという回答は H—SE 群よりも L—SE 群において多いという傾向がうかがえるが、有意差は認められない ($\chi^2=4.04$, $df=2$)。

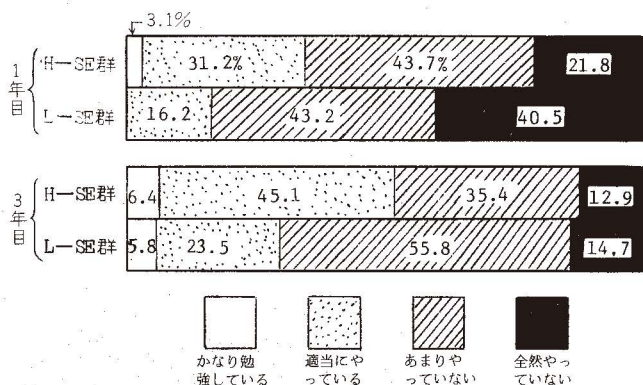
3年目の L—SE 群では、H—SE 群におけるよりも有意に勉学意欲のさがっている者が多く、あがっている者が少ない ($\chi^2=7.55$, $df=2$, $P<.025$)。

勉学意欲に関しては、1年目では自尊感情の高低による差はないが、学年が進行し3年目になると差ははっきりしてくるといえるかもしれない。

5. 普段の勉強の程度

図—6 は、普段（試験時期を除いた）の勉強の程度に関する回答結果を示したものである。

1年目、3年目ともに、勉強をしていない者が H—SE 群におけるよりも L—SE 群で多いという傾向は認められるが、いずれも有意差はない。



図—6 ふだんの勉強の程度

6. 学生生活の諸側面についての期待度と充足度

前項までは主に学業とのかかわりについてみてきたが、ここでは学生生活への適応をより広い側面から検討する。

(1) 期待度

まず、学生生活の諸側面13項目に対して入学時にどの程度期待していたかをみてみる。各項目の評定は「1. 全然期待していなかった～5. 非常に期待し

た」の5段階でなされているが、以下では評定値の平均によって比較する。

図-7は1年目学生における H-SE 群と L-SE 群の期待度を示したものである。H-SE 群は「専門的知識・技術を身につけること」において L-SE 群よりも有意に期待度が高い ($t=3.26$, $df=67$, $P<.01$)。「束縛をうけずに自分の生き方、人生について考えること」($P<.10$)、「真の友人をつくること」($P<.10$)、「自由な時間をエンジョイすること」($P<.10$)では、H-SE 群の期待度が L-SE 群のそれよりも高いという有意的な傾向がある。また、有意差はないが、「学校の勉強以外に自主的な勉強をすること」、「異性の友人を得ること、恋愛」において、H-SE 群は L-SE 群よりも期待度が高いという傾向がうかがわれる。

3年目学生における結果は図-8のとおりである。H-SE 群は「専門的知識・技術を身につけること」($t=2.86$, $df=62$, $P<.01$)、「自由な時間をエンジョイすること」($t=3.34$, $df=62$, $P<.01$)で L-SE 群よりも有意に期待度が高い。また、有意差はないが、H-SE 群は「異性の友人を得ること、恋愛」の期待度においても L-SE 群より高い傾向を示している。逆に、H-SE 群は、「文化系サークルに入り活動すること」において、L-SE 群よりも有意に期待度が低くなっている ($t=2.30$, $df=63$, $P<.05$)。

以上の期待度の結果をまとめると、自尊感情の高い者は低い者に比べて専門的知識・技術の習得、余暇活動や自己啓発、親友や異性の友人の獲得などに関してより積極的な態度を有するといえよう。

(2) 充足度

つぎに、上記13項目に関して現在どの程度満たされているかについて検討する。

図-9は1年目学生における H-SE 群と L-SE 群の充足度を示したものである。両群とも全般的に充足度の水準が低い点が注目されるが、L-SE 群は「真の友人をつくること」($t=2.46$, $df=67$, $P<.05$)、「学校の勉強以外に自主的な勉強をすること」($t=2.15$, $df=58$, $P<.05$)、「クラス活動」($t=2.25$, $df=67$, $P<.05$)の充足度において、H-SE 群よりも有意に低い水準を示してい

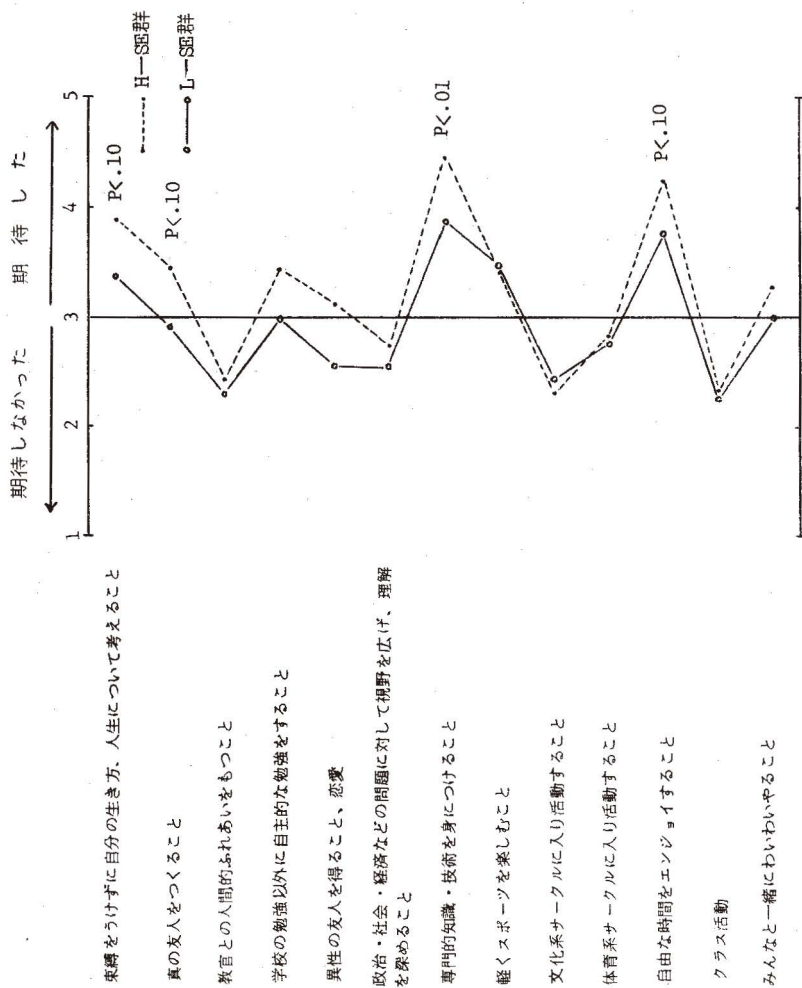
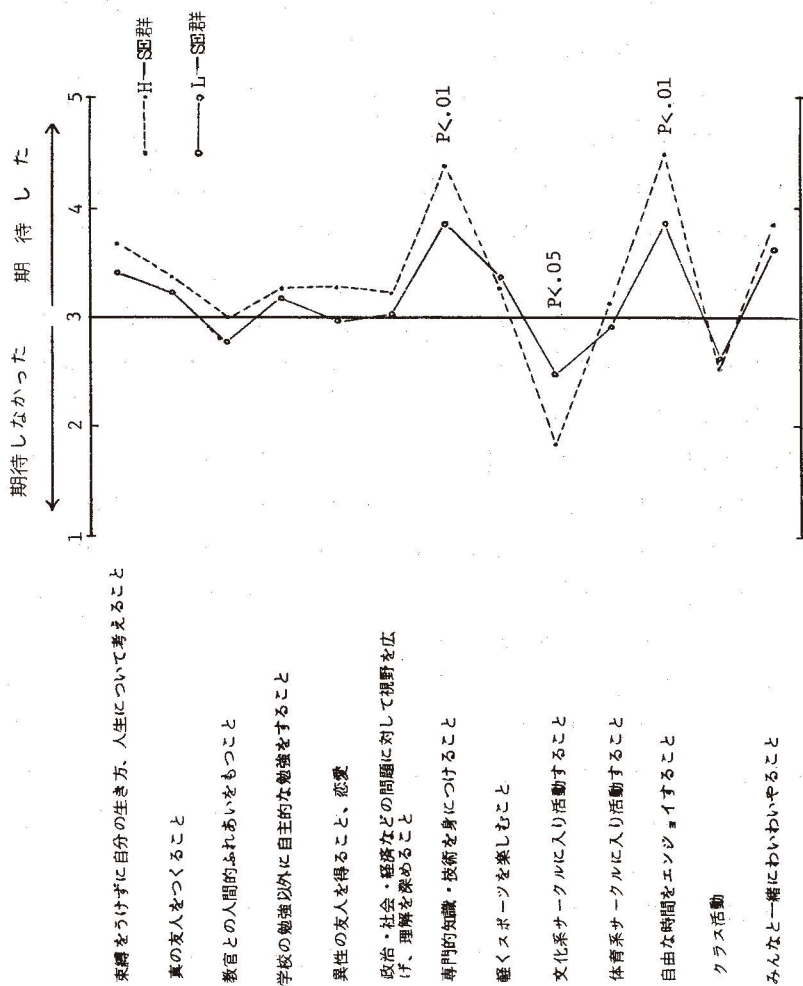


図7-1 学生生活の諸側面についての期待度—1年目—



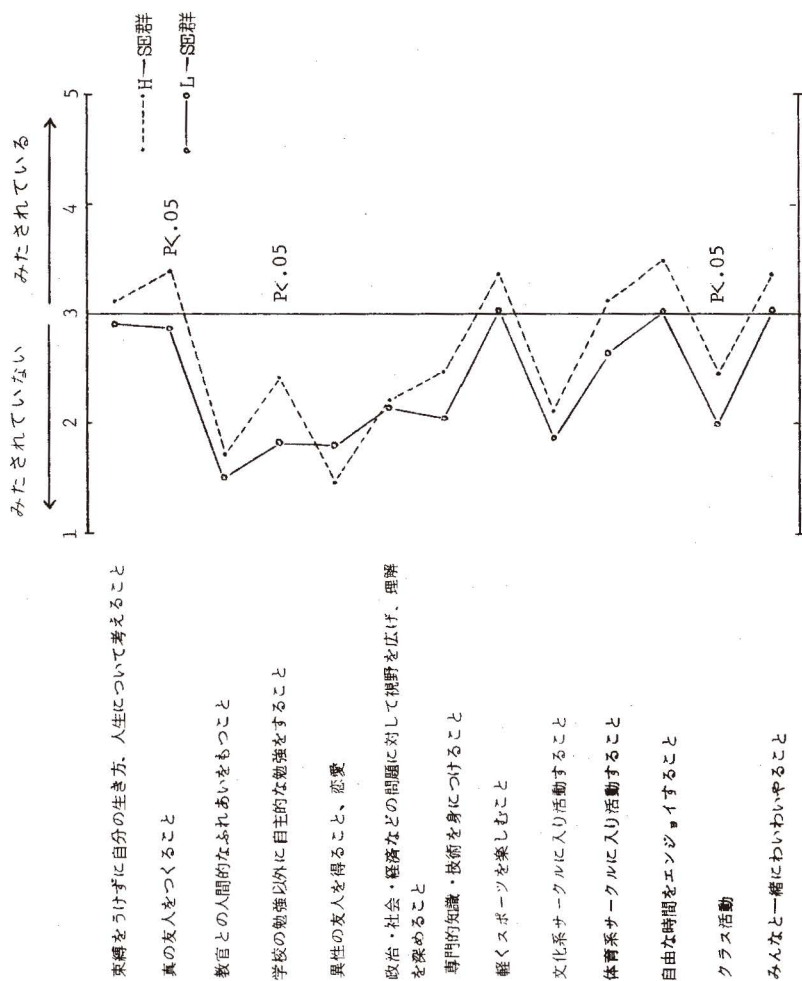
図—8 学生生活の諸側面についての期待度—3年目—

る。また、有意差はないが、「専門的知識・技術を身につけること」、「体育系サークルに入り活動すること」、「自由な時間をエンジョイすること」の充足度においても、L-SE 群は H-SE 群よりも低いという傾向がうかがえる。

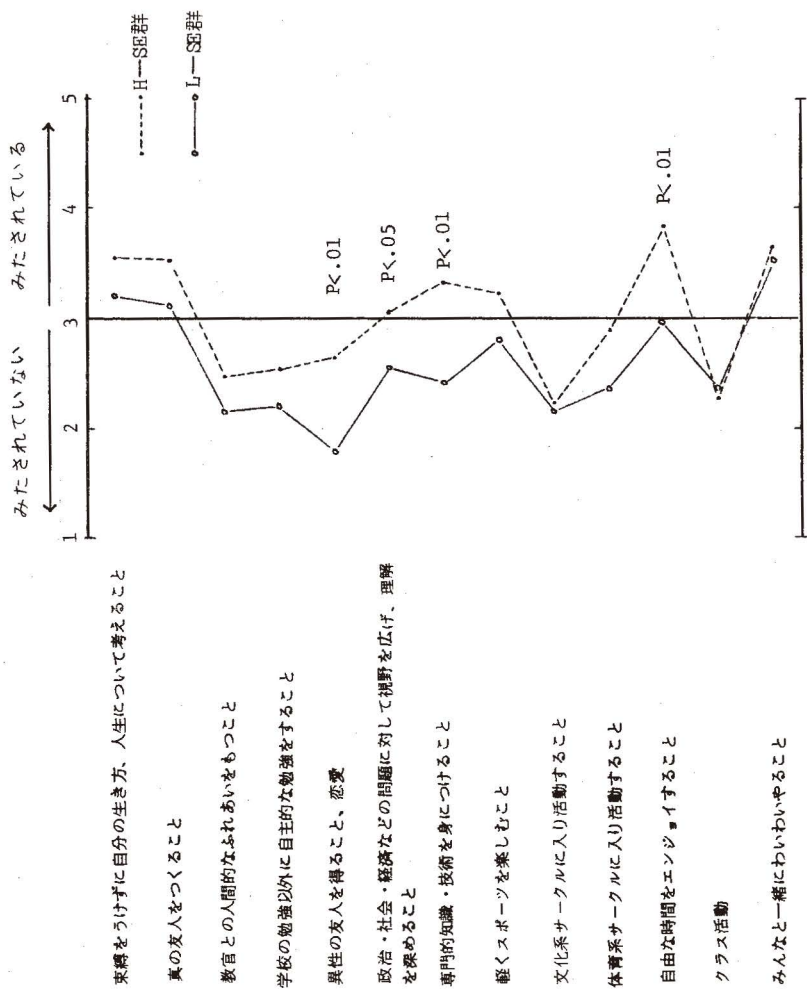
図-10 は 3 年目学生の結果である。L-SE 群は「専門的知識・技術を身につけること」($t=4.51$, $df=63$, $P<.01$), 「自由な時間をエンジョイすること」($t=3.44$, $df=63$, $P<.01$), 「異性の友人を得ること, 恋愛」($t=3.27$, $df=55$, $P<.01$), 「政治・社会・経済などの問題に対して視野を広げ, 理解を深めること」($t=2.02$, $df=63$, $P<.05$) の充足度において H-SE 群よりも有意に低い。また、有意差は認められないが、「束縛をうけずに自分の生き方, 人生について考えること」、「真の友人をつくること」、「教官との人間的なふれあいをもつこと」、「学校の勉強以外に自主的な勉強をすること」、「軽くスポーツを楽しむこと」、「体育系サークルに入り活動すること」の充足度においても、L-SE 群は H-SE 群よりも低いという傾向を示している。

前項の期待度においては 1 年目と 3 年目の水準の差はあまり認められなかったが、充足度では両学年間で差の大きい項目がかなり存在する。「教官との人間的なふれあいをもつこと」、「政治・社会・経済などの問題に対して視野を広げ理解をもつこと」では、3 年目の H-SE 群および L-SE 群の充足度水準が 1 年目 H-SE 群、L-SE 群のそれよりも高くなっている。これらの面での充足度の上昇には学年進行による授業形態の変化や大学生活の長さなども関係しているものと考えられるが、3 年目においてこれら 2 項目に関する H-SE 群の充足度が L-SE 群よりも高いという結果は、それらの要因以外に自尊心の高さもある程度影響することを示唆しているものと考えられる。また、「異性の友人を得ること, 恋愛」と「専門的知識・技術を身につけること」では、3 年目 L-SE 群が 1 年目 H-SE、L-SE 群とほぼ同じ水準にとどまっているのに対し、3 年目 H-SE 群の充足度が有意な上昇を示している。これらの側面での充足には自尊心の高いことがより強く関係するといえよう。

このほか、「自由な時間をエンジョイすること」では、1 年目 L-SE 群と 3 年目 L-SE 群の充足度が同水準であるのに、1, 3 年目の H-SE 群はそ



図—9 学生生活の諸側面についての充足度—1 年目—



図一10 学生生活の諸側面についての充足度—3年目—

れよりも高くなっている。この点でも、自尊感情の高い者のほうが高い充足感を得やすいといえるようである。

7. 現在の不安・悩み

図-11 は 1 年目学生における結果である。両群の選択率を比較すると、「自分の性格・心理的問題」($P<.01$), 「生活意欲の減退」($P<.01$), 「対人関係」($P<.01$), 「勉学に意義を感じられないこと」($P<.025$), 「進路選択 (転編入学・就職など)」($P<.05$) において, H-SE 群が有意に高くなっている。「学業問題 (勉学方法・単位取得など)」では, H-SE 群の選択率のほうが高いという有意的な傾向が認められる ($P<.10$)。また, 有意差はないが, 「サークル活動上の問題」においても H-SE 群は L-SE 群よりも選択率が高いという傾向がうかがえる。

なお, 自尊感情尺度の性質からいって, 「自分の性格・心理的問題」に関する不安・悩みの多寡との関連を問題にするのは同義反復的であるが, ここでは項目群から除外せずに表示することにした。

3 年目における結果は図-12 のとおりである。H-SE 群は「自分の性格・心理的問題」($P<.05$) で L-SE 群よりも有意に高い選択率を示している。「学業問題」($P<.10$), 「勉学に意義を感じられぬこと」($P<.10$), 「対人関係」においても, H-SE 群は L-SE 群よりも選択率が高いという傾向が認められる。

以上の結果から, 自尊感情の低い者は高い者に比べると自分の性格等についての悩みや対人関係の不安を抱くことが多く, 生活や勉学への意欲減退を経験しやすく, 進路や学業上の問題を感じることも多いといえるが, この傾向は 1 年目学生において顕著である。なお, 3 年目学生では, H-SE 群, L-SE 群ともに「進路選択」の選択率が高くなっているが, これは 3 年目の秋ともなると就職等の問題がかなり現実的になってくるためであろう。他方, 1 年目の進路選択の悩みの内容は, むしろ再受験や転科をめぐるものが中心であると推測される。自尊感情の低い者ほど入学後そうした悩みを経験しやすいのであろう。

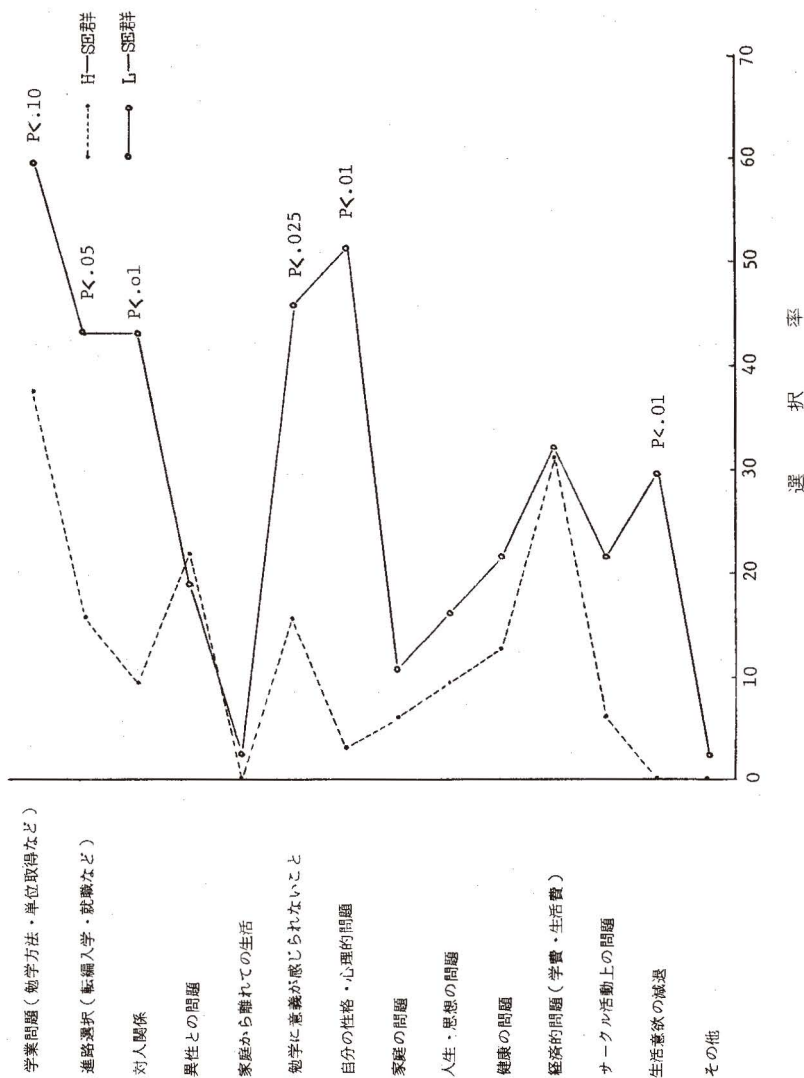
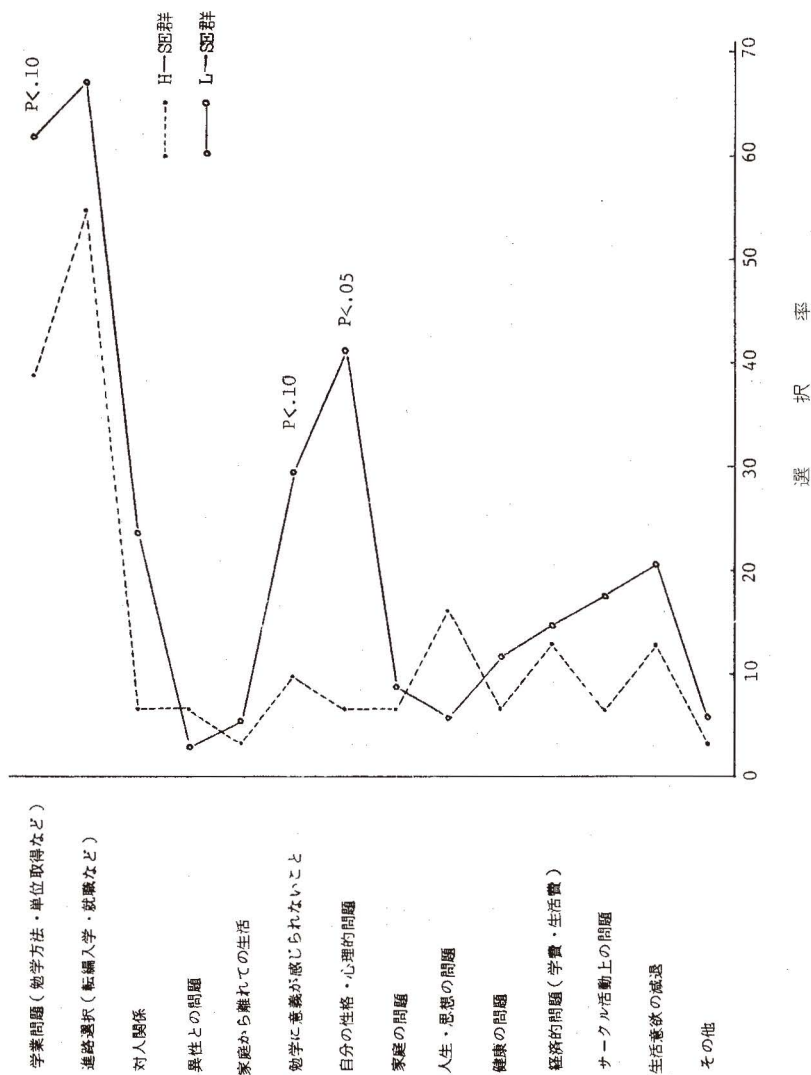


図-11 現在もっている不安・悩み-1年目-



図一12 現在もっている不安・悩み—3年目—

IV ま と め

本研究では、学生生活への適応過程において自尊感情が重要な役割をはたすものと考え、一般学生を対象に自尊感情の高い群と低い群を選び、適応に関する測度における両群の結果を比較検討した。それらをまとめると概ねつぎのようになる。

勉学生活の中心的な場である所属学科とのかかわりでは、自尊感情の高い者は、自分の学科に対して満足感を抱き肯定的に受けとめている度合いが強く、そこでの学習に関する自己の適性について肯定的に評価し相応の自信を抱いているようである。他方、自尊感情の低い者は所属学科への満足度が低く、自己の適性についても疑問や不確かな感じを抱く傾向が強い。彼らは置かれた状況の中で自己を定位し積極的に歩み出すことが出来にくい面があると思われる。こうした傾向は、学年が進行し3年目になっても持続する可能性も考えられるが、1年目においては他大学受験、転科などの進路に関する迷い、悩みに結びつくことが多いものと推測される。こうしたことから、自尊感情の低い者は高い者に比べ勉学活動に消極的になる傾向が認められる。

学生生活の諸側面についての入学時の期待度および現在の充足度からみると、自尊感情の高い者は低い者に比べて専門的知識・技術の習得、真の友や異性の友人の獲得、自由な時間の享受、自分の生き方や人生について考えることなどに関してより積極的、意欲的姿勢を有することがうかがわれ、またそれらの面についての充足感もより強いようである。充足度の絶対的な水準は全体に低い、3年目学生が多く項目において1年目よりも高い水準を示している。特に、自尊感情の高い3年目学生の充足度が高い。そして、専門的知識・技術の習得、異性の友人の獲得に関する充足度では、自尊感情の低い3年目学生が1年目学生とほぼ同水準にとどまっているのに対し、自尊感情の高い3年目はそれらよりはるかに高くなっている。今回の資料は同一対象集団の変化を経年のフォローしたものではないので、結論づけるのに慎重であらねばならないが、

これらはつぎのことを示唆しているとも考えられる。学年の進行に伴って多くの項目で充足度が向上する。しかし、それは単に学生生活の年数・経験が増加したり外的条件が変化するだけでは十分なものにはならない。より高い充足感を得るには、個人が積極的に自分の置かれた状況にかかわっていくことが重要なのであり、そこにおいて自尊感情のはたす役割が大きいということである。

充足度と表裏の関係にもある現在の不安・悩みの面では、自尊感情の低い者は、自己の性格・心理的問題、対人関係、勉学に意義が感じられないこと、勉強方法や単位取得の問題、生活意欲の減退などにおいて自尊感情の高い者よりも多くの訴えを示している。この傾向は1年目学生においてより顕著である。また、1年目学生では、自尊感情の低い者は高い者よりも進路選択の悩みを多くもっているが、これは前述のように他大学受験や転科などに関するものであると考えられる。なお、今回の調査では、学生が経験する悩みや問題についてごく大づかみの項目設定しかなかったが、たとえば「進路選択」の場合学年によってその意味合いが異なる可能性がある。また、学年の進行とともに問題・悩みの焦点が変わっていくことも予想される。今後はより細分化した項目設定を行ない、前述の同一集団の経年変化の追跡の問題と合わせて検討を深めていきたい。

参 考 文 献

- 1) Erikson, E. H.: Identity and the life cycle. (New York: International Universities Press, Inc. 1959), (小此木啓吾訳編: 自我同一性 誠信書房 東京 1973).
- 2) Coopersmith, S.: A method for determining types of self-esteem. J. of Abnormal and Social Psychology. 59, 87 (1959).
- 3) Rosenberg, M.: Society and the adolescent self-image. (Princeton Univ. Press. 1965).
- 4) Ziller, R. C., Hagey, J., and Smith, M.: Self-esteem: a self-social construct. J. of Consulting and Clinical Psychology. 33, 1, 84 (1969).
- 5) Lyell, R. G.: Adolescent and adult self-esteem as related to cultural values. Adolescence. 8, 29, 85 (1973).

- 6) Rathus, S. A., Siegel, L. J., and Justice, M. C.: Delinquent attitudes and self-esteem. *Adolescence*. 8, 30, 265 (1973).
- 7) 海保博之・山下恒男: 自尊尺度 (SEI) 作成の試み (I) 日本心理学会第 32 回大会発表論文集 33 (1968).
- 8) 松下 寛: Self-image の研究—Self-esteem scale の作成—日本教育心理学会第 11 回総会発表論文集 280 (1969).
- 9) 遠藤辰雄・安藤延男・冷川昭子・井上祥治: Self-esteem に関する研究 (I), (II), (III), 日本教育心理学会第 14 回総会発表論文集 (1972).
- 10) 遠藤辰雄・安藤延男・冷川昭子・井上祥治: Self-esteem の研究 九州大学教育学部心理学部門紀要 18, 2 (1974).
- 11) 室蘭工業大学保健管理業務報告第10号: 学生生活に関する調査報告書 (1983).
- 12) 星野 命: 感情の心理と教育 (一, 二), 児童心理 24, 7 および 8, 1264, および 1445 (1970).

現代自由論の研究(二)

白石正夫

A Study on Liberty

Masao Shiraishi

Abstract

Capitalism or socialism? This alternative is one of the greatest problems that we should solve today. Which can give more liberties to us? This is one of the greatest questions that we must answer, when we choose between them. When we, then, ask what liberty is, we are surprised to find too many answers to the question. Especially, the West and the East are very different from each other concerning the meaning of liberty.

1. First, this paper takes up some theories on liberty, criticizes the defects of them and tries to seek one measure of liberty with which we can measure the quantity of liberties on both sides, the West and the East.

2. Secondly, this paper examines where Engels' statements on liberty should be placed in the modern theory on liberty.

はじめに

自由とは何か。この問に対して、ただ一つの解答を与えること、これは、現代世界が緊急に必要としている、理論作業の一つである。なぜなら、世界政治と各国国内政治とにおいて、東西、左右の陣営が対立している最大の争点の一つが、いずれが自由な社会か、どちらが人々に自由を保障するのか、この点に

あるからである。だが自由という語は多義的であり、意味の曖昧な概念である。それゆえ、両陣営は、それぞれの自由の定義を前提として、ともに自らを自由の守護神と主張する。しかし、これでは議論はかみあわず、論争は不毛なものとなるばかりではない。このことの論理的帰結は、両陣営の対決を、人々の理性的な判断にもとづく選択に委ねることによって、平和的解決に導くのではなく、力による決着、核戦争による終末的「解決」の道へと向かわせることにならざるをえない。従って現代世界の危機を解決するためには、東西、左右のいずれを選択するのかを、人々の冷静な判断に委ねること、その判断のための基準を確定することが、是非とも必要であろう。それゆえ、自由をめぐる論争を実りあるものとし、どちらが真に自由を保障するのかを明確にするために、自由に一義的で明快な定義を与えることが求められているのである。筆者は、前稿（「現代自由論の研究（一）」、室蘭工業大学研究報告、第10巻 第3号、以下前稿と略記）で、この現代の差し迫った理論的課題に、筆者なりの解答を与えようと試みた。本稿も、自由の統一的尺度を探求しようとする問題意識に導かれている。

自由についての一つの尺度を探求する上で、解決を必要とする論点の一つは、エンゲルスの自由概念を、自由論の中にどう位置づけるか、という問題であろう。なぜなら東西の自由論が最も鋭く対立してきたのは、このエンゲルスの自由の定義をめぐるものであったからである。即ち、東側は、エンゲルスの語る自由こそ真の自由だと主張し、このような自由概念を含まない西側の自由論は、抽象的で形式的な自由を言い立てるのみで、何ら実質的な自由を保障しえないと断ずる。西側は、まさに東側の自由論がこのエンゲルスの自由概念に立脚しているがゆえに、強制を自由だと言いくるめて人々を惑わし、現実には政治的自由の一片も保障されない全体主義社会を、自由が花開く社会だと主張して恥ないのだ、と論難する。このような状態では、東西間で自由概念についての合意を確立し、これを判断基準として、人々に選択を求めることなど到底不可能であろう。それゆえ、自由論論争において、東西が相対立する焦点の一つとなっている、このエンゲルスの自由概念をどう位置づけるか、これに対する解答が

いま求められているのである。本稿は、エンゲルスをめぐっての論争を交通整理しつつ、若干の私見をもって、この論争に一枚加わろうとする。

(一) 東側自由論の一典型——東独の自由論

東側自由論の一典型として、ここでは、ドイツ民主共和国の一著作¹⁾を取り上げる。ここでの自由の定義はこうである。「自由とは、自然および社会の合法則性の科学的認識にもとづく、人間の自然および社会的諸関係にたいする支配である。自由とは、客観的合法則性の認識に照応して、人間がかれらの生活諸関係を、事柄についての知識にもとづく決定によって形成する能力である。」²⁾ この自由論では、自由は、一貫してエンゲルスの自由概念にもとづいて把握され、そこから一步も出ていない。即ち自由は、必然性と人間の自由との関係において、自然や社会を支配する客観的諸法則と人間との関係のみにおいてとらえられている。この限りでは、当然のことながら、人間個人は誰であれ主体的決定を、自然・社会諸法則を無視して実現できるわけではない。また主体的決定自体も、自然と社会の諸条件に規定されていることはいうまでもない。従って「自由は、人が欲することをなしうる、ということの意味しているのではない。そのようなことは決してなかったし、また今後もないであろう」³⁾。「人間がどの程度の自由を獲得しうるか、また現実を獲得しているかということは、まず第一にかれらの意志に依存しているのではなく……根本的には生産諸力と生産諸関係との客観的弁証法によって規定されている。」⁴⁾ 人間は、客観的諸条件と無関係に、自己の目的を実現できるわけではもちろんない。つまり自由には、歴史的、具体的性格が与えられている。また「生産諸力と生産諸関係との弁証法……は、敵対的な階級社会においては、自由の階級的性格をも規定している」⁵⁾。従って「自由なのは……自己の目標や行為を、客観的な歴史的必然性および合法則性にしがって設定し規定するところの階級である」⁶⁾。こうして「これまでの全歴史は、全体的に人間による前進的な自然支配の歴史、従ってまた、人間的自由のたえざる進歩とみなされうる。同時にしかし……階級社会

においては、おのおののこうした進歩は、労働する人間の、かれらに固有の社会関係に対する、力の喪失の深化と結びついていた。……科学と技術がここにより広範に発展すればするほど、当該の社会的諸関係にたいする支配としての実在的自由の欠落が、ますます強く感じられる」⁷⁾。

以上のように、この著作は、エンゲルスの自由概念を自由のすべて、自由そのものとする視点で貫かれている。現代自由論の課題は、現実の生身の人間個人の、思想の自由、選択の自由、行動の自由という、個人の自由の全局面、自分で考え、自分で選び、自分で実行したいという人間の普遍的願望、人間の尊厳の証としての自由、これらのそれぞれの局面を、そしてまた全局面を肯定し保障するための、理論的基礎づけにある、と筆者は考える。いかなる社会でも、従って社会主義社会でも保障されねばならない、あるがままの個人の自由⁸⁾は、上の著作のような自由論では、理論的に基礎づけることなど到底できないのではなかろうか。即ちここでの自由は、個人ではなく階級の、客観的諸法則の認識にもとづいた、自然と社会に対する支配である。あるがままの、未だ科学的認識に到達していないかもしれない個人が、試行錯誤を重ねつつ、自分で考え行動する自由、資本主義社会においてであれ、社会主義社会においてであれ、無数に存在する普通人の自由は、一切考察の対象とはなっていないのである。ここで語られているのは、社会階級が思い通りに自然や社会を支配することができるための、科学的、哲学的な理論的根拠といったものであり、これが自由論のすべてとされているのである。それゆえ、上記に引用したように、階級社会における科学と技術の発展は、一路労働する階級の隷属の深化を導くものとしてしかとらえられない。これでは、資本主義社会の中で、経済権力、政治権力の抑圧に抗して闘いとられてきた民主主義的諸自由を評価する視点は出てこない。労働する人間は、階級社会にあっても、否、階級社会だからこそ、自己の人間性を否定する権力に対して、生身の人間として、人間の尊厳を獲得しようとする闘いを生み出し、権力からの自由、権力を批判する自由、権力を覆す自由を制度として確立してきたのである。客観的諸法則と人間との関係を問題とする自由論、その限りでは妥当な自由論も、生身の個人、普通の個人たちの、

権力との関係でとらえられた自由を重視し、これを理論的に基礎づける論点を欠いていたのでは、現代にふさわしい自由論とはいえないのではなからうか。あるいは、客観的諸法則と人間の関係で自由をとらえる、所謂「哲学的」自由論からは、現代において解決しなければならない自由の問題の一つ、即ち社会主義国家権力からの自由をどう基礎づけるか⁹⁾、という視点は出てこないのではなからうか。現在我々は、アフガニスタンへのソ連の侵略やポーランドにおける戒厳令を目撃しつつあるのであるが、このような逆噴射型社会主義権力からの自由、この誤りを正すための自由を確立することは、核発射型資本主義権力からの自由、これをやめさせる自由と同様に、差し迫った現代の課題である。だが、エンゲルスの自由概念をもって自由の定義だとする議論からは、このような自由は問題とならないのではなからうか。否、逆噴射型社会主義は、まさにそのような定義を理論的基礎として形成されてきたのではなからうか。この点を次に検討しよう。

上記の著作においても、個人の主観的自由が語られていないわけではない。「もし人間が、環境の影響をたんに執行するだけの機関であり、自分の内的主観的動因から決心した行為を、自分でたてた目標にしたがっておこなう能力をもっていないとすれば、個人の自由について語ることはできないだろう。個々人……の態度は、客観的諸関係によって絶対的に決定されているのではなく、外的決定は主観的な諸要因による規定をも受ける。……行為は、現実の諸傾向と諸関連との客観的な多様性が同時に表現されるところの、もろもろの可能性の範囲をもっている。……自由……は、人間の行為の客観的な諸決定因子のあいだで価値的に区別をおこない、いくつかの現実的可能性のもとで一つの……可能性を行為において実現する人間の能力のうちにある。」¹⁰⁾ ここには、個人の自由の全局面と、それぞれの局面の自由が、現実存在するのだということが肯定されている。即ち内的主観的動因という内的意欲形成の自由、決心としての価値選択の自由、それを行為において実現する行動の自由が、人間にはあるのだ、という事実の肯定が含まれている。しかもそのことには客観的根拠がある。即ち人間の行為は、もろもろの可能性の範囲をもっており、選択するこ

とのできるいくつかの可能性が、現実には存在している、というのである。この事実の肯定は、個人が主観的に考え、選択し、行動する自由、一人ひとりの人間の自由、個人の尊厳を保障することの必要性の主張へと論理的に発展するはずである。現実には生活する生身の個人が、必ずしも科学的認識、必然性の洞察にもとづくわけではない主体的決定を、自分であれこれと試行錯誤しつつ実行してみる自由は、人間の尊厳の不可欠の一側面である。それゆえにこそ、個人には、自己と社会とに対する責任があるのである。その中から、一人ひとりの個人の正しい認識が発展し、それこそが個人の確信となって、諸個人の創造的エネルギーが生み出されるのである。

ところが、上の著作は次のように続ける。「おのおのの行為において、いろいろな選択の可能性が与えられているということは、さしあたりは自由に関して未だなにも表明していない、……人間は与えられた諸条件のもとでさまざまなことを欲し、願望することができる。そこには、かれの自由ではなく、さしあたりその全く一般的な主観的前提のみが表明されているにすぎない。そこに含まれているのは、人間は、かれの態度を内的動因によって決める、意識をもった存在であるということである。さまざまな可能性のうちの一つを選択することとしての意志の自由とともに、自由は始まる。だが、自由は、行為が客観的必然性と一致しておこなわれる場合にはじめて、自由として示され、実現される。」¹¹⁾「与えられた諸条件のもとで、最も好都合であり、社会的利益の確保のために最も効果的である可能性の選択ということで、個人の自由の一つの重要な前提が与えられている。しかし、それはまさに一つの前提にすぎない。なぜなら、自由は、結局のところ、実践のうちで、つまり共同体と社会の成員としての個々人の行為のうちで、その実が示されるからである。認識と決心とに結びついている選択は、実際の行為のうちで実現される。個人の自由は、主観的な前提行為と外的な成果との全体として現われる。なおその際には、規定的な意味は実践にぞくする。正しい認識と決心は、それらが効果的な行為をひきおこす場合にはじめて、自由の契機になる。生産的な働きが照応しないような認識と決心のうちにいつまでも留まることを、個人の自由の表現とみなすこと

はできない。」¹²⁾「さまざまな行為の可能性のうち、普通その一つが、与えられた諸条件のもとで最良のもの、すなわち最適のものである。それを見つけ出すためには、認識、洞察が前提として必要である。……最適な選択項の選択は、直接には個人から出発していても、純粋に個人的な出来事ではなく、社会的に決定されている。社会の連関と発展にかかわるもろもろの行為は、階級利益によって影響される。個人が進歩的階級—労働者階級—の利益と一致して活動するようになり、かれの行為を社会主義社会の完成に向けているときは、個人は自由に行為する。」¹³⁾ このような理論展開、この「哲学的」自由論からは、個人の認識と決心の自由を、個人の尊厳の不可欠の一部として承認し、これを保障することが大切だ、という視点は出てこない。労働者階級によって洞察された最適の選択項、即ち社会主義社会の完成、これに従事する場合にだけ、個人は自由である。それ以外の認識と決心と行為は、人間の自由とは認められない。この自由論からは、個人の思想、選択の自由を、基本的人権として保障しなければならないという認識は出てこない。思想の自由とは何か。ある社会、政治体制の根幹にかかわる事項への批判の自由を含まない思想の自由は、思想の自由とはいえない。体制を支持する自由なぞは、どこにだって存在するのである。上の自由論では、社会主義社会における、このような批判の自由を理論的に根拠づけることはできなからう。建設的な批判、社会主義建設に奉仕する限りでの批判は自由だが、それ以外の批判は思想の自由には含まれない、このようになるであろう。ある批判が建設的なものか、反革命的なものかの判定は、誰が行なうか。その判断が時の政治権力に委ねられるなら、建設的批判も反革命として断罪される可能性がある¹⁴⁾。上記の著作は指摘する、「社会主義は全面的に発達した、全面的に自己を発展させる人格を要求する。というのは、もしそうでなければ、社会主義はそれに客観的に内在する可能性のもとにとどまり、社会主義の優位をただ限定的にしか展開しえないからである」¹⁵⁾。まさにそうだろう。だが、全面的に自己を発展させる人格は、おおらかな、自由な雰囲気の中での自由な討論、自由な試行錯誤を通じてしか生み出されえない。その中から自己の確信をつかみとった諸個人こそが、自発的に創造的活力を発揮

しうるのである。まさにそのために、批判の自由は全面的に保障されねばならない。つまり批判の自由は、反革命的な批判の自由を含み、それが反革命的なものか否かの判定は、批判と反批判、討論の自由自体に委ねる、このような形で保障されねばならないのである。しかし、上の自由論には、このような観点はない。即ち、社会主義自体は既に洞察された必然性であって、この建設に従事することをおいて、ほかに自由はないからである。ここには「社会主義制度を堅固にする」言論、表現に限って自由を保障する、という論理はあっても、「社会主義制度を堅固にする」ためには、思想、表現の自由が必要だ、という論理はない¹⁶⁾。

くどいようだが、今少し検討するために、引用を続けよう。「労働者階級は、……階級社会を克服し、それとともに人間的自由のすべての階級的制限の克服を成就するという、歴史的課題をもっている。……人間の自由はここでは、大衆の意識的革命的行動であり、歴史の合法則性への洞察にもとづく科学的プログラムにしたがって古い資本主義世界を新しい社会主義、共産主義の世界に改造することである。」¹⁷⁾「人民大衆がこのことをなし得るのは、労働者階級がその歴史的役割を意識しており、他の勤労諸階級と諸階層の指導を引き受ける場合だけである。労働者階級は、かれら自身の指導的な力が科学的認識と科学的方法で武装された党であるばあいに、この任務を果たすことができる。」¹⁸⁾更にまた「社会主義社会の自由にとって……本質的なのは……国家権力の社会主義的性格である。本質的なのは、国家権力の社会主義的性格が、マルクス・レーニン主義のなかにその堅固な理論的基礎をもつ諸原理にもとづいている、ということである。他のなにものにもまして、マルクス・レーニン主義党による社会主義国家と社会主義社会建設との指導は、これらの諸原理の構成部分である。」¹⁹⁾ このように、マルクス・レーニン主義党の指導を中心的原理とする、国家権力の社会主義的性格が、社会主義社会の自由を保障するのであり、その自由とは、歴史の合法則性への洞察にもとづく科学的プログラムに従って、社会主義、共産主義の世界を建設することだと言う。だが、マルクス・レーニン主義党を名乗る党が指導しているというだけでは、歴史の合法則性への洞察は

保証されえない。その党が洞察を誤る場合もある。その時には、ここにいうところの自由もありえないことになる。従って、問題はその中味である。この党の洞察が、真に科学的認識と科学的方法であることが立証されうするためには、すべての人民の意志形成と意見表明との完全な自由の保障の上に立って、これら人民の圧倒的大多数の支持をかちえていることが必要である。このような前提があってこそ、洞察の正しさが保証されようし、上にいう自由も確保されよう。洞察を誤った時には、それを正すための道筋、即ち全人民の批判の自由が確立されているからである。だが、上記の自由論では、党や権力が洞察を誤った場合に、これを批判する自由は、実際のところ認められないことになる。なぜなら、この著作は「討論と批判との自由は、発展のそのつどの最上の方法を見出すための、そして客観的に与えられた諸課題を効果的に解決するための、どうしても必要な前提である」²⁰⁾としつつも、それは建設的な批判の自由だけであって、「この自由を、反社会主義的諸勢力のイデオロギー的立場を公然と弁護する、かれらにとっての可能性と取り違えてはならない」²¹⁾し、「反革命的な帝国主義的立場からの『批判の自由』への容認を意味しない」²²⁾と述べているからである。洞察を誤った党、逆噴射型権力の軌道修正は、これではできないのではないか。というのは、逆噴射型権力は、逆噴射型であればこそ、建設的批判にも反革命、反社会主義の烙印を押すであろうから。これでは、ポーランドやアフガニスタン問題での誤りを正すことはできない。この誤りに対する批判は、反社会主義的諸勢力、反革命的な帝国主義の立場を利するものだとして、否定されるであろう。残された手段は、人民の力による、実力による批判だということになるのだろうか。だが、これでは、危機の平和的解決の道が閉ざされ、力が正義だ、理論的検討は無用ということになろう。このような自由論、自由をこのようなものとしてとらえているから、ソルジェニツィンの国外追放やサハロフのいわば流刑が生ずるのではないか。つまり、自由を必然性とのかわりのみでとらえ、そこから一步も出ない自由論、エンゲルスの自由概念を自由そのものとする立場は、基本的人権としてとらえられる個人の自由、自分で思想を形成し、価値を選択し、行動する自由を、単に理論的に基礎づけら

れない、包摂できないというだけでなく、この自由を自由ではないものとして、軽視または無視し、現実これを保障されないものにしてしまうのではなからうか。

長々と同じ著作を検討してきたが、最後に、革命後数十年を経過した社会主義社会のことを考えてみよう。社会主義革命から時代が経るにつれ、当然のことながら、革命を経験していない人々が増加し、革命時代の熱情は稀薄になっている。大多数の人々にとっては、社会主義社会は既成の事実、生まれた時から^の当り前の現実である。だが、現実の社会主義社会は、未だその客観的な発展段階からして、不十分なものであろう。そこには様々な矛盾がある。そうした事態は、とくに若者たちには、不満の意識を醸成しよう。青年たちの不満の意識は、社会主義社会そのものへの疑問につながったり、社会主義社会建設への無関心、無感動を生み出しやすいであろう。このような事実はしばしば報道されている。このような青年たちを、個人的利害のみを求める行動に向かわせたり、「自由」を求めて外国に亡命させたり、あるいはまた社会主義社会転覆の実際行動に走らせたりしないためには、何が必要だろうか。これらの若者たちに社会主義の優位性を確信させ、社会主義社会建設に創造的エネルギーを発揮させるためには、どのようなことが行なわれねばならないだろうか。教育によって、必然性を洞察するよう促しても無駄である。彼等は、そのような教育を既に受けていよう。残されている手段は、自己教育であろう。自分で考え行動し、試行錯誤し、その中から自分で確信をつかむ以外に方法はない。そのためには、資本主義と社会主義とを、自ら比較しうるために、外国の書物、新聞、放送が自由に入手できなければならないし、外国への移住と帰国の自由がなければならないであろう。その上で、完全な言論、出版、結社の自由、討論と批判の全き自由が保障されていなければならない。そのような大らかな自由があって、はじめて若者達は、まさに自由に自己を全面的に発展させつつ、自らの確信によって社会主義を選択するであろう。若者に限らず、人々が社会主義社会にあって、日々社会主義を選択し直す^をということが、社会主義の発展にとっては必要である。上述の諸自由の制限は、それを妨げる方向に作用しよう。外

国からの書物や新聞を取捨選択して、国民が自由に読むことを禁じたり、権力機関が洞察したものだけを新聞や放送で流して、国民の目と耳を封じたり、自分に都合の悪い批判は反革命として弾圧したり、うさん臭い結社は禁じたり、官製の集会、行進以外は鎮圧したり、このようなやり方では到底駄目であろう。即ち、既に必然性は洞察された、これに間違いはない、これに従って行動することが自由だ、それ以外のことは何ら見聞するに及ばないし、まして実行する必要はない、それは不自由を帰結するだけだ、改めて、一人ひとりが必然性の洞察を自分でやり直すことは無用だ。こういうことでは、人々の、とりわけ若者のエネルギーを引き出すことはできない。次代を担う青年に大らかな自由を保障しないで、どうして人々に生きる喜びを与えながら、社会をダイナミックに発展させることができよう。だが、これまで検討してきた所謂「哲学的」自由論からは、必然性の洞察を、ただ一方的に上から要求するという方向しか出てこない。

(二) 西側からの批判——バーリンとクランストン

さて、以上のような東側の自由論に対して、西側の論者はどのような批判を加えているであろうか。バーリンは、マルクス主義自由論を批判の対象の一つとして念頭におきながら、次のように論ずる。即ち、自己支配としての積極的自由は、次のごとく魔術的に変換される、自己支配→真の自我による支配→自己がその一員である社会的全体の意志の支配、こうである。かくして、理性的な、目標を認識した人による支配と抑圧が、自由と同一視される²³⁾。自己支配としての自由を求める思想家の「想定は次のようなものである——われわれの『真』の本性の理性的な目的は一致しなければならぬ、……自由とは、非理性的なこと、愚かしいこと、あるいは悪いことをする自由ではない。経験的な自我を正しい鑄型へと押しこめることは圧制ではなく、解放なのだ」²⁴⁾。かくて、理性的目的を認識したエリートによる教育、強制が、自由だとされるに至る、こうバーリンは語る。そして彼は、このような主張の根底には、「自由を達成

する唯一の真の方法は、批判的理性を用いて、必然的なものと偶然的なものとを理解すること」²⁵⁾、その必然性と自己とを同化することだ、という認識がある、と指摘する。

バーリンの自由論が断定するような、積極的自由の魔術的変換は、積極的自由の論理自体によって、いつでもどこでも必ず生ずる、とは言えない²⁶⁾。だが、スターリン以来のソ連の官僚主義政治、またその大国主義的対外政策、アフガニスタン、ポーランド、チェコ事件等を考える時、歴史的には、そのような変換があったということは否定できないであろう。そして、自由とは必然性の洞察とそれにもとづく行動だ、とする認識を哲学的基礎として、唯一つの「最適の選択項」を人々に強制することが人々を自由にする、こうした政治的实践が行なわれてきた、このことも疑いのないところではなからうか。

クランストンも次のように述べている。即ち、マルクス主義哲学においては、自由とは必然性の認識である、と²⁷⁾。そして「実際政治の領域においては、マルクス主義者の提供する『自由』は、『強制的』自由である。マルクス主義国家の市民やマルクス主義政党の党员にとっての『必然性の認識』とは、実際には、『命令にたいする服従』である」²⁸⁾。

このクランストンの指摘は、正確ではない。つまりマルクス主義哲学においては、自由は「必然性の認識」ではない。それはヘーゲルの自由概念である。また「マルクス主義国家」「マルクス主義政党」のすべてが、「必然性の認識」を強制したり、命令に対する服従を要求したりするわけではないからである。国家や政党が、マルクス主義にもとづいているものである場合には、必ずそうするのだ、とは言えないからである。ただ、「洞察された必然性」と称するものを強制する「マルクス主義」国家と「マルクス主義」政党が存在したし、現存していること、その政治的実践の理論的基礎に、エンゲルスの自由概念がある、このことは事実である。この事実によって、クランストンの指摘が、多くの人々にとって、説得力をもつものとなっているのである²⁹⁾。

以上、(一)(二)節において、筆者は、エンゲルスの自由概念にもとづく自由論では、現代自由論に要請されているものに応えることができないこと、個

人の自由を理論的に基礎づけることができないこと、そればかりか、個人の自由を理論的にも、実践的にも否定する結果を導かざるをえないこと、これらの点を論証してきた。

(三) ソ連における再検討の試み——ムィスリフチェンコの自由論

第(一)節で検討した自由論の不十分さを認め、これを再検討しようとする試みは、東側にも存在している。本節では、ソ連の一著作³⁰⁾を取り上げて、それが効果的再検討たりえているかどうかを検証しよう。

この論者の出発点は、次のような問題意識である。「長いあいだ、マルクス主義哲学の文献では、自由の問題は、主として、一般的な社会的、歴史的な局面で、すなわち、多数の人民大衆の生活における自由と必然性との相互関係として分析されてきたのであって、客観的必然性と相互連関のなかでの、個々にとらえられた人格の自由の内的メカニズムは、まったく不十分にしか研究されてこなかった。だが、じつは、自由の主体と担い手となるのはまさに人格にほかならない。それゆえ、人間は、かれ自身のあらゆるふるまいにさいして、あれこれ選択をおこない決意をするよりもまえに、客観的現実の合法則性の一定の総和を科学的に認識しなければならないとか、認識された必然性としての自由という公式が、人間の自由のどんな表出をも、人間によるあれこれの行動様式の選択をも説明するのに十分であるとか、そのように考えるとすれば、正しくないであろう。」³¹⁾そして、必然性と個人との関係について、彼はこう指摘する、「経済的必然性、社会的発展の諸法則がけっきょく自己の途をつらぬくが、おのおのの個々の場合ごとではなく、多数の個人的決意をとおしてつらぬくのである。そのさい、人々はこの外的必然性にならずしもつねにおのずからしたがうわけではなく、この外的必然性を支持したり、それに反抗したりするのであり、まさにそれによって、自分の意志の自由と自覚とを表出する」³²⁾。このように、彼は、個人の内的自由の存在を事実として肯定し、マルクス・レーニン主義の古典家たちが、「内的に自由に、自立的に、強いられて

ではなく、自分の信念にしたがっておこなうということも、自由の一部である」³³⁾と強調していた点に言及しつつ、この内的自由の分析に進んでいる。

まず第一に、彼は、内的自由の観念的前提として、人間の認識活動をあげている。「われわれが周囲の現実をいっそう認識すればするほど、それにかんするわれわれの観念がいっそう正しくなればなるほど、われわれはこの現実を実践的にわがものとして獲得するなかで、より大きな自由を達成する。個人の自由は、……事柄についての知識をもって決意する能力のうちにある。」³⁴⁾ このところは、(一)節で検討した自由論と同じである。だが彼は次のように続ける、「しかし、認識された必然性としての自由という……規定は、その基礎においてはむろん論議の余地なく正しいけれども、とくに自由の主観的・道徳的側面、個人の内的行為としての自由という側面を考察する場合には、けっしてこの問題性のもつあらゆる複雑さをつくしてはいない。……外的必然性の認識は自由の必要条件ではあるが、しかし、けっしてつねに十分条件とはかぎらない」³⁵⁾。そして、彼は次のように問答する、「ある特定の行為の外的諸条件、必然性を認識すれば十分であり、そうすれば人間は自由な選択をおこなう可能性がえられる、と断言できるのか。あるいは、そればかりでなく、認識された客観的諸法則にもとづいて人間がおこなう選択はつねに現実には自由である、と断言できるか。もちろん、否である。なぜなら、外面的には自由であるようにみえる(客観的必然性の認識と考慮にもとづいてなされるかぎり)選択が、じっさいには、もっと検討してみるならば、選択が人間の内的信念、かれの良心、個人的利害にさからってなされたために、不自由であることがわかるという状況もありうるからである」³⁶⁾。こうして、彼は、内的自由の次の構成部分として、「現実には自由な選択とは、選択によって決定される内容が同時に、なにか人間にとって外的で疎遠なあるものではなく、人間の内的な願望と合致しているような、選択である」³⁷⁾、こう指摘する。筆者は、この指摘は極めて重要だと考える。これは、各個人は外的必然性の認識に反抗する場合があることを、事実として肯定しているばかりか、個人が内的信念によって、自立的に選択し行為することを、自由の一部として積極的に承認している。なるほど、選択さ

れた価値が現実実現されるためには、即ち実現可能性の契機を含んだものであるためには、正しい認識、事柄についての知識にもとづく選択と行動が必要である。しかし、その選択が、当の個人以外の他の何ものかによって、押し付けられたものである場合には、その個人は、それを不自由と自覚する。正しい認識にもとづかない選択であっても、当の個人の内的願望と合致したものであれば、個人はそれを自由として自覚する。これを個人の自由の一部として重視し、これを保障する必要性の認識が、上の指摘には含まれているのである。アフガニスタンの例で考えてみよう。アフガニスタンの民衆にとっては、王制、封建制からの解放は、即ち民主主義革命と民主主義社会の建設とは、自由として、自由の増大として自覚されよう。だが、そのように自覚されるためには、革命と建設とが民衆自身によって選択されたものとして、民衆が自ら選んだ仕方になされねばならないであろう。たとえ遅々とした歩み、時には後戻りしながらの試行錯誤ではあっても、自分達で考え、自分達で実行する、このような自由がなければ、革命と建設は成功しないであろう。他国ソ連が洞察した仕方を、軍隊を送り込んで、アフガニスタン民衆に強制するならば、民衆はこれを不自由と自覚し、これに対する反抗を自由と感ずるであろう。圧倒的なソ連軍に対する反抗を成功に導くために、民衆は、王党派とも貴族勢力とも手を結び、武器援助を求めて核発射型権力にも接近しよう。こうした事態は、当初の民衆の目的、王制、封建制からの自由を、その実現を遅らせるに至るであろう。国際社会における自由の権利、即ち民族自決権は、このゆえに原則として、侵犯されてはならないのである。つまり、自分達の社会と政治のあり方と発展方向は、自分達で決定する、たとえ他国からみて、必然性を洞察せざるものであっても、自分達の事業を自分達で試行錯誤を続けながら推進する、この自由の承認と保障が不可欠なのである。その中から必然性は洞察されようし、それこそ人々の確信となって、社会発展のための不動の基礎、エネルギーの源泉となるのである。国際社会における民族自決権は、一国の内部では、各個人の自立の権利である。ある個人の認識と選択とが、客観的にみて必然性の洞察にもとづかないものであったとしても、それは個人の自由の不可欠の一部として保障さ

れねばならないのである。

ところで、この論者の内的自由の承認と保障の観点は、最後まで貫かれているだろうか。この点を次に検証しよう。この著者は、次にこの内的自由と道徳との関連について論じている。「人間はもちろん、自分のふるまい、選択の自由を、自分の真実性、自分の良心と一致させなければならない。ただ、全問題は、この個人的真実性の内容が善悪の客観的基準と矛盾しないということにある。」³⁸⁾ つまり、個人の選択は、当の個人の内的願望と一致している場合は、一応自由だと言えるのだが、もう一点、その個人の内的願望の内容が、社会的な道徳基準からみて善でなければ、真の自由とはいえない、というのである。なぜなら、彼は続ける、「内的自由は、それ自身のなかに、選択をおこなう個人のモチーフの誠実と誠意を含んでいる。しかし、人間の内的世界は外的なものから孤立してはおらず、一定の社会的環境の影響のもとで形成されるのであって、結局のところ、人間のモチーフは階級的利害によって制約されている。それゆえ、あれこれの選択の評価にさいしては、これらのモチーフの社会的方向、つまり、誠実と誠意が客観的に何に奉仕しているか、つまり、社会進歩に奉仕しているか、それとも反動勢力に奉仕しているか、ということを考慮にいれなければならない」³⁹⁾。このように、選択の自由の問題が、道徳的評価の問題と結びつけられ、個人の内的願望が、道徳的に社会が善と評価できる内容をもっていれば、即ち進歩勢力に奉仕している時には、その選択は自由であるとされている。ここからは、第(一)節で述べたように、「勤労者の利益に」奉仕するものに限って、言論、出版、集会の自由を保障するという論理しか出てこないのではないか。言論、出版等の自由を保障することが、「勤労者の利益に」奉仕することになるという観点は導き出せない。民族自決権、個人の自立としての自由権が、ここでは、同じ論者によって、道徳的評価という視点を持ち込むことによって、否定されている。彼は続けて語っている、「個人の自由が、さまざまな積極的価値の基礎であるのみならず、不公正、無原則、非道徳主義と結びつくいっさいのものの基礎となりうる以上は、自由な自立的な選択という事実それ自身は、人間のふるまいを道徳的に評価するための唯一の原則

とはなりえない。それゆえ、マルクス主義理論は、内的自由、選択の自由の問題を、人間が選択する価値（積極的価値または消極的価値）の客観的内容と、人間のモチーフの社会的意義と方向性の評価と結びつける」⁴⁰⁾。なるほど、自由な自立的な選択というだけでは、道徳的に正しいとも間違っているともいえない。そもそも、それらは別の事柄である。自由と道徳的評価とは、別種の問題である。自由な選択であれば、道徳的に善であるとは言えず、また道徳的に正しい選択であれば、自由だとも言えないのである。それらは予め結びつけてはならない問題である。人間は、自己の内的願望によって、自分にとっての価値を選択し、実現しようと努力する。これが自由である。そして、自分自身でそうしたのであるがゆえに、彼は、自己と社会とに対して責任を負うのである。つまり、その選択と実行とが正しい認識にもとづいていなかった場合には、失敗として、それらが社会的評価を得られない場合には、非難として、責任が自分にふりかかってくるのである。こうして、彼は正しい認識と、社会の中で自分の占める位置、果たすべき役割の認識とを獲得していくのである。ところが、予め個人の選択と道徳的評価とを結びつけ、道徳的に善なる選択、即ち進歩勢力に奉仕するような選択に、個人の選択の範囲を押しこめるなら、自由は窒息死しよう。もちろん、こう言ったからといって、筆者は、個人の自由にいかなる枠をはめてはならない、と主張しているわけではない。他人を殺したり、搾取したりする自由は、個人にはない、あってはならない。なぜなら、そのような行為は、他の個人の自由を否定するもの、他の個人の自由の障害となるものだからである。これを一般的に言うと、対立的な価値の選択と実行は、制限ないし否定されなければならない、という命題となる⁴¹⁾。だが、この点をこえて、進歩的階級の利益に奉仕しているか否かという点に、道徳的善悪の基準を設け、この枠内に自由を限定するなら、社会発展に不可欠の伸びやかな自由は失われよう。しかし、まさにこの論者は、このような道徳的基準を設定し、こう語る、「無政府主義的、無責任な『自由』、なにによっても正当化されない『自由』は、もはやこの言葉の真の意味で自由ではなく、恣意にすぎない。……真の自由は、社会にたいする個人の道徳的責任と道徳的義務という条件のもとで

可能である」⁴²⁾。こうして、この論者ムィスリフチェンコは、個人の内的自由の構成部分として、まず個人にとっては外的な、必然性の認識をあげ、次いで個人の内的願望の重要性を指摘し、更にこの内的願望が、個人にとってはやはり外的である場合もある、社会的道徳的な基準に合致することの必要性を論じ、結局のところは、自由の問題における、個人の内的願望の重要性を葬り去っているのである。もはやムィスリフチェンコには、必ずしも必然性の洞察にもとづくわけではない個人の選択の自由を、これも人間の自由の一部として、積極的に認め、保障しようとする見地はない。社会主義を批判したり、時の政府を批判したりする自由などは、恣意にすぎないのであって、何ら「真の」自由ではない。従って、これを社会発展に不可欠のものとして、保障する必要はいささかもない、とされたのである。このように、ムィスリフチェンコは、個人の自由における、内的なものと外的なものとの一致の問題を、外的なものを優先させること、外的なものに内的なものを一致させることで解決している。そして、彼は、そのことの客観的基礎が社会主義社会にはあるのだ、と語る。つまり社会主義社会にあっては、社会的利害と個人的利害とが一致しているからだというのである⁴³⁾。もともと個人的利害、個人の内的願望は、社会的利害と一致しているのだから、ことあらためて個人の内的願望にもとづく選択の自由を保障する必要はない、というのである。だが、彼にあっては、「社会主義のもとでの、個人と社会、個人的利害と社会的利害との統一は、これらのあいだにおける若干の矛盾と葛藤の可能性を排除するものではない」⁴⁴⁾とされ、その矛盾を生み出す客観的諸条件として、都市と農村、知的労働と肉体的労働の区別や経済的不平等が存続している社会、及び人々の社会主義的意識の不十分さをあげている⁴⁵⁾。客観的諸条件が矛盾を生み出しているのであれば、なおのこと個人の言論、批判の自由を保障することによって、対立と相互批判の中から、矛盾の解決と躍動的な社会発展がもたらされるのではなからうか。だが、ここではムィスリフチェンコには、個人の自由を重視する視点は全く消え失せている。矛盾の解決は、社会の指導者の洞察に委ね、個人はそれに従っていればよい、というわけだ。なぜなら、彼にあっては、「個人と社会とのあいだの矛盾

は、個人が社会に損害を与える時に生じうる」⁴⁶⁾ のであって、社会が個人に損害を与えることは考慮に入れられていないからである。社会が個人に損害を与えるのではないから、個人の批判の自由は問題にならない。個人が社会に損害を与えたのだから、個人には唯々反省あるのみである。即ち「ときどき生じてくる葛藤しあう状況は、社会主義的諸関係の発展、個人的利害にたいする社会的利害の優位についての個人による自覚、教育と自己教育の過程で、解決される」⁴⁷⁾。

こうした観点は、内的自由の第三の構成部分として、ムィスリフチェンコがあげる「選択の行為それ自身」⁴⁸⁾ にも貫かれている。「個人は、社会的に制約されているとしても、同時に創造の自由と価値・目標・見解のあれこれの体系を選択する自由をもっている。こうした見解が個人を一方の人々と結びつけ、他の人々からひき離す。」⁴⁹⁾ このように、彼は、まず一応は個人の思想、価値選択の自由を承認する。次に彼は「真の」自由について語る。「社会主義のもとでも、若干の人々にとっては、内的自由は、かれらの意識がまだ非科学的な、神話化された、またはたんに凡俗な信奉者の観念から解放されなかったために、制限されている。」⁵⁰⁾ 彼らには「真の」自由はない。「客観的必然性・社会史の基本的な合法則性と社会発展の機熟した要求との担い手である進歩的階級の見地にたつ必然性・の認識にもとづく選択のみが、真に自由な選択であろう。」⁵¹⁾ もちろん個人の選択は、それが実現可能性の契機を含みうるためには、客観的必然性の認識にもとづいている必要がある。だが、実現可能性の契機を含まない選択は、「真の」自由ではないとするならば、個人の自由の不可欠の一部である思想の自由、価値選択の自由は、直ちに否定されよう。そればかりか、正しい認識にもとづいた選択の実現の道も閉ざされよう。なぜなら、「真の」自由をもたらない選択、これの自由を保障する必要性は否定されるであろうから。また正しい認識の強制は人々の反発を招き、かえってその認識とは逆の方向に人々を追いやる場合があるから。そして最後に、その正しい認識の「正しさ」は、人々の批判の自由にもとづく自発的同意によってしか保証されないからである。もし言論表現の自由、批判の自由がないなら、誰が客観的

必然性の洞察の「正しさ」を担保するのか。間違っていた時には、どのようにして、誰が正すのか。これでは、所謂「真の」自由は保障されないであろう。こうした危惧は、ムィスリフチェンコがチェコ事件を例にあげて語っているところで、一層深いものとなる。彼は、社会主義のもとでも、進歩勢力と反動勢力とのあいだで、個人が選択をしなければならない状況がありうるとし、その一例が1968年のチェコ事件だとしている。そして、彼は、ソ連やワルシャワ条約機構諸国の選択が、「真に」自由な選択であり、ズボボダやドプチェクの選択は、幻想的选择あるいは恣意だとする見地に立っているのである⁵²⁾。

以上の如く、ムィスリフチェンコは、道徳的基準や「真の」自由の視点に立って、結局個人の自由や民族自決権を否定し、時の「社会主義」政府に従うことが自由だと結論づけたのである。彼の自由論も、第(一)節の自由論の不十分さを克服できなかった。これは、エンゲルスの自由概念を自由そのもの、真の自由とする思考伝統から、直接論理的に出てくる帰結である。

(四) 日本における再検討の試み——鯨坂真氏の自由論

同じ問題についての、日本の論者による再検討を見てみよう⁵³⁾。鯨坂氏も、ソ連における検閲制度の存在やソルジェニツィン問題の原因として、ソ連の哲学的自由論をあげている⁵⁴⁾。ソ連ばかりか、日本でも従来のマルクス主義的な哲学的自由論においては、「社会主義的自由は、『必然性の洞察』としての自由であるから、『無制限の自由』『無政府主義的な自由』ではない」とされてきた⁵⁵⁾。この自由論が、上述の事柄の原因の一つである。このような反省に立って、彼は、『必然性の洞察』としての自由という論理だけでは、今日の自由をめぐる諸問題に対処するには不十分であるとする立場から、この自由以外に、個人の内面の自由、市民的自由という契機をも重視しなければならない、と考えている⁵⁶⁾。そこで彼は、秋間氏⁵⁷⁾に倣って、「必然性の洞察としての自由」、即ち「必然性の洞察にもとづく、自然と社会とに対する支配としての自由」(鯨坂氏は「必然性の洞察としての自由」という表現を頻繁に用いているが、前後

の文脈からみて、「自然と社会とに対する支配」の部分をも含むと解されるので、このように言い直した。但し、「必然性の洞察としての自由」という表現は、誤解を生みやすいので、注意が必要であろう。その誤解の上に立って、「必然性を認識すれば、自由になれると考えるマルクス主義者……」, この手の非難が繰り返し加えられているからである⁵⁸⁾。)を自由Ⅰとし、「人間の個人的意志決定の自由」を自由Ⅱとして、この両者の区別と連関を明らかにする必要性を確認する⁵⁹⁾。そして彼は自由Ⅰを本質、自由Ⅱを現象ととらえる⁶⁰⁾。諸々の自由Ⅱは、自由Ⅰの多様な現象形態であって、この多様な現象形態の根底にあって、不動の統一性をもったもの、これが自由の本質としての自由Ⅰであり、また本質的自由としての自由Ⅰは、個々の自由Ⅱという現象を通してしか発現しない、と考える。また彼は、この本質とは、根拠、基礎、前提というのと、内容的には同じものだとする⁶¹⁾。このような説明は、人間の自由という概念を明確にし、自由についての一つの尺度を求めるのに役立つであろうか。個人の自由の承認と保障のための理論的基礎づけたりえているであろうか。そもそもそのような解釈は理解可能であろうか。自然と社会の客観的な発展法則が本質であり、自由Ⅱがその現象だというのなら、分かる。即ち運動する物質としての自然と社会、これを支配する法則が、人間の認識と行動の基礎、根拠、前提として、人間を規定している。だが、これらの発展法則は、直接的に個々人の認識と行動を制約して、自己を貫徹するのではない。これらの発展法則について無知であったり、認識していてもそれに反発したり、そのような多様な諸個人の価値選択と行動を通して、結局のところ発展法則は貫徹するのである。ここに個人の自由が客観的に存在する根拠がある。だが、鯨坂氏にあっては、発展法則ではなく、その認識にもとづく支配、即ち自由Ⅰが自由Ⅱを通じて現象するのである。なるほど諸個人は、自由に選択した価値を実現させるためには、自然と社会の発展法則を認識し、これにもとづいた行動をすることが必要である。つまり、自由Ⅱの中味が実現可能であるためには、発展法則を認識し、自然と社会とを支配しなければならない。この意味でなら、即ち自由Ⅱが実現可能性の契機を含みうるためには、自由Ⅰが必要だ、従って自由Ⅰは自由Ⅱの基

礎、根拠である。これなら理解できる。しかし、このことと、自由Ⅰが自由Ⅱの本質であると言うのとは、意味が異なる。なぜなら自由Ⅱが自由Ⅱたるゆえん、つまり自由Ⅱの核心、自由Ⅱの本質は、発展法則について無知であったり、必然性の洞察とは対立する選択と行動、従って実現可能性の契機を含まない選択であっても、それが自律的になされた選択であれば、それは個人の自由だとする点にある。このような個人の自由が事実として存在することを認め、これを肯定的に積極的に保障しなければならないという観点があるからこそ、自由Ⅱを自由Ⅰと区別して論じているのである。だが、自由Ⅱは自由Ⅰという本質の現象だとすると、どうなるであろうか。「必然性の洞察にもとづいて、自然と社会を支配する自由」は、「必然性を洞察しない自由」「洞察された必然性に反抗する自由」として現象する。こういうことにならないだろうか。だが、このような説明は一体理解可能だろうか。自由Ⅰを自由の本質とする立場から、果たして自由Ⅱを保障しなければならないという観点は出てくるであろうか。必然性を洞察しない自由も、それはそれとして、つまり人間の自由の不可欠の一部分として大切だ、人間の尊厳にとって必要だとする主張は導き出せないのではないか。あるいは、鯨坂氏の真意が、上述のように自由Ⅱは自由Ⅰなしには実現されえない、という点にあるとするならば、つまり自由Ⅱが実現可能性の契機をもつためには自由Ⅰが必要だ、この意味で自由Ⅰが自由の本質だと言っているのだとしよう。氏は次のようにも語っている、「人間は自然、社会および心理的な必然性にさからって自由を獲得するのではなく、逆にそれらの必然性を認識することによって自由を獲得する」⁶²⁾、また「われわれにとって、自由の問題の基本は、たんなる内的主観的自由、『意志の自由』『選択の自由』の問題ではない。それはあくまで社会的・歴史的な問題である。客観的必然性、社会発展の法則的必然性を正確に認識し、これにしっかりと立脚してこそ真の人間の自由(鯨坂氏が「真の」自由について語っている点に注意!)はありうる。個人にかかわる自由、いわゆる基本的人権にかかわるような自由(思想・信条・言論・出版・集会・結社の自由など)もこのような客観的法則性にもとづく社会的歴史的な認識、エンゲルスのいう『必然性の洞察』としての自由を

基礎あるいは根拠として、はじめて実現される」⁶³⁾ (ここでも「必然性の洞察」が自由として語られているが、不用意な表現だ。それは、思想形成の局面及び価値選択の局面における、一つの自由、即ち無知からの自由にとどまる。人間の自由には、その同じ局面における他の自由、即ち権力や物質的障害からの自由があるし、更に行動の自由という局面がある⁶⁴⁾。従って「必然性の洞察」だけで、自由が獲得できるわけではない。それとも、氏の真意は、文字通り「必然性の洞察」が自由だとする点にあるのだろうか。そうだとすれば論外である。なぜなら、それは、人間の自由を、ある局面の中の一つの自由にすぎないものに、限定してしまうことになるからである。そして、その限定された自由を自由Ⅰとし、自由の本質だとしてしまう結果となって、氏自身が重視する、自由の実現の局面が含まれないことになるからである。あるいは、まさに氏は「必然性の洞察」を自由だと考えているのかもしれない。だからこそ、自由Ⅰが自由Ⅱという形態をとって現象する本質だ、ととらえることができたのかもしれない。というのは、諸々の個人の自由、意志、選択の自由、言論、批判の自由、即ち自由Ⅱを通して、「無知からの自由」、即ち自由Ⅰが現われるからである。これなら、その通りである。そしてまた、ここには、個人の自由を保障しなければならないという観点が含まれてもいる。だが、こうして得られる自由は、「無知からの自由」にとどまる。これは、人間の自由の他の部分、他の局面を含んではいない。自由の中味を実現する行動の局面が含まれていない。そのような自由を自由の本質と語るとは、「本質」という語の濫用ではないか。)。ここでは、個人が自律的に選択し、行動する自由といっても、それが実現可能でないなら、それは抽象的、観念的な自由、つまりたんなる主観的自由にとどまる、自由Ⅱが実現可能であるためには、自由Ⅰが必要だ、と語られている。この意味で自由Ⅰは自由Ⅱの本質だ、これなら理解できる。しかし、こういう意味で自由Ⅰが自由の本質だとしても、問題は残る。つまりこのような論理では、例えば社会主義社会において社会主義を批判する自由、即ち自由Ⅱはどのようなだろうか。社会主義社会では、社会主義を批判する自由は、自由Ⅰと矛盾する。即ち、社会主義社会は共産主義社会へと発展する、この発展法則を洞察

して、自然と社会を支配する、つまり共産主義社会建設の事業に従事する、これが、この場合の自由Ⅰである。社会主義社会を否認する自由は、この自由Ⅰと対立している。この場合でも、自由Ⅱは自由Ⅰによって獲得される、というのか。社会主義を批判し、それを行動に移し、実現する、つまり社会主義社会を破壊して、何か別の社会に改造する、このような自由Ⅱの実現は、共産主義社会建設の事業に邁進するという自由Ⅰによって、獲得されるか。そんな馬鹿なこととはなかろう。だとするならば、一般に自由Ⅰと対立するような自由Ⅱは、自由ではないもの、例えば自由の「仮象」「幻影」「擬態」⁶⁵⁾として否定されるか、それとも、実現可能性のないような価値の選択と実行は、無意味なのだから、これを自由権として保障することなど不必要だ、とされる以外になかろう。実現可能性の契機を欠いた、諸々の個人の自由Ⅱは、なるほどむなしい。だが、実現可能性の契機を不当に強調して、これを自由の本質、自由Ⅰとし、これによって「真の」自由が得られるのだとすると、自由Ⅱは軽視されるか、否定される結果をもたらすばかりでなく、自由Ⅰの強制を招来することになりかねない。なんとなれば、自由は実現されねば無意味だ、実現のためには自由Ⅰが必要だ、従って自由Ⅰが自由の中で最も根本的なものだ、ところで社会主義社会とその共産主義社会への発展自体は既に洞察された必然性だ、だからこの必然性に従った価値選択と行動のみが、真の自由を実現するのだ、社会主義を批判する自由などは、洞察された必然性に反するものであって、建設的批判ならばともかく、否定的批判は自由とは認められない、むしろ、そのような自由は抑圧し、自由Ⅰを強制することが、人々に真の自由を保障する所以である。こうなるであろう。これでは、未だ洞察されていない必然性、例えば社会主義が共産主義へと発展する具体的な道筋、その途上に現われるであろう諸々の困難の解決方法、これらの洞察もおぼつかないであろう。なぜなら、こうした事柄の洞察には、研究、言論、批判、試行錯誤等の全き自由が不可欠だからである。

以上、鯀坂氏の「本質—現象」自由論の分かりにくさ、あるいは理解できるものとしても、そこから出てくる問題点、これを考察してきた。この考察で示

された、この自由論の難点は、そもそも自由を「本質—現象」というカテゴリーでとらえることの無効さを、証明しているのではなからうか。氏自身も、自由Ⅰと自由Ⅱとを「さしあたり『本質—現象』というカテゴリーでとらえなおしてみることが有効ではなからうか」⁶⁶⁾と述べ、本質と現象との哲学的連関を、そのまま自由に宛がってみただけで、それほど確信をもって展開しているわけではない。この「本質—現象」というカテゴリーで、自由をとらえることから生ずる困難は、次の点に明白にあらわれる。即ち、氏は「本質は現象しなければならないが、しかし本質はかならずしも直接にありのままに現象するわけではない、……直接にあらわれた事物の姿である仮象を本質の姿であると思い誤ってはならないであろう」⁶⁷⁾と言い、仮象の一例として「搾取の自由」をあげている。「人類史の視野で自由の本質の発展過程を考察するとき、『人民の自由』こそ全人類の自由の発展方向にそった自由であり、『搾取する自由』のごときはなんら真の自由の名に値しないものであって、自由の仮象、自由の擬態、自由の幻影としかいいえないものである。もちろん仮象にもそのような姿をとらざるをえない客観的根拠はあるのであって、存在しない事態が幻のように見えているわけではない。『搾取する自由』はなんら真の自由ではなく、自由の仮象にすぎないものではあるが、資本家はこの『自由』を現実に行使しているわけであり、存在しない事態なのではもちろんない」⁶⁸⁾、こう彼は述べている。これは実に苦しい説明ではなからうか。自由Ⅰは自由の本質である。本質は現象しなければならない。諸々の自由Ⅱを通して発現しなければならない。だが、自由Ⅰと矛盾するような自由Ⅱはどう位置づけるべきか。搾取の自由、信教の自由、社会主義を批判する自由、これらの自由は、自由Ⅰ、つまり資本主義から社会主義、さらに共産主義へと社会は発展する、この法則を認識し、その法則に則って社会を改造する、このような自由とは対立する。だが、本質は直接ありのままに現象するのではないのだ。しからば自由Ⅰと矛盾する自由Ⅱは、自由の幻影であって、真の自由なんかではないのだ。もちろん幻だといっても、存在しないものではない。仮象にも客観的根拠があるのだ。こういうことである。この説明は、なんともし訳の分からない判じ物ではなからうか。信教の自由、

社会主義を批判する自由は、自由の仮象であって、なんら真の自由に値しないのだろうか。そうだとすれば、社会主義社会では、それらの自由は認められないことになる。なぜなら、宗教などは科学的認識に反するものであり、社会主義批判も既に洞察された必然性と相容れないものであり、いずれも「人民の自由」たる自由Ⅰに反しているからである。このような自由は一切禁止して、洞察された必然性に従うよう強制することが、手っ取り早く人民に真の自由を保障する道だ。こうなるだろうからである。また一体搾取の自由は仮象なのだろうか。資本家階級の搾取の自由こそ、封建社会から資本主義社会への移行、資本主義社会自体の発展、更には結局のところ社会主義社会がそれにとってかわる、このような発展の起動的原因とも言えるものではないか。資本家階級にとっては、まさに搾取の自由こそ、擬態どころか、真の自由であって、彼らのその他の諸自由、政治社会支配の自由や生活上の様々な自由を彼らにもたらす根源なのであり、法律上も実態としても明確に、そして確固として保障されているのである（もちろん、資本家階級も、搾取の自由のゆえに、資本主義経済の諸法則から自由ではありえないし、社会の社会主義社会への移行を永久に阻止する自由はないのであるが）。資本家階級のこの自由が、他の人々の自由と対立しているのである。搾取の自由は、他の人々にとっての障害だからである。こうして搾取の自由と搾取からの自由の対立関係の中から、まずは人民の自由が、部分的に法律的形式において制度化され、終には実態として獲得される地点にまで、歴史はつきすすむのである。自由と自由の対立の弁証法が、歴史を動かすのである。だが鰐坂氏にとっては、自由Ⅰが自由の本質である。従って自由Ⅰに合致した自由の現象だけが、自由Ⅱである。その他は自由の幻影である。幻影は保障するに及ばない。従って社会主義社会では、社会主義批判の自由も信教の自由も保障されない。それらは自由Ⅰに合致しない自由の幻影だから。しかし、そのような社会主義社会は躍動的発展を望めるか、そのためのエネルギーを人々から引き出すことができるか。思うに、鰐坂氏は自由ならざるものを自由とし、しかもその自由を自由の本質としたことで、迷路に踏み込んでしまったのではなかろうか。この点の説明は第(五)節で行なおう。

鯨坂氏の自由論に今少し付き合ってみよう。彼は次に「内容—形式」というカテゴリーを自由の問題に当てはめている⁶⁹⁾。彼は語る、「この内容というカテゴリーを用いることによって自由という理念はいっそう明らかになるだろう」⁷⁰⁾。果してそうだろうか、検証してみよう。結論的に言って、彼がここで主張しているのは、必然性の洞察とそれにもとづく自然と社会とに対する支配、つまり真理の発見とその実践への適用とは、意志の自由、選択の自由、言論表現の自由等、個人的市民的自由の徹底した保障なしには、不可能である、このことである。それゆえ検閲制度などはあってはならない。全くその通りである。これなら、何の異論もない。しかし、彼にあっては、「必然性の洞察にもとづく支配」は、自由の真の内容、自由Ⅰである。諸個人の自由に実質を与えるための手段ではなく、自由そのもの、最高次の「真の具体的自由」⁷¹⁾である。こうなると問題が生ずる。このように言い換えられると、理論的にも実践的にも、個人的市民的自由は軽視されるか、無視されるほかないであろう。即ち、社会主義社会においては、人民の真の自由、具体的自由は「必然性の洞察にもとづく支配」である。社会主義社会は、いわばこの自由の具現、自由そのものである。社会主義建設の事業もまた、「必然性の洞察にもとづく支配」そのものであって、まさにそれが人民の自由なのだ。所謂自由Ⅰを自由そのものとする立場を論理的に展開すると、このようになるであろう。他方で個人的市民的自由、即ち自由Ⅱは抽象的形式の自由だとされている。ここからは、自由Ⅰに反する自由Ⅱ、社会主義とその建設の事業を批判する自由といえども、徹底して保障しなければならぬという命題は出てこない。検閲制度が出てくるだけである。けだし、人民の真の自由と、社会主義を批判する抽象的形式の自由とが比較考量されれば、どちらが優先されるかは自ずから明らかであるから。彼は、ヘーゲルを引用しつつ、「内容—形式」という哲学的カテゴリーについて説明し、内容と形式とが相互依存の関係にあるとし⁷²⁾、内容はそれに適合した形式をもたねばならず、その形式は、それなしには内容もありえないような形式である、と説く。そして、このカテゴリーを自由にあてはめ、自由Ⅰを内容、自由Ⅱを形式だとする。内容・自由Ⅰは、形式・自由Ⅱを不可欠の前提と

する⁷³⁾。最高次の真の具体的自由の位相、即ち自由Ⅰは、最低次の極めて抽象的、形式的な、内容の最も貧しい自由の位相、即ち自由Ⅱをとおして発現する⁷⁴⁾、というのである。ここからも難問が生ずる。自由Ⅰは自由Ⅱなしにはありえない。だが自由Ⅱは無内容な形式である。無内容な形式から、真の自由が生じうるか。というのは、無内容な形式と鯉坂氏が言う場合、この「内容」とは、自由Ⅱの現実に行使しうる程度を意味しているからである。彼は、資本主義社会における個人的市民的自由は無内容な形式だと語っている⁷⁵⁾。その自由には物質的保障がないからである。自由はあっても行使できない、だから無内容だというのである。彼は、「内容」という語を、時に応じて別の意味に用いている。即ち「社会主義的自由は自由の理念の真の内容をなすもの」⁷⁶⁾、この場合は「内容=自由Ⅰ」である。また「必然性の洞察としての自由……こそは、抽象的形式的自由などではなく、自由の理念に内実あるいは内容を与えるもの」⁷⁷⁾と言ったり、社会主義社会は、物質的手段を保障することによって、「市民的自由を形式的に承認するにとどまらず、内容的にも保障する」⁷⁸⁾と言ったりする、この場合の「内容」は、自由Ⅱが実際に行使できる程度をさしている。そして、ここでは「自由Ⅰ=内容」ではなく、「自由Ⅰ=自由Ⅱに内容を与えるもの」である。「内容」と「内容を与えるもの」とは明らかに別ものでなければならないであろう。鯉坂氏は、一つの語に二つの意味を付与し、且つ「内容」と「内容を与えるもの」とを区別していない。これでは「自由の理念をいっそう明らかにする」ことはできないのではないか。さて話を元に戻すと、無内容な形式としての自由Ⅱを通して、真の自由の内容をなす自由Ⅰは発現しうるか。単に形式的に保障されているのみで、実際には行使できない個人的市民的自由を通して、どうして自由Ⅰが発現しうるのか。もし、そのようにして自由Ⅰが発現するのなら、社会主義社会において、個人的自由の物質的保障を与える必要があるか。法律的形式的自由を抽象的に保障すればよい、ということにならないか。また、このような観点では、資本主義社会における個人的市民的自由を正当に評価できないのではないか。その自由権の法律的形式自体、誰によって、何のために、どれほどの年月を費やして獲得されてきたのか、その

形式に内容を与え実態にまで高めようとする努力は、誰が何のためにやってきたのか。また資本主義社会にあっても、社会発展の法則の洞察とそれに従った運動とが行なわれているとすれば、ここでの個人的市民的自由は、必ずしも無内容ではなかったのではないか。そこで、鯨坂氏の真意は、「自由Ⅰ＝内容」だという点ではなく、「自由Ⅰ＝自由Ⅱに内容を与えるもの」だとすることにあるとしよう。資本主義社会でも、自由Ⅱは、民衆の下からの運動によって獲得されてきた、とはいえ何時でも形骸化の脅威にさらされている、従って自由Ⅱは抽象的形式的なものになりがちである。これに対して、社会主義社会は、自由Ⅰによって自由Ⅱに物質的手段を保障し、これに内容を与え、実質を付与された自由Ⅱによって、自由Ⅰが発現する。このように彼は主張しているのだとしよう。既述のとおり、彼は、内容、本質と基礎、根拠、前提とは同じだと言い、また趣味等の個人の自由も、生産力等その社会の客観的諸条件を抜きには語れないと指摘したりしている⁷⁹⁾ので、「自由Ⅰ＝自由Ⅱに内容を与えるもの」と考えている可能性が強い。そこで、彼のこの主張は、どのように論理的に展開できるかを考えてみよう。自由Ⅱは無内容な形式である。これに物質的手段を保障することによって、内容を与えねば無意味である。物質的手段をすべての人々に保障するためには、生産力を飛躍的に高め、社会主義的生産関係を一層強固なものにしなければならない、つまり洞察された必然性に従って自然と社会を支配せねばならない。即ち自由Ⅰが、まずもって、しかも最も重視されねばならない。なぜなら自由Ⅰは、自由Ⅱに内容を与えるもの、それなしには自由Ⅱが無内容となるような、基礎であり、前提なのだから。従って自由Ⅱは、社会主義制度を堅固にする方向で行使されねばならない。こうである。我々が、ここから検閲制度に到達するには、ほんの一步が必要なだけである。さて、こうして、社会主義制度の発展によって、自由Ⅱには物質的手段が豊かに保障された。この内容豊かな自由Ⅱを通して、自由Ⅰは発現しうるか。否である。今では、自由Ⅱは検閲制度によって、「抽象的形式」を奪われているからである。このように「自由Ⅰ＝自由Ⅱに内容を与えるもの」だとしても、検閲制度が発現するのみで、自由Ⅱを通じて自由Ⅰは発現しなかった。

ところで、鯨坂氏によれば、社会主義社会においても、自由Ⅱは抽象的、形式的で無内容なものである。つまり、彼は、一方では、社会主義社会において「普遍的意志」、真理、即ち自由Ⅰは、徹底して自由Ⅱを保障する中から形成される、と述べ⁸⁰⁾、この自由Ⅱは抽象的で無内容な形式ではあるが、これなしには内容、即ち自由Ⅰもありえないような形式である、と語っている⁸¹⁾。同時に他方では、彼は、社会主義社会では自由Ⅱは、物質的手段を与えられることによって、内容を保障されており、この点に社会主義的自由の優越性が示されている、と指摘している⁸²⁾。それゆえ彼の説明からは、自由Ⅱは、内容を保障されていても、やはり無内容な形式だということにならざるをえない。これはどういうことだろうか。自由Ⅱは、物質的保障を得て内容豊かなものとなり、現実に行使可能なものになっている。にもかかわらず、その自由Ⅱは依然として抽象的で形式的なものだ、とは。これは理解できない。いや、そうではない。彼の論理に従えば、十分理解できることである。即ち彼にあっては、自由Ⅱは自由Ⅱであって、自由Ⅰではないからである。自由Ⅰこそ真の内容、具体的自由の位相、自由の本質である。自由Ⅱは、いかに内容豊かであっても、あくまで抽象的形式、自由の現象にとどまる。こういう規定が予め付与されているからである。自由Ⅰこそ、最も重視すべきもの、自由そのもの、真の自由として擁護しなければならないもの、という理論的要請が、ア・プリオリに設定されているからである。なぜか。エンゲルスが、自由Ⅰを自由として語っているからである。そして自由Ⅱはあくまでも自由Ⅱであって、自由Ⅰではないから、抽象的で無内容な形式にとどまらねばならない。こうなのではなからうか。だが、一体、自由Ⅱは抽象的で無内容な、単なる形式なのだろうか。この規定から、個人の自由を豊かに保障しなければならない、という命題は出てくるのだろうか。かけがえのない、ひとりの人間である個人が、自分で考え、自分にとっての価値を選択し、実行する自由は、「内容が貧しい空疎な自由」⁸³⁾なのか。他の人からみれば、必然性を洞察せざる価値の選択と実行であっても、自分で選択し実行してみる、この点が人間の尊厳にとって不可欠ではないのか。それこそ人間の人としての証ではないか。だからこそ、このような個人の自由自体

が、その個人の選択する価値と同等の、不可欠の、不可侵の価値と位置づけられねばならないのではないか。つまり自由Ⅱ自体が、人間にとっての一つの価値なのである。このような視点に立ってこそ、自由Ⅱを理論的にも実践的にも、確固として徹底的に擁護し保障しうるのである。鯨坂氏は、自由Ⅱを説明して、「自由落下」という場合の自由が、自由Ⅱの一例だ、と述べている⁸⁴⁾。彼にあっては、自由Ⅱは、人間だけではなく物質の運動にも当てはまる概念である。この自由Ⅱは、人間の、個人の願い、一回限りの短い生を意味あらしめるために、個人が選択した価値、自らの人間としての証を求めている、その実行、このような事柄と関連したものだ、とは必ずしもとらえられてはいない。物理学上の自由も、人間学上の自由も引っ括めての、自由一般が問題にされているのである。だからこそ、自由Ⅱは抽象的形式、無内容な、たださまたげられないというだけの空しい自由になるのである。自由Ⅰが発現するための、ただの形式として最低次の位相に位置づけられざるをえないのである。従ってまた、人間学上の自由Ⅱについて論じられる場合も、自由Ⅱの客観的条件や物質的裏付けのみが強調され、「さまたげられない」というだけでは、これらの条件を欠いているから、内容の最も貧しい自由だと語られるのである。つまり人間の自律、内面的主観、願望という、自由Ⅱの核心に位置しているものを、一つの価値としてとらえる視点が欠如しているのである。なるほど客観的条件、物質的手段は大切である。これがなければ、自由Ⅱは現実に行使できない場合があり、また選択した価値を実現することができない。しかし、これを強調し、しかも個人の主観的願望を価値の一つとしてとらえる視点を欠いていれば、どうなるであろう。既述のごとく、客観的条件の強調は、自由Ⅰを真の最高次の自由、人間の自由そのもの、自由の本質であり内容とする視点と結合して、検閲制度を発現させてしまったのである。

以上で、自由の問題に、「本質—現象」「内容—形式」というカテゴリーを当てはめることの無効性を論証できたと考える。自由を、自由Ⅰと自由Ⅱとに区別し、それらを高次と低次の位相においてとらえることの不当性を論証できたと考える。自由の理念は、鯨坂氏によっては、明らかにされなかった。この失

敗の原因は、彼がエンゲルスの定義した自由を、真の自由とする自由論に立脚していたことにある。エンゲルスの自由概念を、自由Ⅰと位置づけてしまったことに、直接に起因している。マルクス主義哲学者として、エンゲルスの自由概念を擁護し、この自由を、自由論の中心に据え付けなければならないという理論的要請を前提として、自由論を展開したからである。だが、彼の自由論にも、迷路からの脱出口が、ほの見えていた。それは、彼が、自由の基礎、根拠、前提について語った所にある。その道を真直に進めば、出口に行き着けたのである。しかし、彼は、自由Ⅰの道を辿った。そして、迷路をさまよい続けているのである。

(五) エンゲルスの自由概念の位置づけ

これまでの論証から明らかなように、東独の自由論も、ムィスリフチェンコの自由論も、鯉坂氏の自由論も、エンゲルスの自由概念を自由そのもの、「真の」自由ととらえていた。このことが、それらの自由論に多くの困難をもたらした。即ち、それらの自由論は個人の自由を理論的に基礎づけられないばかりか、個人の自由を否定する論理を展開するはめになってしまったのである。この責任は、もちろん、エンゲルス自身にはなからう。そこで、本節ではエンゲルスの自由概念そのものを検討しよう。

エンゲルスはどのように語っているのか。問題となっている箇所を引用しておこう。「ヘーゲルは、自由と必然性の関係をはじめて正しく述べた人である。彼にとっては、自由とは必然性の洞察である。『必然性が盲目なのは、それが理解されないかぎりにおいてのみである。』自由は、夢想のうちで自然法則から独立する点にあるのではなく、これらの法則を認識すること、そしてそれによって、これらの法則を特定の目的のために計画的に作用させる可能性を得ることにある。これは、外的自然の法則にも、また人間そのものの肉体的および精神的存在を規制する法則にも、そのどちらにもあてはまることである。——この二部類の法則は、せいぜいわれわれの観念のなかでだけたがいに分離でき

るのであって、現実には分離できないものである。したがって、意志の自由とは、事柄についての知識をもって決定を行なう能力をさすものにほかならない。だから、ある特定の問題点についてのある人の判断がより自由であればあるほど、この判断の内容はそれだけ大きな必然性をもって規定されているわけである。他方、無知にもとづく不確実さは、異なった、相矛盾する多くの可能な決定のうちから、外見上気ままに選択するように見えても、まさにそのことによって、みずからの不自由を、すなわち、それが支配するはずの当の対象にみずから支配されていることを証明するのである。だから、自由とは、自然的必然性の認識にもとづいて、われわれ自身ならびに外的自然を支配することである。したがって、自由は、必然的に歴史的発展の産物である。⁸⁵⁾「社会的に作用する諸力は、自然力とまったく同じように作用する。すなわち、われわれがそれらを認識せず、考慮に入れないあいだは、盲目的に、暴力的に、破壊的に作用する。しかし、いったんわれわれがそれを認識し、その活動、その方向、その結果を把握したなら、それらをますますわれわれの意志に従わせ、それらを手段としてわれわれの目的を達成することは、まったくわれわれしだいのことになる。」⁸⁶⁾「いままで人間を支配してきた、人間をとりまく生活諸条件の全範囲が、いまや人間の支配と統制に服する。人間は、自分自身の社会的結合の主人になるからこそ、またそうなることによって、いまやはじめて自然の意識的な、ほんとうの主人となる。これまでは、人間自身の社会的行為の諸法則が、人間を支配する外的な自然法則として、人間に対立してきたが、これからは、人間が十分な専門知識をもってこれらの法則を応用し、したがって支配するようになる。これまでは、人間自身の社会的結合が、自然と歴史とによって押しつけられたものとして、人間に対立してきたが、いまやそれは、人間自身の自由な行為となる。これまで歴史を支配してきた客観的な、外的な諸力は、人間自身の統制に服する。このときからはじめて、人間は、十分に意識して自分の歴史を自分でつくるようになる。このときからはじめて、人間が作用させる社会的要因は、だいたいにおいて人間が望んだとおりの結果をもたらすようになり、また時とともにますますそうなってゆく。これは、必然の国から自由の国への

人類の飛躍である。』⁸⁷⁾ エンゲルスは、このように述べている。エンゲルスの自由概念を自明の理とするのではなく、改めて、しっかりと見据えるために、敢えて長々と引用したのである。

さて、ここでエンゲルスは何を語っているのだろうか。彼は、自然と社会には法則があること、人間がこれらに盲目である場合には、人間はこれらの法則の奴隷であると述べている。つまり人間がこれらを認識しないなら、これらは人間にとって外的な障害だというのである。従ってまず自由であるためには、その障害から自由であるためには、これらの法則を認識することが必要である。なぜか、法則を認識しなければ、人間が内的に決意した目的を実現できないからである。しかし、この「法則の認識」自体は、盲目的法則という障害からの自由、無知からの自由にとどまる。なぜなら、第一に、法則を認識しても、人間の様々な目的の実現にとって障害となるものすべてが、直ちに除去できるわけではない。障害を除去するための具体的行動が必要である。例えば、社会発展の法則が認識されたとしても、その法則通りに社会が発展するためには、様々な障害が実際に除去されねばならないのである。第二に、法則を認識したとしても、人間は必ずしもその法則に従って行動するわけではない。資本主義社会は社会主義社会へと発展する、ある人がこのように認識したとしても、その人は、資本主義社会延命のための決意と行動を選択するかもしれないのである。従って「法則の認識」は、無知という障害からの自由にとどまる。だが、その自由によって、人間は、自分が内的に形成した意欲、それにもとづいて選択した価値を実現するために必要な、一つの前提を得たのである。但し、この場合も、その人間の「特定の目的」が、認識された法則に合致していなければならないことは言うまでもない。なぜなら、人間の目的選択は、いつでも法則に合致してなされるとは言えないのだから。この場合は、「法則の認識」は、目的実現のための前提たりえない。従って、エンゲルスがここで述べていることは、人間が自己の目的を達成するためには、まず法則を認識すること、そしてその目的が法則に合致したものであること、これが必要だとする点にある。人間の選択した目的が、実現可能性の契機を含んだものであるためには、この点が不

可欠だと指摘しているのである。これが、「法則を認識すること、そしてそれによって、これらの法則を特定の目的のために計画的に作用させる可能性を得ることにある」と述べられていることの意味である。この後に続けて語られている「意志の自由」、「判断の自由」の意味も、これと全く同じである。即ち、意志や判断は、無知、盲目的必然性という障害から自由であれば、しかも、その意志や判断が、認識された必然性の方向に沿ったものであれば、実現可能性の契機を含んだものだと言いうる、ということである。これと反対に、「無知にもとづく」「気ままな選択」は「みずからの不自由を証明する」。つまり、必然性についての無知、この障害から解放されていない場合には、人間の選択した目的は、実現可能性の契機を含みえない。つまりそれを実行に移したとしても、思い通りの結果が得られないのである。なぜなら、意志や判断が実現可能性の契機を含んだものであるための、第一の前提、即ち無知からの自由が欠如しているからである。このことが、意志や判断を実践した結果、証明される。つまり、意志や判断は不自由であったことが、証明されるのである。

ここでエンゲルスは、「不自由」を「支配するはずの当の対象にみずから支配されていること」とし、「自由」を「自然的必然性の認識にもとづいて、われわれ自身ならびに外的自然を支配すること」と述べている。この箇所から、「自由とは、自然と社会の必然性（自然だけでなく、社会をも含めた必然性であることは、上記の第二、第三の引用文から明らか）の認識にもとづいて、自然と社会を支配すること」という定義が引き出され、広く受け容れられ、この定義が、マルクス主義自由論の伝統となってきたのである。果してこれでよいのか。「支配する」（上記第三の引用文に「統制」とか、社会と自然の「主人」とか語られているのも、これと同義である）とは、どういう事だろうか。人間は、内的意欲にもとづいて価値を選択し、それを行動によって実現しようとする。人間は、諸々の価値を実現しようという目的を持って行動する存在である。上述の通り、人間の活動の対象をなす自然や社会、これらの法則について無知であれば、人間は目的を実現できない。意図した通りの結果は生じえないのである。また、法則を認識しただけで、思い通りに目的を達成できるわけでもない。

資本主義社会で、ある個人が、または労働者階級の多くが、社会発展の法則を認識したとしても、社会主義社会を直ちに実現することはできないばかりか、彼等の思い通りに、資本主義社会を社会主義社会へと発展させることができるわけでもない。つまり、思い通りに社会を「支配」できるわけではない。そのためには、諸々の障害、資本主義国家権力、経済権力、人々の反社会主義的意識等、除去しなければならない障害が無数に存在している。また、それらの障害を除去して社会主義革命を成功させたとしても、直ちに共産主義社会へと急速に社会を発展させうるわけではない。古い社会政治諸制度、人々の残存する資本主義的意識、未だ未だ不十分な生産諸力等、除去し解決しなければならない障害が山積していよう。更にまた、社会主義社会固有の発展諸法則が、完全に解明され尽しているというわけにもいくまい。つまり、必然性が盲目的に作用するという事態もありえよう。そうであれば、もちろん目的を達成することはできない。その場合は、エンゲルスの言う「それらを手段としてわれわれの目的を達成す」べき、法則の発見、必然性の認識自体が、一つの目的となろう。こうして、論理的には、一切の障害が除去され、すべての難問が解決されて、はじめて人間は自然と社会の主人になれるのであろう。つまり自然と社会を思い通りに支配できるのであろう。「人間が作用させる社会的原因は、だいたいにおいて人間が望んだとおりの結果をもたらすようになり、また時とともにますますそうなってゆく。」このように、「自然と社会を支配する」とは、人間が思い通りに「目的を達成すること」、人間が意図した通りの「結果を得ること」、このことを意味している、と一応理解できるわけである。だが、思い通りに目的を達成する、という場合の「思い通りに」はどう解すべきか。「支配」は支配であって、自由ではない。「支配」そのものに自由という語をあてる必要はない。すると、この「思い通りに」が、自由と関係があるのだということが理解されよう。人間の自由が問題となる全局面を、ここで考えてみよう。人間が意欲を形成し、価値を選択し、それを実行に移し実現する。この全局面に障害がなければ、人間は完全に自由だと言える。つまり、人間は、「思い通りに」自己の決定を結果としてわがものとするのであり、これら局面的な局面

における障害を除去すること、即ち障害からの自由を獲得すること、これによって、「思い通りに」人間は目的を達成するのである。この障害を除去するためには、その当の対象たる障害を科学的に認識し、その認識に従った実際の行動が必要である。個人にとっても、社会全体にとっても、「特定の目的」に対する障害物を認識し、これを除去する行動がなければ、目的を思い通りに達成できない。つまり、「必然性の認識にもとづいて、自然と社会を支配」しなければ、障害が除去できないのだ、と考えることができる。即ち「必然性の認識にもとづく支配」によって、これを手段として、障害を除去し、従って、「思い通りに」目的が達成できるのである。「法則の認識」は、エンゲルス自身が「それらを手段としてわれわれの目的を達成する」と述べているが、上述の通り、法則の認識だけでは、目的を達成することができないことは明らかであって、それは一つ的手段にとどまる。目的を達成するためには、他の手段、即ち盲目的必然性以外の障害を除去する手段が必要である。つまり、人間は、実践的行動によって、諸々の障害を実際に除去しなければ、目的を実現できない。「自然と社会を支配する」ことによって、これを手段として、それらの障害を除去しうるので、と考えることができる。こうして、「必然性の認識にもとづく支配」を、目的を達成するための手段、障害を除去するための手段、自由を獲得するための手段と位置づけることができるのである。「いままでは人間を支配してきた、人間をとりまく生活諸条件の全範囲が、いまや人間の支配と統制に服する。」このことによって、「人間が作用させる社会的原因は、だいたいにおいて人間が望んだとおりの結果をもたらすように」なる。このように、「自然と社会とを支配する」ことによって、思い通りに、つまり障害なしに、自由に、「望んだ通り」の結果を得ることができるのである。こうして、エンゲルスの「自由」概念、「必然性の認識にもとづいて、自然と社会を支配すること」は、障害を除去するための手段、または方法、自由を獲得するための手段、方法だと言うことができるのである。人間は、そのような手段なしに、障害を除去できない、自由であることができない。このような場合には、手段の獲得自体が、人間の一つの目的となるのである。そのような目的の達成もまた、前稿

で指摘したように、自由を通して行なわれるのである⁸⁸⁾。即ち「必然性の認識」は、自由で多様な実践、また自由な研究、自由な討論、自由な批判を通じて得られ、人々の自由な試行錯誤を通じて、人々の確信となり、そのエネルギーによって、「自然と社会に対する支配」が可能となるのである。

従来は、この手段が自由として理解されてきたのである。「必然性の洞察のもとづく支配」が真の自由、自由そのもの、自由の本質であり内容とされてきたのである。だが、「支配」は支配であって、自由ではない。「支配」の語に、自由という意味をあてがい、「支配」=「自由」とすることは、クランストンではないが、自由の語の濫用であろう。この手段を「自由Ⅰ」だと規定したところに、間違いがあったのである。これを「真の自由」ととらえると、どうしても、所謂「自由Ⅱ」の軽視が出てこざるをえない。統一的にとらえるといっても、やはり「自由Ⅰ」が最高次の位相、「自由Ⅱ」は低次の位相にあるものとされざるをえなかったのである。そのことから、個人の自由を、人間にとって不可欠の価値だととらえる視点、個人が選択した価値及びその実現と同等の価値をもつものだととらえる視点、これが欠落してしまったのである。個人が選択した価値は、実現できなければ、無意味だ、という実現可能性の契機のみを重視することから、個人の自由な自律的な選択というものの価値が、見失われたのである。目的を実現するためには、「洞察と支配」がなければだめだ、だから「洞察と支配」こそ、「真の」人間の自由だ、こうなったのである。だが、その結果、「洞察と支配」自体が、何によって得られるのか、誰によって保証されるのかが、分からなくなってしまったのである。それを保障し、保証するのが、個人の自由でない以上、理性的目的を認識したエリートに頼らざるをえなくなってしまうのである。こうした困難は、エンゲルスの「自由」概念を、自由実現のための手段と位置づけることによって、解消しよう。手段は手段であって、自由ではない、大切なのは自由だ、ということによって。また、手段の獲得自体が、一つの目的として、この目的は、やはり大切な自由を通じて達成される、こういう論理によって、困難は解消しよう。

最後に、このエンゲルスの「自由」概念に関する、若干の論者の主張を概観

しておこう。筆者と同様の理解をしている、と考えられるのは、林田茂雄氏である。彼も、秋間氏の区別を用いて、次のように述べている。「いわゆる自由Ⅱでいうところの『自由』は、……どんな自由を求めるかという問題、すなわち自由への欲望・あこがれ・要求の問題であり、いわば『自由の意欲』または『自由の思想』を総括した概念である。ところが自由Ⅰでいうところの『自由』は、その『意欲』をどうやって自由に達成するかという実践的な方法の問題なのである。……だから自由Ⅰと自由Ⅱとの関係は、どちらがどちらを包摂できるかできないか、というものなんかではない。意欲としての自由と、方法としての自由とが、全く性質を異にした概念であることは明白なのに、この両者の混同は、スターリン主義的自由論以来今日まで、マルクス主義哲学界の大部分をおかし続けている。」⁸⁹⁾ このように、自由Ⅰは自由Ⅱを達成する「実践的な方法の問題」、「方法としての自由」ととらえられている。しかし、「方法としての自由」とは、いかにもこなれていない表現である。林田氏自身「自由は、それが抑圧されている場合にこそ問題になる。従って自由の実現または維持は、その障害の克服なしには不可能である」⁹⁰⁾ と述べ、その自由を保障するのが、必然性の認識に従った行動である、と指摘しているのであるから、これは、はっきりと手段、または方法と言い切ればよかったのである。この点では、やはり、自由を「自由Ⅰ」と「自由Ⅱ」とに区分したことに、問題があったと言わざるをえない。秋間氏がこのように提唱したことは、極めて積極的な意義をもったものと評価できる。つまり解明さるべき問題を、非常に明確なかたちで提起したという点が、それである。しかしその半面では、解決しがたい問題を、その提起の中に含ませてしまったのである。つまり、「自由Ⅰ」と「自由Ⅱ」を区別したことで、エンゲルスの「自由」概念を、自由の一つと確定してしまったのである。その上で、もう一つの自由、即ち「自由Ⅱ」との関連が問われるということになり、鯨坂氏も、林田氏も、この延長線上で、「自由Ⅰ」を位置づけねばならなかったのである。

次に、向井俊彦氏の所論をとりあげてみる。彼は次のように語る。エンゲルスの自由概念を、「行動の自由を必然性の認識と関係させて発展させたもので

あり、また政治的・市民的自由を含蓄しないものではないと解釈でき、そう解釈するとエンゲルスの自由論が、『自由Ⅰ』と『自由Ⅱ』を統一して理解するための基礎を与えることになると思う⁹¹⁾。「行動の自由のいう『障害がない』ということは、行動の結果の認識を踏まえた大きな視野から考えると、行動の条件を支配できていることによって保障されるのだからである。」⁹²⁾ 向井氏は、エンゲルスの「自由」概念を、一応自由の定義として認めつつも、それが、行動の自由の保障について語ったものだとしているのである。これは、人間の行動が、首尾よくその目的を達成する上で不可欠な、障害を除去するための手段、方法を示したもので、というのと同然である。但し、自由と自由を保障するものとは、区別されねばならない。一方は自由であり、他方はその為の手段だからである。向井氏はこれらを区別していない。彼は、秋間、栗田両氏のエンゲルス把握には誤解がある、と批判している⁹³⁾が、その批判が出てくる原因が、ここにある。即ち向井氏は、自由(「自由Ⅱ」)と自由を保障するもの(「自由Ⅰ」)とを区別せず、両者をともに自由として「統一して理解する」。これが、向井氏の誤解である。この誤解から、先の批判が出てきたのである。

栗田賢三氏は、「エンゲルスの言う自由は、われわれが行動する際には自然および社会の環境的な諸条件を支配して、行動の目的を支障なく達成することなのである」⁹⁴⁾と述べ、この意味での自由は、「社会的自由の拡大の土台をなすもの」⁹⁵⁾だと指摘している。彼も筆者と同様の理解をしていると言えるが、未だエンゲルスの言う「自由」を、自由の一種と表現し、言い換えると「土台としての自由」ということになって、こなれた表現を与えているとは言えない。

栗田氏と同様の把握をしている論者として、中野徹三氏をあげることができる。彼は、「エンゲルスの規定は、それ自身、人間の諸自由の発展度を究極的に規定するもっとも根本的な条件を指示している」⁹⁶⁾と述べている。但し、中野氏は、エンゲルスの言う「自然的必然性の認識」には社会的必然性が含まれていない、と理解している⁹⁷⁾。この点に、彼の認識の致命的欠陥がある。彼のように理解すれば、彼自身が強調する社会的自由、従ってまた、彼がこの自由と弁証法的関係にあるとする人格的自由⁹⁸⁾が、何を「根本的条件」として得ら

れるのか、説明できなくなる。それゆえ、彼は、階級社会における自然支配としての「自由」の増大を、社会関係における隷属の深化をもたらすもの、としてしか理解できない⁹⁹⁾。また、彼のような視点では、社会支配としての「自由」が、自然支配としての「自由」を発展させる、という弁証法も理解できないことになる。だが、他方では彼も、階級社会での社会的自由の増大の事実について語らざるをえない¹⁰⁰⁾。矛盾である。

最後に指摘しておかねばならないのは、上述の「土台としての自由」、「方法としての自由」、また「行動の自由の保障」、これらの把握は、次のような方向に展開される可能性をもっている、という点である。つまり、これらにおいては、やはりエンゲルスの言う「自由」が、一つの意味の自由としてとらえられ、これが、「土台」「方法」「保障」とみなされているのである。すると、「土台」「方法」「保障」なしに、「社会的自由」「意欲としての自由」「行動の自由」は得られるか。否。それらを得るためには「土台」「方法」「保障」が必要だ。しかも「土台」「方法」「保障」とは、そもそも「自由」なのである。即ちエンゲルスの言う「自由」が、「社会的自由」その他の獲得のためには重要だ。必然性の洞察に従った行動が、何よりも真先に必要だ。このように展開される危険性があるのである。やはり、手段は手段、大切なのは自由ととらえ、手段自体も自由によって獲得される、このように明確に位置づけることが肝要なのである。

(昭和57年5月20日受理)

(註)

- 1) Gottfried Stiehler et al., *Freiheit und Gesellschaft, Die Freiheitsauffassung im Marxismus-Leninismus* (Berlin, 1973) (以下 *Freiheit und Gesellschaft* と記す)、岩崎允胤訳、『マルクス主義自由論』(汐文社、1978年)(以下 *Freiheit und Gesellschaft* に続けて、同訳とのみ略記)。本稿では、この著作からの引用文は、同訳書の訳文には必ずしも依らない。
- 2) *Freiheit und Gesellschaft*, S. 89. 同訳, 82頁。
- 3) *Freiheit und Gesellschaft*, S. 90. 同訳, 84頁。
- 4) *Freiheit und Gesellschaft*, S. 103. 同訳, 94-95頁。
- 5) *Freiheit und Gesellschaft*, S. 105-106. 同訳, 97頁。

- 6) *Freiheit und Gesellschaft*, S. 90. 同訳, 84頁。
- 7) *Freiheit und Gesellschaft*, S. 107. 同訳, 98頁。
- 8) この点については, 前稿で詳論した。
- 9) この点については, 前稿第5節参照。
- 10) *Freiheit und Gesellschaft*, S. 261-262. 同訳, 236-237頁。
- 11) *Freiheit und Gesellschaft*, S. 264-265. 同訳, 239-240頁。
- 12) *Freiheit und Gesellschaft*, S. 267. 同訳, 241-242頁。
- 13) *Freiheit und Gesellschaft*, S. 265. 同訳, 240頁。
- 14) この点については, 前稿第5節参照。
- 15) *Freiheit und Gesellschaft*, S. 240. 同訳, 219頁。
- 16) この点は, 藤田勇, 『社会主義における国家と民主主義』(大月書店, 1976年), 240頁参照。
- 17) *Freiheit und Gesellschaft*, S. 112-113. 同訳, 103-104頁。
- 18) *Freiheit und Gesellschaft*, S. 186-187. 同訳, 171頁。
- 19) *Freiheit und Gesellschaft*, S. 184. 同訳, 168-169頁。
- 20) *Freiheit und Gesellschaft*, S. 251. 同訳, 228頁。
- 21) *Freiheit und Gesellschaft*, S. 250. 同訳, 227頁。
- 22) *Freiheit und Gesellschaft*, S. 251. 同訳, 228頁。
- 23) Isaiah Berlin, *Four Essays on Liberty* (London, 1969), pp. 132-133. 生松敬三他訳, 『自由論Ⅱ』(みすず書房, 1971年), 320-323頁。但し, 引用文は, この訳書に依らない場合がある。
- 24) *Ibid.*, p. 148. 同前訳, 347-348頁。
- 25) *Ibid.*, p. 141. 同前訳, 336頁。
- 26) この点についてのバーリンに対する批判は, C. B. Macpherson, *Democratic Theory* (Oxford, 1973), pp. 104-116. 西尾敬義他訳, 『民主主義理論』(青木書店, 1978年), 174-195頁参照。
- 27) M. クランストン, 『自由』, 小松茂夫訳(岩波書店, 1976年), 60頁。
- 28) 同前, 62頁。
- 29) バーリン自身の自由論とクランストン自身の自由概念とに対する詳細な批判は, 前稿第1-4節で行なわれている。
- 30) ア・ゲ・ムィスリフチェンコ, 『マルクス主義の人間概念』, 岩崎允胤訳(大月書店, 1977年)。
- 31) 同前, 146頁。
- 32) 同前, 131頁。

- 33) 同前, 147頁。
- 34) 同前, 149頁。
- 35) 同前, 150頁。
- 36) 同前。
- 37) 同前。
- 38) 同前, 150-151頁。
- 39) 同前, 151頁。
- 40) 同前, 152頁。
- 41) この点については, 前稿第3節参照。
- 42) ムィスリフチェンコ, 前掲訳, 152頁。
- 43) 同前, 153頁。
- 44) 同前。
- 45) 同前。
- 46) 同前, 153-154頁。
- 47) 同前, 154頁。
- 48) 同前, 155頁。
- 49) 同前, 157頁。
- 50) 同前, 160頁。
- 51) 同前, 157頁。
- 52) 同前, 158-159頁を見よ。
- 53) 本節では, 鯨坂真, 『自由について』(大月書店, 1981年)を取り上げる。
- 54) 同前, 69頁。
- 55) 同前。
- 56) 同前, 75頁。
- 57) 秋間実, 「マルクス主義哲学的自由論の課題」, 『科学と思想』15号。
- 58) 例えば, クランストン, 前掲訳, 60頁に曰く「『自由』とは, マルクスおよび彼の追随者たちは述べる, 『必然性の認識』である」。
- 59) 鯨坂, 前掲書, 212-213頁。
- 60) 同前, 78-82頁。
- 61) 同前, 79頁, 及び209-210頁。
- 62) 同前, 51頁。
- 63) 同前, 52頁。
- 64) この点については, 前稿第6節参照。
- 65) 鯨坂氏は, 「人民の自由」と対立する自由に, まさにこのような表現を与えている

(鯨坂, 前掲書, 82頁)。この点は、後で詳論する。

- 66) 同前, 78頁。
- 67) 同前, 81頁。
- 68) 同前, 81-82頁。
- 69) 同前, 82-90頁。
- 70) 同前, 82頁。
- 71) 同前, 226頁。
- 72) 同前, 85頁。
- 73) 同前, 89頁。
- 74) 同前, 223-226頁。
- 75) 同前, 83頁。
- 76) 同前, 86頁。
- 77) 同前, 84頁。
- 78) 同前, 87頁。
- 79) 同前, 220-221頁。
- 80) 同前, 88頁。
- 81) 同前, 89頁。
- 82) 同前, 87頁。
- 83) 同前, 223頁。
- 84) 同前。
- 85) フリードリヒ・エンゲルス, 「反デューリング論」, マルクス・エンゲルス全集第20巻, 118頁。
- 86) 同前, 288頁。
- 87) 同前, 292頁。
- 88) この点については、前稿第6節参照。
- 89) 林田茂雄, 「自由論における形而上学と弁証法」, 『唯物論』10号, 49頁。
- 90) 同前, 52頁。
- 91) 向井俊彦, 「歴史の必然性と主体」, 『唯物論』7号, 63頁。
- 92) 同前, 64頁。
- 93) 同前, 62頁。
- 94) 粟田賢三, 「マルクス主義と現代の自由」, 『科学と思想』No. 15, 6頁。
- 95) 同前, 8頁。
- 96) 中野徹三, 『マルクス主義と人間の自由』(青木書店, 1977年), 50頁。
- 97) 同前, 53-54頁。

98) 同前, 33頁。

99) 同前, 60頁。

100) 同前, 61頁。

復活神話としての『てんとう虫』

寺 田 昭 夫

A Study of D. H. Lawrence's "The Ladybird"

— A Myth of Resurrection —

Akio Terada

Abstract

D. H. Lawrence's "The Ladybird," with the other two stories, "The Fox," and "The Captain's Doll," was published in 1923 under the title *The Ladybird* in London, and *The Captain's Doll* in New York. But it was completed in December 1921. It was just before Lawrence escaped from Europe in search of his utopia, 'Rananim.' It must be noticed that this short novel is the archetype of his latest works, *Lady Chatterley's Lover*, or *The Man Who Died* as his literary conclusion rather than the archetype of 'leadership novels.' "The Ladybird" therefore can be said to be a typically Lawrencian story.

This novelette is full of mythical images and symbolism and so, it seems to me, it is impossible to discuss it without considering the ancient mythical worlds. In this paper, I regard the world of Basil as Apollonian and the world of Dionys as Dionysian. Then from the viewpoint of this dualism, I attempt to analyse the process of Daphne's transition, from Basil to Dionys. Finally this essay concludes that Lawrence declares, through the ritual of resurrection, the triumph of the Dionysian world over the Apollonian world, not with violence but with tenderness.

(序)

D. H. Lawrence の “The Ladybird” は 1923 年 3 月, “The Fox”, “The Captain’s Doll” と合せて一冊とし, *The Ladybird* のタイトルでロンドンの Martin Secker 社から, 同年 11 月, *The Captain’s Doll* のタイトルでニューヨークの Thomas Seltzer 社から出版された中編小説である。しかしその完成は 1921 年 12 月である。¹⁾ Lawrence はこの作品の完成直後, 1922 年 2 月末にはヨーロッパを去ってセイロンに向かう。その後一度短期間の帰郷はあったものの 1925 年 9 月, 病を負って再びヨーロッパに戻ってくるまで長い異郷での生活を送ることになる。作家活動としては, *Aaron’s Rod* を脱稿, *Kangaroo* 着稿の前ということになる。すなわち, この “The Ladybird” は, 所謂, ‘leadership novels’ とよばれる新しい傾向に進む直前のものであることに注目しておきたい。

さてこの作品を論ずる前に, 1915 年 10 月に書かれた短編 “The Thimble” を一瞥しておかなければならない。何故なら, “The Ladybird” はこの短編を基にしており, 更に敷衍拡大し, 豊かな果実を生むことになっているからである。

物語は第一次世界大戦を背景とする。法廷弁護士としてうだつの上がらない Hepburn も, 戦争のため砲兵隊の中尉となった姿は ‘she’ (名前は与えられていない) に男らしく思われ新鮮に写る。結婚して二週間のハネムーンのと夫 Hepburn は前線に赴く。すでに十ヶ月になる。夫は砲弾をうけてひどく負傷し, 妻も同じ頃肺炎に罹り, 沈んだ混乱した精神状態になる。突然彼女は, 自分は夫については何も知っていないという不安におそわれる。肉体を備えた人間としての夫の不在は彼女の根元的意識に重大な影響を及ぼすということである。この認識は “The Fox” において, 青年兵士 Henry がキャンプに戻ったときの恋人 March のものでもある。

夫が前線から戻る日, 彼女は身を整え静かに応接間のソファに座っている。

彼女の指は無意識のうちにそのソファを包む絹地の上をまさぐる。

Her right hand came to the end of the sofa and pressed a little into the crack, the meeting between the arm and the sofa bed. Her long white fingers pressed into the fissure, pressed and entered rhythmically, pressed and pressed further and further into the tight depths of the fissure, between the silken firm upholstery of the old sofa, whilst her mind was in a trance of suspense, and the fire-light flickered on the yellow chrysanthemums that stood in a jar in the window.

The working, slow, intent fingers pressed deeper and deeper in the fissure of the sofa, pressed and worked their way intently, to the bottom. It was the bottom. They were there, they made sure. Making sure, they worked all along, very gradually, along the tight depth of the fissure.

Then they touched a little extraneous object, and a consciousness awoke in the woman's mind. Was it something? She touched again. It was something hard and rough. The fingers began to ply upon it. How firmly it was embedded in the depths of the sofa-crack. It had a thin rim, like a ring, but it was not a ring. The fingers worked more insistently. What was this little hard object?

The fingers pressed determinedly, they moved the little object. They began to work it up to the light. It was coming, there was success. The woman's heart relaxed from its tension, now her aim was being achieved. Her long, strong, white fingers brought out the little find.²⁾

こうして発見したものは指貫 (thimble) であった。上のいささか長い引用からこの指貫が男根 (phallus) を象徴していることは容易に察せられるのであり、同時に再生 (resurrection) の象徴でもある。この指貫が "The Ladybird" においてさらに豊かに象徴性を帯びることは後に見ることにする。

夫が戻ってくる。はじめて発した夫の籠ったような声に恐怖を覚える。気まずい空気の中で、中断しがちな会話はその指貫を話題にする。勇気を奮って目を上げた彼女は、夫のすっかり変形した顔を見る。それは死相を帯びていた。絶望の淵に彼女は追い遣られる。しかし味方の誤爆による負傷の次第を聞く彼女の内面に変化が起るのである。それは夫の目の 'darkness' がひき起こした変

化であった。Lawrence 文学にあっては、観念の排除された無意識の世界はしばしば暗黒のイメージで表わされる。こうして不十分ながら再生を暗示し、その象徴としての指貫は役目を終え、今はその本来の象徴である過去の権力と栄光を示す（それはかつてある伯爵夫人が使用したものであろうから）不用のものとなり、夫の手により窓から放り投げられ、視界から消えてしまうところで作品は終わっている。

いささか未消化の感をまぬがれない短編ではある。しかし Lawrence の意図が単にあこがれの女性であった Lady Cynthia Asquith のスケッチをすることであったはずはない。³⁾ Lawrence の生涯のうちで悪夢の時代であったこの大戦のさなかで、再生、復活こそ作家 Lawrence の大きな主題であった。⁴⁾

Lawrence は六年後にこの主題に戻ってきた。“The Thimble”における ‘she’ は Daphne という名を与えられ、夫は Basil に変更された。そして新たに Dionys という hero が登場し、ここに三角関係を形成する。Daphne を中心に、Basil と Dionys を両翼に従え彼女の Basil から Dionys への移行を明示する内容となっている。F. R. Leavis はこの “The Ladybird” にたいして一定の評価を与えつつも結末部については不満を示している。

This close of the tale, it can be said, completes the definition of the essential relations between the three main actors, a novelistic resolution of the theme being out of the question; and we have in *The Ladybird* — we have in it the insistence on the ‘darkness’ and in Dionys’s references to ‘the after-death’ and to his being ‘King in Hades’ — a dimension that a novelistic treatment wouldn’t permit. And certainly, the opening and middle of the tale are in their way remarkable achievements. Yet, in the close they lead to, we must feel there is something in the nature of evasion: ...⁵⁾

しかしこのことはこの作品を神話という観点から考察すれば肯けるものとなる。Daphne, Dionys をはじめ作中にはギリシア神話の他、古代神話を連想させる神々、動物が多く登場し、この物語の解釈にはそれら古代世界との関わりを見ることは不可欠のように思われる。以下この小論においては Daphne と

Dionys との再生、復活の過程を詳しく検討していくことにする。

(一) アポロの世界

主要人物の二人の名が Daphne, Dionys であることは、ギリシア神話におけるダフネ (Daphne)、ディオニュソス (Dionysos) を連想させることは明白であり Lawrence の創作の意図を示しているといえる。ドラマの展開が Daphne の Basil から Dionys への移行となっているとするなら、Basil の世界はアポロ (Apollo) の世界と考えるのが自然であろう。いうまでもなくギリシア神話においては、ダフネとはアポロに愛されたが、拒否し逃れて月桂樹に姿を変えたニンフであることもそのことを暗示している。Basil は Cambridge 出身の尊敬すべき育ちの良い、長身のイギリス人であり夫として理想的存在であった。

She would think of her husband: an adorable, tall, well-bred Englishman, so easy and simple, and with the amused look in his blue eyes. She thought of the cultured, casual trail of his voice. It set her nerves on fire. She thought of his strong, easy body — beautiful, white-fleshed, with the fine springing of warm-brown hair like tiny flames.⁶⁾

いわば現実世界における承認済みのモラルを代表する者である。アポロがほとんどギリシア青年の理想像に近かったように。そしてアポロの神殿に掲げられたというソクラテスの標語、「汝、自らを知れ」(“Know thyself”) は Basil のものでもあったであろう。彼は哲学で学位を取った男である。ところで “Know thyself”こそ Lawrence の否定して止まない標語であった。“The Ladybird”と同じ頃執筆されたエッセイ、*Fantasia of the Unconscious* の第六章 “First Glimmerings of Mind” の冒頭で次のように力説する。

We can now see what is the true goal of education for a child. It is the full and harmonious development of the four primary modes of consciousness, always with regard to the individual nature of the child.

The goal is *not* ideal. The aim is *not* mental consciousness. We

want *effectual* human beings, not conscious ones. The final aim is not *to know*, but *to be*. There never was a more risky motto than that: *Know thyself*. You've got to know yourself as far as possible. But not just for the sake of knowing. You've got to know yourself so that you can at least *be* yourself. 'Be yourself' is the last motto.⁷⁾

現代西欧文明の病根を知的、観念的方向を求めることにあったと考えた Lawrence は 'Knowing' に対して 'Being' を主張しつづけたのである。はじめに存在したのは観念ではなく肉体であったはずである。Basil は作品の終末においても、*"And then to fulfil myself, brooding through eternity."* (p. 68) というようにあくまでアポロの世界に閉じ籠ろうとするのである。彼は確かに尊敬するにたる夫ではあった。しかし Daphne にはその最深の意識 (Lawrence 流の無意識) において反発するものがあつた。彼女の上層の意志は、人生はやさしく善意と恩恵に満ちていなければならぬという固定観念にとりつかれていた。これは母親の Beveridge 伯爵夫人の信条でありそのように育て上げられたためであるが、Daphne にはもう一つ別の血が流れていた。温室育ちの花のように白い肌とすらりとした容姿は人工的といってもいい程完全なものであったが、そのきれいな青緑色の眼は、内に塞き止められた激しい気力を顕に示していた。それは父親ゆずりのものである。この激情は Daphne の内にあって捌口を見い出すことができずにいた。すでに結核菌がその肉体を蝕みはじめていていつもひ弱な感じを与えている。⁸⁾

夫が負傷して前線から帰ってくる。Daphne は Dionys を強いて意識の外にふり払おうとする。いまだ Daphne は Dionys の中に根をおろしていない。いわば彼女の内に流れる二つの血の葛藤において、母親ゆずりの博愛主義からの要請に従い根元的意識の求めるものに背を向けようとするのである。しかし、三十分後に家に着くという夫の電話の声を耳にした瞬間恐怖に胸が締めつけられる。Cambridge 出身者独特の抑揚があつたが、そこにはじめて聞く冷たい響きがある。帰り着いた Basil は彼女への愛が不変であることをその足元に膝まずいて示すのである。

He suddenly knelt at her feet, and kissed the toe of her slipper, and kissed the ankle in the thin, black stocking.

"I knew," he said in a muffled voice. "I knew you would make good. I knew if I had to kneel, it was before you. I knew you were divine, you were divine, you were the one — Cybele — Isis. I knew I was your slave. I knew. It has all been just a long initiation. I had to learn how to worship you."

He kissed her feet again and again, without the slightest self-consciousness, or the slightest misgiving. (p. 39)

Daphne の愛を失うまいとする Basil の行為はこのように描写される。もはや愛ではなく崇拜である。この場面は後に見ることになる、Daphne が Dionys の足元に膝まづく箇所と鋭い対照をなしている。H. M. Daleski が指摘するように、⁹⁾ Lawrence にとっては、この二人の愛は 'ecstatic, deadly love' であり、痛烈な皮肉をこめて描いているといえよう。戦争と死から新しい存在として自分に戻ってくることを期待した Daphne は失望する。夫の口の左端から頬にかけての長い傷痕は、Daphne にとってはいわば夫の脳髓につけられた傷にも思われるのであり、さらにいえば二人の精神主義的な不毛の愛をも象徴するものとなっている。アスタルテ (Astarte)、アイシス (Isis)、そしてヴィーナス (Venus) と Basil は妻を恰も宗教的な崇拜の対象とするのであって、まさしく Dionys のいう 'white love' の典型である。

"Well ! Now listen. The same with love. This white love that we have is the same. It is only the reverse, the whited sepulchre of true love. True love is dark, a throbbing together in darkness, like the wild-cat in the night, when the green screen opens and her eyes are on the darkness." (p. 27)

真の両性関係を文字通り生命を賭して追求、模索してきた Lawrence にとっては、Basil と Daphne の愛はとうてい容認できるものではない。愛するのは本来女であり、愛されるのは男、求めるのは女、応えるのは男である。これがすくなくとも当時の Lawrence の認識であった。¹⁰⁾ Daphne の塞き止められた

激情は依然として捌口を見い出すことができない。ここに 'demon lover' としての Dionys の侵入する余地があったのである。

(二) ディオニュソスの世界

この作品の時代背景は "The Thimble" と同様、1917 年頃の戦時下である。Daphne の母親 Beveridge 夫人は息子たちの戦死の報知に打ちのめされ、心身ともに麻痺状態に陥ってしまう。しかし博愛主義者の彼女は勇気を奮い起こして、敵の傷病兵が収容されているロンドン近郊の病院を訪ねる。そこで死にかけている Dionys を発見する。

One man lay quite still, with his eyes shut. He had a *black* beard. His face was rather small and sallow. He might be dead. Lady Beveridge looked at him earnestly, and fear came into her face.

"Why, Count Dionys!" she said, fluttered. "Are you asleep?"

It was Count Johann Dionys Psanek, a Bohemian. She had known him when he was a boy, and only in the spring of 1914 he and his wife had stayed with Lady Beveridge in her country house in Leicestershire.

His *black* eyes opened: large *black*, unseeing eyes, with curved *black* lashes. He was a small man, small as a boy, and his face too was rather small. But all the lines were fine, as if they had been fired with a keen male energy. Now the yellowish swarthy paste of his flesh seemed dead, and the fine *black* brows seemed drawn on the face of one dead. The eyes, however, were alive: but only just alive, unseeing and unknowing. (イタリック筆者) (pp. 4-5)

Lawrence によってこのように描写される Dionys は《生》から遠く離れた人物であった。しかし 'black' を多用し所謂 'darkness' を暗示していることに注意を払わねばならない。このことは Daphne の服装がいつも黒で表現されることと照応するのである。(以下の引用文中のイタリックはすべて筆者)

She wore a simple *black* frock stitched with coloured wool round

the top, ... (p. 6)

It was a cold day, and Daphne was huddled in a *black* seal-skin coat with a skunk collar pulled up to her ears, ... (p. 11)

She had taken off her furs, and wore only her dress and a *dark*, soft feather toque. (p. 14)

She wore her *black* furs and a *black* lace veil over her face, so that she seemed mysterious. (p. 43)

For some reason she had made herself very fine, in her newest dress of silver and *black* and pink-chenille, ... (p. 54)

But she saw nothing. Only she wrapped herself close in the *black* shawl, and listened to the sound from the room. (p. 61)

黒の象徴するものは多種多様であり、Lawrence 文学においては、先に述べたように根元的な生命の躍動する無意識世界を示すことが特徴的であるが、この“The Ladybird”においては、ディオニュソスとの関連で新たな意味を付与されていると考えられるのである。ギリシア神話におけるディオニュソスは本質的には、植物の精霊であり、それは大地にひそむ種子であって慈雨によって生を得てやがて成長し、繁茂し結実する。ディオニュソス祭儀の眼目は彼の死と再生の祈願にあった。Dionys と Daphne を包む黒のイメージは、それゆえ、肥沃な大地を象徴するものでもあり、再生、復活を主題とするこの作品においては大きな意味をもつことになっている。Dionys のいう、‘the whited sepulchre of the true love’ とは鋭く対照をなすのである。

Lawrence はまた、Daphne と会話するときの Dionys の歯の描写に意を注いでいる。そういう箇所は四ヶ所あり、“showing his strong white teeth,” (p. 28); “His teeth were white and powerful.” (p. 32); “showing his rather large white teeth,” (p. 32); “showing the strong negroid teeth,” (p. 33) のように表現されている。Lawrence 文学にみられる一つのパターンは女の抑圧された官能的意志が、第三者の侵入によってめざめてゆくというものである。その両者の発展過程を描写するのに五官の表情に多くを語らせる手法をとっている。FU 脱稿直後に書かれた“The Fox”とこの“The Ladybird”にそれが最も

顕著にあらわれている。¹¹⁾ 従って Lawrence Jones の次のような見解は当を得たものになっていると考えるのである。

In both [*The Ladybird*, *The Fox*] the heroine must overcome a mental, "ideal" fixation on her centre of spiritual sympathy, release her repressed sensual sympathy and arouse the sensual will in the hero. In both tales Lawrence uses physiognomic symbolism (not only of teeth, but also of eyes, lips, even noses) to mark the forces involved in the relationship and the stages of its development. ... The psychological system of the *Fantasia* gave him [Lawrence] a conceptual scheme for defining that "physiology of matter" and the corollary system of physiognomy gave him a set of symbols by which these deep inner forces could be presented externally and dramatically. To read the tales in the context of these system is to understand their meaning more clearly and fully.¹²⁾

FU の中で Lawrence は歯に関連して述べている。

In the mouth also are the teeth. And the teeth are the instruments of our sensual will. The grow of the teeth is controlled entirely from the two great sensual centres below the diaphragm. But almost entirely from the one centre, voluntary centre. The growth and the life of the teeth depend almost entirely on the lumbar ganglion. ... We have been converting ourselves into ideal creatures, all spiritually conscious, and active dynamically only on one plane, the upper, spitual plane. Our mouth has contracted, our teeth have become soft and unquickenened. Where in us are the sharp and vivid teeth of the wolf, keen to defend and devour? If we had them more, we should be happier. Where are the white negroid teeth? Where? (*FU* pp. 57-58)

Daphne がはじめて見舞った頃の Dionys はひたすら死を望みつづけており、表情にも死相があらわれていたのである。Daphne の縫ったシャツを身につけた後にみられる Dionys の力強い歯は、上の引用からも明らかなように、官能的意志を象徴するものであり、彼が再生への過程にあることを物語ることにな

っているのである。黒人のように白い歯とは、理性以前の非文明的なものを暗示し、Lawrence の原始性への回帰願望を Dionys に帯びさせる役割をも果している。

ところで、Dionys がこのように描写されるのは Daphne が夫の帰還を間近にひかえた訪問のときであった。Dionys は猟園で栗を拾っている。栗の黄色く輝いている落葉の上にかがみこみ、栗のいがを見つけ、実をとり出している Dionys の姿は、Dapne に冬の食糧をためこんでいるリスを連想させる。リスは北欧神話では天界と下界の神々の仲介者である。¹³⁾ 作品の末尾のところで Dionys は自分は黄泉の国の王であると Daphne に話すところがあるが、ギリシア神話においてはすなわちヘイデーズ (Hades)、プルートー (Pluto) であり、古代エジプトにおけるオシーリス (Osiris) でもある。このように Dionys は単にギリシア神話のディオニュソスを暗示させるだけでなく、エジプト神話、さらには、古代農耕社会全般をも背景として見なければならない。¹⁴⁾ そのことは Daphne がペルセポネー (Persephone)、アイシス (Isis) などとして言及されていることと同様である。James Frazer の *The Golden Bough* の中で次のような記述があるのは示唆的である。

In ancient Egypt the god whose death and resurrection were annually celebrated with alternate sorrow and joy was Osiris, the most popular of all Egyptian deities; and there are good grounds for classing him in one of his aspects with Adonis and Attis as a personification of the great yearly vicissitudes of nature, especially of the corn¹⁵⁾.

The resemblance which his [Dionysos's] story and his ceremonies present to those of Osiris have led some enquirers both in ancient and modern times to hold that Dionysos was merely a disguised Osiris, imported directly from Egypt into Greece.¹⁶⁾

ディオニュソスとオシーリスが非常に類似した性格をもつこと、オシーリスがしばしば太陽神と同一視されることを考えるならば、作中において Dionys が Daphne に唐突に、“I am a subject of the sun. I belong to the fire-worshippers.” (p. 17) とか、所謂 ‘dark sun’ について語るとき、これら Dionys の

ことはきわめてディオニュソス的なものとなる。Dionys の神話的役割は、彼が Daphne に次のように話すとき一層明瞭となる。

“... Do I not know you, Lady Daphne? Do I not?”

She was silent for some moments, looking away at the twinkling lights of a station beyond.

“Not the white plucked lily of your body. I have gathered no flower for my ostentatious life. But in the cold dark, your lily root, Lady Daphne. Ah, yes, you will know it all your life, that I know where your root lies buried, with its sad, sad quick of life. ...” (p. 35)

植物の精霊たる Dionys は Daphne の百合の根が欲しいというのである。彼の内なる大地において共に再生しようという願望と解釈すべきであろう。しかしドラマの展開は平坦ではない。Daphne の奥深いところで Dionys に引きつけられるものを自覚しつつも上層の意識においては拒否しようとする。目前に迫った夫 Basil の帰還を待ってアポロの世界とディオニュソスの世界は対峙することになる。

(三) 二 元 論

これまで Daphne を共有する形での Basil の世界と Dionys の世界を概観してきたが、ここで少しく Lawrence の二元論を考察しておきたい。Lawrence の Croydon 時代に読んだ多くの書物の中にニーチェの哲学書も含まれており、¹⁷⁾ A. W. McLeod や S. S. Koteliansky へ宛てた手紙の中にもニーチェに言及しているものがある。¹⁸⁾ Lawrence の二元論はニーチェにきわめて類似したものであり、その影響は否定できないものと思われる。周知のように芸術衝動の類型としてのアポロ的、ディオニュソス的という用語はニーチェの『悲劇の誕生』にはじまるものである。

Much will have been gained for esthetics once we have succeeded in apprehending directly — rather than merely *ascertaining* — that art

owes its continuous evolution to the Apollonian-Dionysiac duality, even as the propagation of the species depends on the duality of the sexes, their constant conflicts and periodic acts of reconciliation. I have borrowed my adjectives from the Greeks, who developed their mystical doctrines of art through plausible *embodiments*, not through purely conceptual means. It is by those two art-sponsoring deities, Apollo and Dionysos, that we are made to recognize the tremendous split, as regards both origins and objectives, between the plastic, Apollonian arts and the non-visual art of music inspired by Dionysos. The two creative tendencies developed alongside one another, usually in fierce opposition, each by its taunts forcing the other to more energetic production, both perpetuating in a discordant concord that agon which the term *art* but feebly denominates: ...¹⁹⁾

すなわち二元性の一方を切り捨てて他方のみを肯定しようという態度ではない。対立物の結合が新しい価値を創造するというものであろう。このことは次の引用にみる Lawrence の二元論と軌を同一にしているといえる。

The lion and the unicorn are not fighting for the Crown. They are fighting beneath it. And the Crown is upon their fight. If they made friends and lay down side by side, the Crown would fall on them both and kill them. If the lion really beat the unicorn, then the Crown pressing on the head of the king of beasts alone would destroy him.²⁰⁾

The crown is upon the perfect balance of the fight, it is not the fruit of either victory. The crown is not the prize of either combatant. It is the *raison d'être* of both.²¹⁾

王冠をささえる原理はライオンと一角獣が対立しつつも均衡をとっていることにあるとする。

ニーチェは西欧文明の病根の元凶として、「ソクラテスにはじまる西洋形而上学の伝統とユダヤにはじまるキリスト教文化の道統」²²⁾を指名し、ソクラテス以前のギリシア悲劇時代における自然世界への帰郷を説いたのであった。生きた時代に三十余年のずれはありながら Lawrence の時代認識はニーチェ初期

のそれと共通している。ディオニュソスの徒、ニーチェは生存全体を大きく肯定し、ありのままの存在と軽快に遊び戯れる無垢なる小児の立場こそが、「存在の主」としての本来の自分を取りもどす人間回復の自由を可能ならしめるものとする。そして Lawrence は、先の Koteliansky宛ての手紙の中でこのニーチェの「小児」を理解できると述べている。

However Lawrence's quarrel with Plato goes deeper. For him, as for Nietzsche, Plato is not quite just a philosopher, but a philosopher who is also the embodiment of rationalism and dualism. He is a philosopher for whom 'pure spirit' and 'ideal being' are all-important and a philosopher who teaches us to view the body, its feelings and emotions with a grave distrust. It is not simply Plato as philosopher whom Lawrence attacks, but the spirit of rationalism he finds in him which attempts to substitute a part of man for the whole.²³⁾

ギリシア悲劇に死をもたらしたものとしてニーチェによって非難されるソクラテス以下の哲学者はまた Lawrence の非難の対象でもある。人間の「部分」を「全体」に代用することは許されない。Lawrence が主張するのは「生きているまごとの人間」('the whole man alive')である。先にあげた二つの元凶に対する Lawrence の攻撃は晩年においても変ることにはなかった。次の引用は *Lady Chatterley's Lover* における Connie のことばである。Mellors との逢引きから戻った彼女が夫 Clifford に、「肉体の生活は動物のそれにすぎない」と言われて反発する箇所であり、Lawrence のこの思想を代弁している。

'And that's better than the life of professional corpses. But it's not true! The human body is only just coming to real life. With the Greeks it gave a lovely flicker, then Plato and Aristotle killed it, and Jesus finished it off. But now the body is coming really to life, it is really rising from the tomb. And it will be a lovely, lovely life in the lovely universe, the life of the human body.'²⁴⁾

ニーチェとともに Lawrence の志向するところもまたプラトン以前のギリシア精神であり、ディオニュソス的精神であったのである。しかしこの "The

Ladybird”においてディオニュソスの世界の勝利を Lawrence は荒々しく謳わなかった。“The Fox”において Henry が March 獲得のために演ずる violent な行為はここにはない。Daphne を引きつける Dionys は非行動的であり、あたかも全てを見透かしているかのごとく静的である。²⁵⁾

(四) 復 活

この作品で Dionys の再生、復活を暗示するのに指貫が大きな役割を果たしている。下の方に金の蛇がついていて、上には針を押すためのてんとう虫 (ladybird) の形をした緑玉がついているものである。これは Daphne が八年前の十七歳の誕生日に Dionys から贈られたものであった。Basil の帰還前、すでに数回の訪問を重ねている Daphne に、ある日 Dionys は唐突に、その指貫を使ってシャツを縫ってくれと頼むのである。豊国論文が指摘するように²⁶⁾、Daphne がシャツを縫うという儀式は Dionys の再生、復活を象徴するものであることは確かである。オルフィック (Orphic) 教徒の信仰する神はザグレウス (Zagreus) であるが、この神格はディオニュソスの一形態であり、それによればゼウス (Zeus) とペルセポネーの子として生れ、大蛇の姿でゼウスに伴う。タイタン (Titans) に襲われたとき様々な姿に身を変えたが、牡牛の姿のとき八裂きにされる。心臓だけはヘーラー (Hera) によってゼウスに届けられ、それを呑みこんでディオニュソスを再生したとされる。また前古典時代にギリシアで流行しかけた異教の一つに、サバジ奥斯 (Sabazios) の信仰があったがこの男神も植物の精霊と考えられその秘儀にも金の蛇が神聖な動物、あるいは神の象徴として用いられたという²⁷⁾。このように見てくると、金の蛇が刻まれた指貫は“The Thimble”における男根、再生だけでなく豊穡 (fertility) をも象徴していると考えられるのであり、きわめてディオニュソス的な意味を持つことになる。さらに Dionys の家紋であるてんとう虫を縫い付ける位置が頸筋であることも重要である。ここは Lawrence によれば上層の諸中枢のうち頸部神経節 (cervical ganglion) の位置するところであり、男の積極的意志を

支配し生産的、創造的活動に向かわしめる中枢である。²⁸⁾ 後に Basil と愛について議論するとき、Dionys が「指導と服従」の思想を展開することに関わっているのである。Daphne の縫った白いフ란ネルのシャツを身につけたあとの Dionys の変貌は多弁となり白い歯を見せていることに示される。死の淵からの回復が成った Dionys の姿を見ることができる。しかし Basil と Dionys の間で優柔不断に揺れ動く Daphne の行き先は定かではない。

既に述べたように、負傷して戻った夫 Basil は Daphne に幻滅を与えるだけであった。彼女は Dionys に夢を抱きはじめる。クリスマスの少し前、黒い毛皮外套をまとった彼女は Basil を伴って Dionys を見舞う。初対面の男二人が交わす会話は愛についてである。Daphne の存在は忘れ去られたように二人だけの論争が続く。Basil が愛の至上性を説くのに対し Dionys は愛を超えるものを主張するのである。

The Count slowly shook his head, smiling slowly and as if sadly.

"No," he said. "No. It is no good. You must use another word than love."

"I don't agree at all," said Basil.

"What word then?" blurted Daphne.

The Count looked at her.

"Obedience, submission, faith, belief, responsibility, power," he said slowly, picking out the words slowly, as if searching for what he wanted, and never quite finding it. (p. 48)

"Not as a hereditary aristocrat, but as a *man* who is by nature an aristocrat," said the Count, "it is my sacred duty to hold the lives of other men in my hands, and to shape the issue. But I can never fulfil my destiny till men will willingly put their lives in my hands." (p. 49)

ここには明白に愛を超えた次元での男の「指導と服従」の思想、のちの所謂、'leadership novels' とよばれる、*Aarons Rod*, *Kangaroo*, *The Plumed Serpent* の長編で追求されるテーマが示されている。第一次大戦を「全ヨーロッパの敗北」と考え、戦争は自殺行為とみなす Lawrence の苦悩から生れた現代西欧文

明の崩壊を救済する原理であった²⁹⁾。(もっとも、数年後には自ら廃棄することになるが)しかし“The Ladybird”の主題に即して考えるならば、この会話の内容は、Dionys が本来の自己に回復していることの証左になっているが、むしろ二人の男から完全に無視されて坐りつづけ議論のあとをたどる Daphne の内面が重要である。

It was curious that, while her sympathy at this moment was with the Count, it was her husband whose words she believed to be true. (p. 47)

It was curious, she disliked his words intensely, but she liked him. On the other hand, she believed absolutely what her husband said, yet her physical sympathy was against him. (p. 48)

二度にわたってこのように描写される Daphne の内面は、Basil と Dionys との間であって意識の二層における分裂を示すものであり、ディオニュソスの世界への移行がいまだなされていないことを物語っている。

この作品のクライマックスとなる無台装置は重要である。そこは Daphne の生れた家である。Dionys が本国へ送還される前に Thoresway の Beveridge 伯爵の別荘に招待され、三人がしばらく滞在することになる。昔からの知り合いの庭師、下男、馬丁、小作そして猟番たちと気軽に話を交わし散策に日々を過ごす。このような交流のうちに彼女の抑圧された父親ゆずりの激情は捌口を見い出すかのように思われる。一方 Dionys にとってもこの別荘をとりまく自然は魅惑的であった。Lawrence はこの作品で自然を描写することを極端に控えているように思われるが、クライマックス直前の Dionys と自然との交感の場面は作中最も美しい箇所になっている。

Sitting there alone in the spring sunshine, in the solitude of the roof, he saw the glamour of this England of hedgerows and elm trees, and the labourers with slow horses slowly drilling the sod, crossing the brown furrow: and the roofs of the village, with the church steeple rising beside a big black yew tree: and the chequer of fields away to the distance.

And the charm of the old manor around him, the garden with its grey stone walls and yew hedges — broad, broad yew hedges — and a peacock pausing to glitter and scream in the busy silence of an English spring, when celandines open their yellow under the hedges, and violets are in the secret, and by the broad paths of the garden polyanthus and crocuses vary the velvet and flame, and bits of yellow wallflower shake raggedly, with a wonderful triumphance, out of the cracks of the wall. There was a fold somewhere near, and he could hear the treble of the growing lambs, and the deeper, contented baa-ing of the ewes. (p. 58)

再生以前の Dionys にとってイギリスとは、“Little houses like little boxes, each with its domestic Englishman and his domestic wife, ...” (p. 22) であり、畑があるとしてもそれは、“Little fields with innumerable hedges. Like a net with an irregular mesh, pinned down over this island and every thing under the net.” (p. 22) にすぎない嫌悪すべきものであった。この自然に対する変化は Dionys の本然の姿への移行を示すことになっているのは勿論である。花が人間の装飾品の役割をすることをきらい、樹木を賛美する Dionys は、上の引用からも明白なようにパン (Pan) のイメージも付与されているといえよう。

さてこのような背景の下に Daphne の復活の儀式が行われるのである。夜の闇の中から聞こえてくる Dionys の口ずさむ低い声は、Daphne に魔術をかけそれを聞くことが一種の脅迫観念になってしまう。鋭い耳をもつ Daphne は黒絹のショールにくるまってその音に耳を傾け、徐々に現実の世界から遠のく、そして平静を知るのである。

And then, gradually, gradually she began to follow the thread of it. It was like a thread which she followed out of the world: out of the world. And as she went, slowly, by degrees, far, far away, down the thin thread of his singing, she knew peace — she knew forgetfulness. She could pass beyond the world, away beyond where her soul balanced like a bird on wings, and was perfected.

So it was, in her upper spirit. But underneath was a wild, wild

yearning, actually to go, actually to be given. Actually to go, actually to die the death, actually to cross the border and be gone, to be gone. To be gone from this herself, from this Daphne, to be gone from father and mother, brothers and husband, and home and land and world: to be gone. To be gone to the call from the beyond: the call. It was the Count calling. He was calling her. She was sure he was calling her. Out of herself, out of her world, he was calling her. (pp. 60-61)

俄に調子の変化がみられるが、リアリズムとシンボリズムの融合は Lawrence 作品においては稀ではない。Lawrence 自身の用語によって理解できよう。

“Sound acts direct, almost automatically, upon the affective centre.” (*FU* p. 63) なのである。そして Daphne が夫 Basil の帰還を待ち侘ながら、仕立て方を覚えたシャツを夫にも縫ってやるとき、空想に耽りながら、紙切れに書き散らした歌、

“Wenn ich ein Vöglein war’
Und auch zwei Flüglein hätt’
Flög’ ich zu dir — ” (p. 31)

に呼応するものになっている。ドイツ語 (Dionys の国語である) で書かれたたわいのない歌ではあったが、そして意識の上層においては、Basil を恋慕うものであったがその飛び行く先は Basil ではなく Dionys でなければならない。月も出ていない闇の中の Dionys の寝室へ引きつけられていく。暗闇は血のように濃い密度をもって二人の周囲を流れ、時間はその中に溶け去ってしまったかのようである。

The suddenly he felt her finger-tip touch his arm, and a flame went over him that left him no more a man. He was something seated in flame, in flame unconscious, seated erect, like an Egyptian King-god in the statues. Her finger-tips slid down him, and she herself slid down in a strange, silent rush, and he felt her face against his closed feet and ankles, her hands pressing his ankles. He felt her brow and hair against his ankles, her face against his feet, and there she clung in the dark, as

if in space below him. He still sat erect and motionless. Then he bent forward and put his hand on her hair. (p. 63)

まさに幻想のヴェイルに包まれての儀式である。先に引用した Basil が Daphne の足元にひざまずく箇所と対照をなしている。更に季節が早春であることも偶然ではない。植物が年毎に枯れて死し、また大地に播かれて、地の懷に抱かれて育ち、この季節の到来と共に再び蘇るからである。Dionys を黄泉の国の王、Daphne を女王を擬すとき、その神話的色彩は一層明瞭になるのであり、神話としての真実性を読み取るべきであろう。

その夜、Daphne は一切のものが全身から抜け落ち深く眠れる。翌朝、彼女はそれまでは見られなかった繊細な処女の匂いを漂よわせている。夫 Basil は彼女の変化を察知する。彼女が Dionys を愛していることを見抜く。しかし Basil は怒ることもなく、肉体的に離れて純粹に愛しつづけることを表明する。敗北の宣言である。Dionys が収容所 Voynich Hall に戻っていく日が来る。別れ際に交わす男二人の会話でこのドラマは終っている。

“A man can only be happy following his own inmost need,” said the Count.

“Exactly!” said Basil. “I will lay down the *law* for nobody, not even for myself. And live my day —”

“Then you will be happy in your own way. I find it so difficult to keep from laying the *law* down for myself,” said the Count. “Only the thought of death and the after life saves me from doing it any more.”

“As the thought of eternity helps me,” said Basil. “I suppose it amounts to the same thing. (イタリック筆者) (p. 69)

ここでいう ‘law’ とは、“Study of Thomas Hardy” の中での ‘Love’ に対立するものとしての ‘Law’ と解釈できないであろうか。

Now the principle of the Law is found strongest in Woman, and the principle of Love in Man. In every creature, the mobility, the law of change, is found exemplified in the male; the stability, the conservatism

is found in the female. In woman man finds his root and establishment. In man woman finds her exfoliation and florescence. The woman grows downwards, like a root, towards the centre and the darkness and the origin. The man grows upwards, like the stalk, towards discovery and light and utterance.³⁰⁾

律法 (Law) の原理は女に、愛 (Love) の原理は男に最も強く表われる。女は律法の具現者、男は愛の具現者というのである。Basil が、“I will lay down the law for nobody, not even for myself.” というとき、この ‘Law’ と ‘Love’ の二元性の一方を放棄することを意味するのであり、Daphne からの離反を認めることになっている。ここにおいて Daphne は仮象の世界たるアポロの世界を飛び立ち、現象 (真理) の世界たるディオニュソスの世界への移行を完了したといえよう。最後の Basil のことば、“I suppose it amounts to the same thing.” はニーチェのいう「形而上学的な慰め」(‘metaphysical solace’)³¹⁾と解すべきものと推測するのである。

(結 び)

小論の冒頭で述べたごとく、この “The Ladybird” は Lawrence がヨーロッパ脱出直前に脱稿したものであった。Lawrence のユートピア、ラーナーニム (Rananim) を求めて異郷の地に渡り、病を負って再び戻って最後の長編、*Lady Chatterley's Lover*、中編 *The Man Who Died* を書いた。“The Ladybird” において舞台を Beveridge 伯爵の別荘に移してから終末に至るまでの支配的調子は ‘tenderness’ であるが、これはまた *Lady Chatterley's Lover*, *The Man Who Died* のものでもある。すなわち “The Ladybird” は構成、人物設定のみならず、それにつづく ‘leadership novels’ を飛び超えて最晩年の小説、エッセイの思想に連続している。*Lady Chatterley's Lover* 等の作品群が、評価はともあれ、作家 Lawrence の文学的結論であるとするならばこの中編 “The Ladybird” は勝れて Lawrence 的なものが濃厚に反映された作品といえよう。

(註)

- 1) 1921年12月7日付けの Curtis Brown 宛ての手紙に次のように記している。
 “I am writing a third: *The Ladybird* — about the same length — 30, 000 words or so. ... Also the “novelette” — *The Ladybird* — which is nearly ready.” *The Letters of D. H. Lawrence*, ed. A. Huxley (London: Heinemann, 1956), pp. 532-533.
- 2) D. H. Lawrence, “The Thimble,” *Phoenix II, Uncollected, Unpublished and Other Prose Works by D. H. Lawrence*, ed. Warren Roberts & Harry T. Moore (London: Heinemann, 1968), p. 57.
- 3) Cf. Emile Delavenay, *D. H. Lawrence; The Man and His Work* (London: Heinemann, 1972), p. 435.
- 4) 1915年10月30日付けの Lady Cynthia Asquith への手紙がそのことを明瞭にしてくれる。“My dear Lady Cynthia: This is the story: I don't know what you'll think of it. The fact of resurrection, in this life, is all in all to me now. ... The fact of resurrection is everything now: whether we dead can rise from the dead and love, and live, in a new life here, ... What is the whole Empire, and kingdom, save the thimble in my story? ...” *The Collected Letters of D. H. Lawrence*, Vol. One, ed. Harry T. Moore (London: Heinemann, 1965), pp. 372-373.
- 5) F. R. Leavis, *D. H. Lawrence; Novelist* (Harmondsworth: Penguin Books, 1964), pp. 66-67.
- 6) D. H. Lawrence, “The Ladybird,” *The Short Novels*, Vol. I (London: Heinemann, 1965), p. 29. 以下この作品からの引用は括弧内にページ数を示すことにする。
- 7) D. H. Lawrence, *Fantasia of the Unconscious and Psychoanalysis and the Unconscious* (London: Heinemann, 1961), p. 64. このエッセイ集は Lawrence 独特の主観的哲学,あるいは生理学ともいうべきもので, “The Ladybird” や “The Fox” の分析には必須のものである。これらの作品の理解には先づ Lawrence 自身の term によって考えなければならない。すくなくとも Lawrence はそのようなタイプの作家であろう。以下 *FU* と略記することにする。
- 8) 結核は *FU* によれば, “On the upper plane, the lungs and heart are controlled from the cardiac plane and thoracic ganglion. Any excess in the sympathetic mode from the upper centres tends to burn the lungs with

- oxygen, weaken them with stress, and cause consumption.” (p. 55) ということになり、Daphne の下部中枢が十分に機能していないことの傍証となっている。
- 9) “While Lawrence is benignly receptive to the idea of a woman’s kissing a man’s feet, he is quick to resent such adulation on the part of a man. In “The Ladybird” (completed in 1922), for instance, when Basil kisses his wife’s feet ‘again and again, without the slightest self-consciousness, or the slightest misgiving’, Lawrence ridicules his ‘ecstatic, deadly love’.” H. M. Daleski, *The Forked Flame; a study of D. H. Lawrence* (London: Faber & Faber, 1965), p. 248n.
- 10) See *FU*, p. 94.
- 11) “The Fox” については、拙論「“The Fox” 試論」(『北海道英語英文学』第27号)において論じてある。
- 12) Lawrence Jones, “Physiognomy and the Sunsual Will in *The Ladybird* and *The Fox*,” *The D. H. Lawrence Review*, Vol. 13, No. 1 (Spring 1980), 6.
- 13) Gertrude Jobes, *Dictionary of Mythology Folklore and Symbols*, Part 2 (New York: The Scarecrow Press, 1962) の ‘Squirrel’ の項に次のような記述がある。“In Norse mythology deity messenger, who reports the doings of man to Odin and acts as go-between for celestial and underworld deities.”
- 14) Cf. 太田三郎, 「D. H. ロレンスの『てんとう虫』」, 『シルヴァン』(東京:シルヴァン同人会, 1976), pp. 24-32.
- 15) J. G. Frazer, *The Golden Bough* (London: Macmillan, 1980), p. 362.
- 16) *Ibid.*, p. 387.
- 17) Cf. F. B. Pinion, *A D. H. Lawrence Companion* (London: Macmillan, 1978), p. 23.
- 18) Cf. *The Letters of D. H. Lawrence*, *op. cit.*, p. 120. *The Quest for Ranim*, D. H. Lawrence’s Letters to S. S. Koteliensky, ed. George J. Zytaruk (Montreal and London: McGill-Queen’s University Press, 1970), p. 70. この中に次のような箇所がある。“I understand Nietzsche’s child. But it isn’t a child that will represent the third stage: not innocent unconsciousness: but the maximum of fearless adult consciousness, that has the courage even to submit to the unconsciousness of itself.”
- 19) Friedrich Nietzsche, *The Birth of Tragedy & The Genealogy of Morals*, trans. Francis Golfing (New York: Doubleday & Company Inc., 1956), p. 19.

- 20) D. H. Lawrence, "The Crown," *Phoenix II*, *op. cit.*, p. 371.
- 21) *Ibid.*, p. 373.
- 22) 工藤綏夫『ニーチェ』(清水書院, S.42), pp. 4-5.
- 23) Aidan Burns, *Nature and Culture in D. H. Lawrence* (London: Macmillan, 1980), p. 3.
- 24) D. H. Lawrence, *Lady Chatterley's Lover* (London: Heinemann, 1960), p. 291.
- 25) この非行動的である Dionys との関連で、ニーチェがハムレットはディオニュソスの人間であると指摘しているのは興味深い。"... Dionysiac man might be said to resemble Hamlet: both have looked deeply into the true nature of things, they have *understood* and are now loath to act. They realized that no action of theirs can work any change in the eternal condition of things, and they regard the imputation as ludicrous or debasing that they should set right the time which is out of joint. Understanding kills action, for in order to act we require the veil of illusion; such is Hamlet's doctrine, ..." F. Nietzsche, *op. cit.*, p. 51.
- 26) Cf. Takashi Toyokuni, "D. H. Lawrence's *The Ladybird* — A Modern Myth —," *The English Literature in Hokkaido*, XVII, (1972) pp. 40-53. この箇所以外にもこの論文より多くの示唆を与えられたことを付記しておく。
- 27) 呉 茂一『ギリシア神話(上)』(新潮社, S.42), pp. 199, 217.
- 28) Cf. *FU*, pp. 105-106.
- 29) この思想は *FU* の最終章, "The Lower Self" においても詳しく述べられている。
 "But what sort of a living dynamic relation? — Well, *not* the relation of love, that's one thing, nor of brotherhood, nor equality. The next relation has got to be a relationship of men towards men in a spirit of unfathomable trust and responsibility, service and leadership, obedience and pure authority. Men have got to choose their leaders, and obey them to the death. And it must be a system of culminating aristocracy, society tapering like a pyramid to the supreme leader." (p. 179)
- 30) D. H. Lawrence, "Study of Thomas Hardy," *Phoenix, The Posthumous Papers of D. H. Lawrence*, ed. Edward D. McDonald (London: Heinemann, 1967), p. 514.
- 31) F. Nietzsche, *op. cit.*, p. 107.

there 構文の意味主語としての 定冠詞つき名詞句について

東 毅

On *the*+NP's as Notional Subjects in *there*-Sentences

Takeshi Higashi

Abstract

It is said that definite NP's cannot be used as arguments of *there*-sentences, because the function of *there*-sentences is the introduction of new information into a situation. But, actually, we often see definite NP's as notional subjects in *there*-sentences. How can we explain this fact? Rando and Napoli (1978) gave an answer to this question. They divide *there*-sentences into two types: EXISTENTIAL and LIST. 'Existential' *there*-sentences typically allow only indefinite NP arguments, while 'list' *there*-sentences accept both indefinites and definites. The reason why 'list' *there*-sentences allow definite NP's is that the argument is the list itself, not the individual members of that list. But I think we must take the notion of 'choice' they noticed into consideration as the most important factor, and that it is necessary to find out some causes that induce a speaker or a writer to choose items. Otherwise, we cannot explain my example which does not belong to 'existential' *there*-sentences or 'list' *there*-sentences by one general principle. I try to find out such a principle in this paper.

1. *there* 構文は、話者・書き手が何らかの場面や文脈において聴者・読者にとって初めてのもの、つまり、その談話における新情報を導入紹介する機能をもっている、不定名詞句が主語になるのが普通であると一般に言われて

いる。しかし、実際には、定名詞句が主語になっている文も見られる。定名詞句の代表的なものとして、例えば、定冠詞つき名詞句があるが、定冠詞はその談話において聴者・読者も当然わかっていると思われる名詞に付加されるのが普通である。だとすれば、定冠詞つき名詞句によってあらわされたものは、すでに聴者・読者にわかっているから新情報と言うことはできない。従って、定名詞句は *there* 構文の主語として用いることができないように思われる。しかし、実際には、*there* 構文の主語として定名詞句が用いられている場合が見られる。そして、このような場合に対する説明もいくつか見られる¹⁾。本稿では、Rando and Napoli (1978) の論文を中心にして、彼等のリストの考え方を検討し、リストの考え方の根底にあるものとしての「選択」の意味を考え、Rando and Napoli ではとりあげられていない例を筆者の例から紹介して、この例にも適用できる共通の説明がないものかどうか考えてみたい。

2. Rando and Napoli (以下 RN) は *there* 構文²⁾を Existential sentences と List sentences の二つのタイプに分ける。

(1) There's {^a_{the}} woman in the house.

(2) Q. How could we get there?

A. Well, there's the trolley...

(3) Q. What's worth visiting here?

A. There's the park, a very nice restaurant, and the library.
That's all as far as I'm concerned.

(4) Q. Who all has been in this room since closing time?

A. There's only the night-watchman.

(1) は, Existential sentences, (2), (3), (4) は, List sentences である。List sentences は、不定名詞句、定名詞句³⁾のいずれの生起をも許すが、Existential sentences は定名詞句の生起は許さない。しかし、実際には次のような場合は定名詞句が許される。

(a) 最上級の場合

(5) There's the strangest bird in that cage.

この文が許されるのは, the strangest bird が a very strange bird という 'remarkable' (i. e. indefinite) な読みをもつ場合であって, 文字通りの最上級の読みをもつ場合ではない。

(b) 関係節, 特定の修飾語に限定される場合

(6) In England there was never the problem that there was in America.

(7) There was never the same/equivalent problem in America.

(6) では problem に定冠詞がついているのは, 関係節内において problem が anaphoric であった為と考えられる。つまり, (6) の the の原因は後方の関係節にある。(7) においては, 比較の対象とされた problem は旧情報であるが, 文中の problem は新情報である。RN は, 定冠詞つき名詞であっても, 意味上 indefinite な事例として以上の場合だけをとりあげているが, 鈴木 (1977) は以上の場合をも含む次のような更に多くの場合に注目している。

1. 前置詞 of + 名詞句
2. 関係節を伴う場合
3. 同格節を伴う場合
4. 一定の前置修飾語を伴っている場合

これら 4 つの場合に対して, 以下のような例が挙げられている。

(8) There's the possibility of improving the defects of the theory.

(9) There is the one who Lucille divorced in the room.

(10) There's the hope that this discovery will revolutionize surgery.

(11) There was the most surprising odor in the closet today.

(12) the main reason, the precise reason, the only occasion, the same student, the chief concern, the principal dancer, the leading director, the very reason, etc.

(8) が 1, (9) が 2, (10) が 3, (11), (12) が 4 の例である。これらの定名詞句は, 鈴木 (1977) の表現をそのまま借りて, 意味的に不定名詞句と非常に近い特徴をもち, 前置修飾語あるいは後置修飾語によって限定化を受け, その結果定冠詞を伴うものであると言えよう。ここに挙げられた例はすべて Halliday

and Hasan (1976) (以下 HH) における cataphoric な定冠詞の用法の中に含まれる。即ち、一つの名詞句内部の統語的、意味的關係に定冠詞使用の原因があると考えられる場合である。定冠詞使用の原因が名詞句内部にあると考えられる点で、その原因が名詞句の外にある anaphoric や exophoric (RN では、これら両方を包含して anaphoric) に対立しており、新情報になり得る可能性が生ずる。次のような例もここに含めることができよう。筆者の例を示す。(下線は筆者)

- (13) There was no answer.

'Don't you see - all the guests will thus be able to observe this fascinating picture by Soutine. You will become famous, and men will say, "Look, there is the fellow ten million francs upon his back." You like this idea, Monsieur? It pleases you?'

(Someone Like You Roald Dahl)

- (14) Is there the prospect for a meaningful European initiative on the Middle East? (Newsweek July 27, 1981)

- (15) But there have already been the first glimmerings of a Sixties-style movement—for example, in Maine, whose former Senator Muskie was frequently the target of anti-war sit-ins.

(The Listener May 29, 1980)

- (16) I left Anna and the others to settle down on camp-beds and mattresses in the home of one of the organisers, and made my way to a hotel. There were the usual security checks at the gate, but as I crossed the forecourt I noticed that a packed disco was in wild session in the nightclub. (The Listener April 10, 1980)

- (17) Then, of course, prostitution exists, though it tends to be fairly discreet, and there is the reverse side—officials who demand sexual favours in return for helping to get you a flat or a better job for your husband. That, too, is an old tradition.

(The Listener February 7, 1980)

- (18) Peace descended once more upon the room. Poirot felt waves of fatigue creeping over him. Too much thinking. One must relax. Yes, one must relax. One must let tension go—in relaxation the

pattern would come. He closed his eyes. There were all the components there. He was sure of that now; there was nothing more he could learn from outside. It must come from inside.

(Third Girl Agatha Christie)

- (19) “The government will have to take draconian measures,” says Andrew Duffin, a top executive at a Dublin-based subsidiary of a U. S. computer firm. “I question whether there will be the guts to do it.” Ultimately, the real choice facing Dublin is whether to act on its own or wait until credit markets make it act.

(Newsweek June 8, 1981)

定冠詞があっても本質的には indefinite な意味であるとして RN が ‘Existential’ *there*-sentences に含めた例を HH の cataphoric に相当するものと解釈することにより、このように更に多くの例が説明できる。

3. 次に、‘list’ *there*-sentences は何故定名詞句を許すかについて、RN はリストを構成する一つ一つの項目 (item) が定名詞句であっても、リスト文ではリストを構成する個々の項目ではなくリスト自体が問題なのであって、リスト自体が新情報であり non-anaphoric であると説明する。Milsark (1974) もリスト文にふれて、他の項目を全部挙げなくともその項目がより大きなリストの一項目になっていると判断できる場合 universals や quantified NP をとることができる⁴⁾と述べているが、何故そうであるのかについては不明であるとしている⁴⁾。これに対し RN は、リストの項目として定名詞句をとることが許される根底にあるものとして「選択」(choice) という要素を考えている。即ち、「すべての *wh*-question は *which*-question のようにいくつかの既知の選択対象のうちどれが答えとして適当なものであるかを知らうとするものであって、答えとして選ばれた名詞句が必ずしも新情報と言えないもの(定名詞句)であっても、答えの‘選択’は新情報である。リスト文においても同様、リスト、即ち、項目の‘選択’(the list—the choice of items—)が新情報であるから項目それ自体は定名詞句であっても構わない⁵⁾と説明している。ここで、項目の「選択」とリスト自体の関係が問題になる。次の例は、テレビ番組の内

容を紹介したものであるが、この例文中のリストを検討してみたい。

- (20) There was an interview with an actress who plays a barmaid in *Coronation Street*—almost a classic *TV times* interview. ('Are you really like the part you play on television e. g. the Scarlet Woman of Ambleside Avenue?' 'No, in real life, I have a nice house in Richmond with a loving hubby and kiddies in matching jumpers. See photo.) Then there was an interview with a lady from a widows' organisation. She was asked whether other women suspected widows of trying to steal their husbands, 'however bald and portly they might be', she was asked whether there were any compensations in widowhood and replied that she had learned to deal with cameras and motor-cars, adding that all married women should learn to drive cars—'just in case'.

Then there were the adverts, much like the ones before the programme, all about butter and bath salts and beanz and cheese—but gradually getting a bit more masculine, because it was nearly time for 'Over to Sandown Park'. (The Listner June 12, 1980)

この例では、最初と二番目の二つの an interview と the adverts はリストを構成しているとは言えないであろうか。the adverts はリストの一項目であると考えることによって、ここで用いられている理由を説明することができるであろう。そして、the adverts を含む *there* 構文を仮に潜在的なリスト文^⑥とすると、an interview を含む他の二つの *there* 構文も潜在的なリスト文と言わねばならない。完全なリストは、これらの潜在的なリスト文によってとりあげられた項目を集めてできあがる。このように、完結したリストは単一文の内部にばかりでなく文単位を越えて存在することもある。そこで、RN が言うようにリストそのものがユニークで non-anaphoric なものであるというとき、(2) や次の (21) のような中断したリストや (20) の潜在的なリスト文については、どのように説明すればよいのであろうか。

- (21) A. I don't have any friend.

B. Oh, don't be silly! There's John and me and Susan and Peggy...

(RN)

リストは項目の脈絡中へのとりあげられ方次第で色々な形をとることが考えられる。結果としてできあがるリストの形がどのようなものであろうと、話者・書き手がリストの導入を目指している限り選ばれた項目はどれもリストの項目としての資格があり、従って、かくなるものとしては一つ一つの項目もまた新情報を担い得るものと言うことができると思われる。話者・書き手がリストを導入する場合には、話者・書き手の側にその状況にリストを導入できるという判断がある。そこには、話者・書き手にとって「選択」した項目の導入が妥当であると判断できる状況、即ち、相手（聴者・読者）はその項目の場面への導入が妥当であるかどうかについて判断できない、或いは、その項目がすでにわかっているものであっても（意識しているといないとを問わず）場面への導入の可能性については全く考えていないと、話者・書き手が判断できる状況がある。このような状況のあることが脈絡により明瞭に理解できる場合であれば、そこに導入された個々の項目も、それなりに新情報を担うものとしての役割を果たしているものと考えて良いのではないかと思う。ここで大切なことは、状況により生じた必要に応ずるため、話者・書き手によって可能な選択対象の中から特にその項目が「選択」されることによって、選択されたものがリストの項目になる資格を与えられたということであり、このように考えることにより、不完全なリストの項目も、完全なリストの項目も、潜在的なリストの項目も、どれも新情報を担いうるものと言うことができるであろう。

3.1 次に、*there* 構文には普通用いられないと思われる定名詞句が、リストの項目として「選択」されて用いられた例をいくつか示してみよう。

- (22) 'Here comes a candle to light you to bed, here comes a chopper to chop off your head,' sang the engines.

Still the wings went flip flip, flip flip, and there was neither sky nor sea around me, but only the sun.

Then there was only the sea. I could see it below me and I could see the white horses, and I said to myself, 'Those are white horses riding a rough sea.'

(Over to You Roald Dahl)

- (23) I could now look only with a detached eye at the passing flatness

of the countryside. My thoughts were elsewhere. I was reminded that the dirt road parallel to the tracks was the one along which Médéric and I had driven in the berlin through the raging storm. Today it was a very quiet road, but in my mind there remained the whistling winds and the emotions of that impetuous night.

(Reader's Digest January 1980)

- (24) "Like all wars, this one has left tremendous wounds that only time can heal. There are the dead, the wounded, the jailed, and those who are absent forever. Don't ask for explanations where there are none." (Reader's Digest August 1980)

- (25) Stick to your belief that a start has to be made somewhere, and that bringing Protestants and Catholics together in school might be worthwhile, and there is still the most difficult obstacle of all to face—silence. (The Listener April 24, 1980)

- (26) The thought of the sheriff stopped her. His holster would creak. He would run a blunt finger along the inside of his collar. He would say, "Let's see now, Miss Pomfret. You was standing here...."

And after him, there would be the public courtroom, and eyes upon her, and lawyers' voices under a vaulted roof.

(The Best American Short Stories 1956)

(22) では, the sun, the sea は万人に既知のものである。(23) の the whistling winds は the raging storm と anaphoric な関係にある。(24) では, 総称の意味の名詞句が列挙されている。(25) では, 文字通りの最上級が用いられている。(26) の the public courtroom は場面においては当然知られていると考えられるものである。

3.2 次に, 話者・書き手の意図によりリストの項目のとりあげられ方に特徴のあるものや, 選ばれた項目間に何らかの特徴があると思われる例をいくつか示してみよう。

- (27) Poirot sorted out the information Mrs. Oliver had supplied him with, feeling rather like a human computer.

"There lives then in the house Mr. and Mrs. Trefusis—"

"It's not Trefusis. I remember now—It's Restarick."

"That is not at all the same type of name."

"Yes, it is. It's a Cornish name, isn't it?"

"There lives there, then, Mr. and Mrs. Restarick, the distinguished elderly uncle. Is his name Restarick, too?"

"It's Sir Roderick something."

"And there is the au pair girl, or whatever she is, and a daughter—any more children?" (Third Girl Agatha Christie)

- (28) Shall we count these philosophers as cranks? Well, they are chosen to teach our exam-passing children. In the ever-rolling stream of radical students, those rebels searching for a cause before the graduate traineeship, there are strong currents of concern about the lower animals. At one extreme, there are the liberators; they may want (as I do) to stop experimental research on animals and ameliorate the obvious suffering they endure through mechanised, mass-production farming; they may go further and want to stop us hunting animals and killing them for food. At the other extreme, there are the anti-pollution freaks—true believers in the latest scientific theory, convinced that dog dung is as dangerous as tobacco (marijuana is OK, though). If these hygienic puritans have their way, we will be prevented from keeping pets—and I shall emigrate to the Nigerian bush, with dogs and tobacco, leava trail of dog-ends. (The Listener February 21, 1980)

- (29) Poirot looked at the portrait that hung behind Restarick's head. It was in a better light here than it had been at the house in the country. It showed very plainly the man who was sitting at the desk; there were the distinctive features, the obstinacy of the chin, the quizzical eyebrows, the poise of the head, but the portrait had one thing the man sitting in the chair beneath it lacked: Youth!

(Third Girl Agatha Christie)

- (30) As he fell, he opened his eyes, because he knew that he must not pass out before he had pulled the cord. On one side he saw the sun; on the other he saw the whiteness of the clouds, and as he fell, as he somersaulted in the air, the white clouds chased the sun and

the sun chased the clouds. They chased each other in a small circle; they ran faster and faster and there was the sun and the clouds and the clouds and the sun, and the clouds came nearer until suddenly there was no longer any sun but only a great whiteness. The whole world was white and there was nothing in it.

(Over to You Roald Dahl)

- (31) For the next two days there was much flying. There was the getting up at dawn, there was the flying, the fighting and the sleeping; and there was the retreat of the army. That was about all there was or all there was time for. (Over to You Roald Dahl)

- (32) First and most obvious was the loud splash police heard in the Chattahoochee in the early morning of May 22, upriver from where Cater's body was found two days later, as if someone had thrown something heavy off the nearby bridge; officers and FBI agents staked off out at the scene discovered Williams driving away in a green station wagon. His account of his movements failed to withstand checking. Then there was the station wagon itself—a similar vehicle was reportedly seen in the neighborhoods of some victims shortly before they disappeared. More telling were the dog hairs and the yellow green, and purple carpet and blanket fibers taken from William's house; ... (Newsweek June 29, 1981)

- (33) As this startling version of 'deterrence' has some bearing on the survival chances of 15 (or is it 30?) million British subjects, you might expect our politicians and our urgent attention. But, as with civil defence, there is only the silence. What, then, is the explanation? (The Listener April 10, 1980)

(27) では、リストの項目は会話の交換の中で順次的にとりあげられ、全体としてのリストは一つの文の中では完結していない。リストの項目はとりあげられては確かめられつつ少しずつ提示されている。しかも、リストの完結に対して話者は疑問を残しながら話し終っている。

(28) では、リストの項目は対立をなしている。

(29) では、動詞として複数形 were が用いられリストの項目は接続詞なし

に列挙されている。

(30) では、動詞として単数形 *was* が用いられ、各項目は *and* で接続されている。項目として、*the sun* と *the clouds* がとりあげられて、それらが順に、そして、逆にひとつひとつ *and* で結ばれて提示されることにより、主人公が地上に向かってどんどん落下していくときの様子が効果的に描写されている。

(31) では、毎日きまって行なわれることを朝から順にとりあげて提示し、同じことの繰り返しの単調な日々の経過を描写している。

(32) では、その場面にすでに導入されて、いわば、リストの項目として認められているものに新たに一項目をつけ加えている。

(33) では、*the silence* 以外に選択対象としていかなるものがあったにしても、その中から *the silence* だけが特に選ばれ *the silence* が印象的に導入されている。

筆者は、先に、リスト *there* 構文の根底にあるものとして RN の「選択」を重要な要因として注目した。即ち、リスト *there* 構文では、項目が「選択」されていることが重要なのだと考えた。そして、今、ここで、選ばれた項目は単一のものであれ列挙されたものであれ、脈絡の中で話者・書き手の意図により様々な働きをすることを例により伺い知ることができた。もう一つ列をみておきたい。Bolinger の例をとりあげてみる⁷⁾。この例では、話者の意図が表面に強く押し出されていて、*the children* が「選択」されたものであるということは一見しただけではわかりにくくなっているが、矢張り「選択」されたものと言うことができる。

(34) A: I'm surprised she hasn't left him long before this.

B: There are the children—remember!

即ち、B は A の発言を一種の *wh-question* に相当するものとして受けとり、彼女が彼のもとを去らなかった種々の原因の中から最も重要なものとして *the children* を「選択」したのである。しかし、B は、A が *the children* のことを覚えていればこんなことを言う筈がないから、そのことを忘れてに違いない。

ないと判断して remember? をつけ加えた。確かに、Bolinger が言うように、B の発言の意図は相手が忘れているであろうことを思い出させることであったと言えようが、そうではあっても、the children を *there* 構文の主語として表現することを支えているのは「選択」であると言えよう。

4. 3において、「選択」という要因を考えることによって *there* 構文の主語として定名詞句が用いられる場合を説明することができるのをみた。しかし、次のような例はどうであろうか。

(35) “You told him what you were going to do about this Stillingfleet?”

“No. I told no one. There was danger, you see.”

“Danger to Norma?”

“To Norma, or Norma was dangerous to someone else. From the very beginning there have always been the two possibilities.
The facts could be interpreted in either way....”

(Third Girl Agatha Christie)

the two possibilities は直前の To Norma, or Norma was dangerous to someone else に対して anaphoric な関係にある。そしてそれは From the very beginning と have always been によってあらわされている相手に初出の特別に設定された状況の中に導入されている。リスト *there* 構文の場合には、話者・書き手が明確にそのすべてを意識しているといないとを問わず、そこから選ぶことができる選択対象がリストの項目の背後にあることが感じられたが、その感じは例 (35) にはない。それでは、(35) の場合とリスト *there* 構文の場合とは本質的に異っていてなんの共通点もないものであるかということそうではないように思われる。リスト *there* 構文は、相手（聴者・読者）にとってその全貌が十分に把握できていないと話者・書き手によって判断できる状況があり、そこに選ばれた名詞句を導入して、相手に更に完全な知識を与えるものである (cf. 3) と言うことができよう。(35) では、相手に未知と思われる新状況を設定してそこに定名詞句を導入している。ここでは、名詞句がおかれている状況が新しいと言える。従って、ここで両者に共通していると思われることは、ある状況において定名詞句であっても、それを新情報として受け入れるに足る特

殊な状況があれば、*there* 構文によって導入できるということであろう。

5. *there* 構文の主語として定冠詞つき名詞句が用いられる場合としては、次の二つの場合が考えられる。

1. 定冠詞は、それが付加する名詞句内部の統語的・意味的理由によって付加され、名詞句外部にその理由を見出せない場合で、名詞句は定冠詞が付加しても本質的には不定の意味をもつ。
2. それを新情報として受け入れるに足る特殊な状況の中に名詞句を導入する場合⁸⁾。
 - i) 相手にとってその全貌が十分に把握できていない特殊な状況があり、そこに導入する目的で名詞句が何らかの選択対象の中から選ばれたものであると感じられる場合で、項目が列挙されることがよくある。
 - ii) 選択対象の中から選ばれたものであるという感じを全くもたない名詞句を、話者・書き手が新しく設定した状況に導入する場合。

RN はリストの項目は anaphoric であってもリスト自体は non-anaphoric である旨のことをしばしば述べている。また、項目の選択がリストであるとも述べている。筆者はリスト自体を形態の上で完結した全体でなければならないとは考えなかった。話者・書き手がリストの導入を目指していることさえわかれば、途中でとぎれて完結していないものでもリスト文と考えた。即ち、項目がより大きなリストの一部であって、その構成要素としての資格をもつものであればリスト文と考えたのである。そして、リストを構成する要素としての資格を与えるものが「選択」であり、更に、「選択」の目的は相手（聴者・読者）にその全貌が十分にわかっていないと思われる特別な状況への名詞句の導入であると考えた。ある状況で名詞句に定冠詞が付加されたとしても、その定名詞句が新しい別の状況に導入されれば、そこでは新情報になり得るのである。従って、リスト文を形態面から単に等位構造を含むものと説明しただけ⁹⁾ ではその一部しか説明されないことになる。また、リストとは言っても、話者・書き手の意図により、とりあげられた項目が単に羅列されるだけという場合ばかり

でなく、脈絡の中で多様な働きをする。特別な項目や特別な項目の組み合わせが特に選ばれた為に、脈絡の中で独特の効果が発揮されるのである。この為、一見しただけではリスト文と思えないものもある。そのような場合でも、矢張りその背後には、項目を新情報として受け入れる特別な状況があるのである。

RN のように、項目が組みあわされたものの全体がユニークなものであって non-anaphoric なものであるという点だけに着目したのでは、筆者のあげた 2. ii) の場合は non-anaphoric として特徴づけることはできない。*there* 構文の主語は、それが導入される、少なくとも相手にとっては未知なものを含む状況の中で non-anaphoric であると考えることによって、RN の気づいていない 2. ii) の場合も non-anaphoric と言うことができる。ここで気をつけておかなければならないことは、この意味での non-anaphoric は、HH の言う anaphoric と exophoric とが適用される場合を除いた場合にばかりではなく、anaphoric, exophoric であることを形態に反映した状況と、状況を異にしていれば、その場合にも適用される概念であるということである¹⁰⁾。そして、少なくとも *there* 構文の主語の性格を以上のように説明するには、HH のように Exophoric (外界照応) と Endophoric (内部照応) を中心におくよりも、照応関係をより機能的に把えて、Anaphoric と Non-Anaphoric を中心におく方が、説明し易いように思われる。尚、本稿では定名詞句として定冠詞つき名詞句だけを考察の対象にし、その他の定名詞句は除外している。これらも含めた場合にどのような結論を得ることができるかは今後の問題としておきたい。

(註)

- 1) 参考文献として挙げたものを参照されたい。
- 2) 次のような場合は、本稿では対象としてとりあげなかった。

a) *there* が副詞としての意味をもっている場合。

- i) I was, of course, quite wrong. At last we turned off the highway into what seemed an endless private drive, parked the car among the hotdog concessions and gift shops that lie like litter about America's historical monuments, and waited for the tourist bus to take us on up the hill. On either side of the road

as we made our final ascent were the remains of Mr Hearst's private zoo. A herd of zebras, some African deer, are all that now remain of what was once the world's largest private collection of animals, (William Randolph Hearst once cabled his British agent, asking her to purchase the bells of Bruges Cathedral and 'two female giraffes in good condition'.) Suddenly there was the castle. Surrounded by palms, its two shining white towers resembled a mediaeval Spanish cathedral, while the three guest-houses that also crown the hill suggested a convent or some similar religious house. (The Listener March 20, 1980)

- ii) The grab must be made with controlled speed. Edwards says that in a pre-grab position, the hand should be open, the thumb extended in a hitchhiking gesture. It is then closed around the worm so that some of the head of the beast extends beyond the thumb and index finger and as much of the body as possible is pressed against the palm.

Finally, there is the pull. Steady but gentle vertical pressure should be applied to the grabbed worm.

(Reader's Digest July 1980)

- b) 名詞句そのものが問題になるのではなく、名詞句とそのあとに続く叙述要素が結合したものの全体により、事態の存在が意味される場合。Milsark (1974) の peripheral ES, locational ES に相当する。cf. 中島文雄 (1961, p. 194)。

- i) "O. K.," said the child as he began to thread his way out of Grossman's between the stacked bags and barrels of sour pickles.

"And remember—no monkey-business!" Usher sternly cried after the child.

"O. K.," said the child.

I was standing in line at Grossman's having an order filled for my mother. And I could see my friend Usher running up the aisle for canned salmon, down the aisle for tuna fish, into the back for eggs, up front for herring, down below for barley.

"My mother says you're to give me ten cents so I can go to the movies."

There was the child standing at the counter again.

“You got a note, signed and sealed?” asked Usher.

(The Best American Short Stories 1956)

- ii) She ran over to the cot and looked in. ‘Did she take anything, Albert? How many times have you fed her? She was due for another one at ten o’clock, did you know that?’

Albert Taylor folded the newspaper neatly into a square and put it away on the side table. ‘I fed her at two in the morning,’ he said, ‘and she took about half an ounce, no more. I fed her again at six and she did a bit better that time, two ounces...’

‘Two ounces! Oh, Albert, that’s marvellous!’

‘And we just finished the last feed ten minutes ago. There’s the bottle on the mantelpiece. Only one ounce left. She drank three. How’s that?’ He was grinning proudly, delighted with his achievement.

(Kiss Kiss Roald Dahl)

- iii) This time, anyway, the sergeant paid some attention. He was taking down the little twirp’s statement—if that was the word—by now, but he glanced up quickly at the disturbance.

“You can make one call,” he said, and since they’d already confiscated Chuck’s belongings, he pushed a dime at him over the desk top. “There’s the phone over there.”

(The Best American Short Stories 1956)

- 3) 本稿では定名詞句として定冠詞つき名詞句だけをとりあげた。
 4) Milsark (1974), pp. 209–210.
 5) Rando and Napoli (1978), p. 308.
 6) 鈴木 (1977), p. 535. implicit enumeration という表現が用いられている。
 7) Bolinger (1977), p. 115.
 8) cf. 浅田 (1979), p. 44.
 9) Namiki (1973),
 10) 安井 (1978), p. 242. 東山 (1978), p. 94.

参 考 文 献

- 浅田壽男 (1979), 「there 構文の限定主語」, 『語法研究と英語教育』, 創刊号, pp. 35–46, 山口書店.
 Bolinger, D. (1977), *Meaning and Form*. Longman.

ボリンジャー, D. 中右実訳 (1981)『意味と形』こびあん書房.

Halliday, M. and R. Hasan (1976), *Cohesion in English*. Longman.

東山安子 (1978), 「there 構文における定名詞句表現」英語学第19号, pp. 90—94. 開拓社.

金口儀明 (1970), 『英語冠詞活用辞典』大修館.

Milsark, Gary (1974), *Existential Sentences in English*. Ph. D dissertation, MIT. (1979) Garland Publishing, Inc.

中島文雄 (1961), 『英文法の体系』研究社.

Namiki, Takayasu (1973), "English Existential Sentences with Definite Subjects" *SEL* 2, pp. 126—135.

Rando, E and D. Napoli (1978), "Definites in *There*-Sentences", *Language* 54, pp. 300—313.

鈴木英一 (1977), 「存在文の意味上の主語と定性・不定性」.

山形大学紀要 (人文科学) 第8巻第4号, pp. 517—543.

安井 稔 (1978), 『新しい聞き手の文法』大修館.

安井 稔編 (1980), 『海外英語学論叢 1980 年版』英潮社.

韻律理論による母音調和の分析

橋 本 邦 彦

A Metrical Analysis of Vowel Harmony

Kunihiko Hashimoto

Abstract

A paper by Steriade (1979) has presented a metrical analysis of vowel harmony. According to her analysis, a simple and revealing treatment of vowel harmony should be obtained by combining “features of the autosegmental framework with features of the metrical format for harmony rules”. Although her attempt itself may be supported, it has a number of problems, including the unification of root harmony and suffix harmony, the well-formedness condition on the underlying representation of words, the solution of double-declensional suffixes, etc.

This article will attempt to criticize Steriade's analysis and present an alternative one. The analysis here will lead us to a formulation of simple harmony rules and a coherent explanation of such data that Steriade's method cannot treat, namely, borrowed stems, exceptional stems, and nonalternating suffixes.

1. はじめに

Halle & Vergnaud (1978) 以来、母音調和を韻律理論の手法を用いて分析しようとする試みがなされている。この理論に従うと、母音調和の規則は、次の4つの基本的な事項から成り立っている。

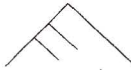
- (1) a) 映写 (projection) ある一定の仕方では調和過程に関与する分節音は、調和現象の局所的な性質をとらえるような方法で、他の分節音から分

離される。映写の適用を受ける分節音とは、普通、母音である。

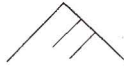
- b) 不透明要素 (opaque element) 調和を(潜在的に)惹き起し、また、調和過程を阻止する要素。映写の適用を受けた母音は走査 (percolation) され、不透明要素を調和領域の境界として、最大限の形で樹形図を構築する。
- c) 調和の方向 右方向か左方向。場合によっては、両方向。
- d) 調和素性 この素性は、調和を惹き起す分節音が所有しているものであるが、樹形図のルート (root) へコピーされ、このルートから、その支配下にある節点へと降りていく。

この4つの事項に加えて、樹形図には、3つの型の枝分れの仕方がある。

- (2) a) 左枝分れ



- b) 右枝分れ



- c) 複式枝分れ



調和の方向は、接辞の添加されていく方向と一致するから、接尾辞言語では右枝分れの樹形図を、接頭辞言語では左枝分れの樹形図を、各々、予測することができる。

本稿では、モンゴル語を資料として用い、韻律理論の枠組で、母音調和を分析することが、主な目的である。論の進め方としては、最初に、モンゴル語の母音調和を概略説明し、次に、Steriade (1979) の分析を批判検討し、最後に、より妥当性の高いと思われる代案を提示する。使用する資料は、Steriade と同様に、ハルハ方言 (Khalkha dialect) である。

2. モンゴル語の母音調和

モンゴル語には、2つの調和がある。1つは、舌の調和で、母音の後舌性に

関係している。

(3) Stems — Ablative

- a) gar — aas ‘from the hand’
- b) ger — ees ‘from the house’
- c) sudar — aas ‘from the chronicle’
- d) ünee — gees ‘from the cow’

上例に見るとおり、形態素は、専ら、後舌母音のみを含むか、前舌母音のみを含むかのどちらかである。

他の1つは、唇の調和と呼ばれ、母音の円唇性に関係する。

- (4)
- a) nom — oos ‘from the book’
 - b) torgon — oos ‘from the silk’
 - c) xöl — öös ‘from the foot’
 - d) öböös — öös ‘from the hay’

唇の調和は、a), b) と c), d) を比較してみればわかるように、後舌性にも関係している。また、高舌性にも関係し、円唇母音でも、高段円唇母音には適用しない。

(5) Stems — Causative — Perfective

- a) tol — uul — aad ‘since he caused to count’
- b) böi — üül — eed ‘since he caused to act as shaman’

モンゴル語は接尾辞言語であるから、調和過程は、左から右へと波及していく。したがって、枝分れの型は、右枝分れである。

3. Steriade (1979) の分析と問題点

Steriade の分析では、主に、次のようなことが述べられている。

- (I) 語幹の第1音節の母音にだけ、十分な形の素性指定をしておき、第2音節以下の母音については、後舌性と円唇性の素性を無指定のままにしておく。語幹の第1音節の母音が、調和素性付与の役割を演ずるのであ

る。

(II) 舌の調和と唇の調和の定式化は、(6) のようになる。

(6) (Steriade's (12))

a) Front Harmony

A: $\left[\begin{smallmatrix} +\text{syll} \\ -\text{back} \end{smallmatrix} \right]$

B: $[+\text{syll}]$

Direction: Left to Right

Harmonizing Feature: $[-\text{back}]$

b) Round Harmony

A: $\left[\begin{smallmatrix} +\text{syll} \\ +\text{round} \end{smallmatrix} \right]$

B: $\left[\begin{smallmatrix} +\text{syll} \\ -\text{high} \end{smallmatrix} \right]$

Direction: Left to Right

Harmonizing Feature: $[+\text{round}]$

(6a)では、調和を惹き起す母音は、 $[+\text{syll}, -\text{back}]$ の母音、即ち、i e ü öの前舌母音である。調和を阻止する母音は、存在しない。規則の適用を受けるのは、 $[+\text{syll}, +\text{back}]$ の母音、即ち、a u oの後舌母音である。

(6b)では、調和を惹き起すのは、 $[+\text{syll}, +\text{round}, -\text{high}]$ の母音、即ち、oとöである。調和を阻止するのは、 $[+\text{high}, +\text{round}]$ の母音、即ち、uとüである。調和の適用を受けるのは、aとeの $[+\text{syll}, -\text{high}, -\text{round}]$ の母音である。

(III) 規則(6)に加えて、調和に参加する母音が、語幹の第1音節の位置で、調和素性の十分な指定を受けられるように、基底表示に関して、次の補足的な条件を必要とする。

(7) (Steriade's (13))

[+syllabic] is $\left\{ \begin{array}{l} \left[\begin{array}{l} \pm\text{round} \\ -\text{high} \end{array} \right] \\ \left[\begin{array}{l} \pm\text{back} \end{array} \right] \end{array} \right\}$ in all and only the environment #C. —

(IV) 2つの調和規則は同時に適用し、順序づけはない。

語幹の第1音節にのみ十分な母音の素性指定を行い、後続の母音に対し、後舌性と円唇性に関して無指定にしておくという方法には、問題がある。

中立母音は、一般の場合には、母音調和に参加しないが、若干の場合には、この特徴に背くふるまいをする。

(8) Stems — Instrumental

- a) ir — eer 'with the blade'
- b) bilig — eer 'with his wisdom'
- c) ijlĩsil — eer 'with the assimilation'

中立母音語幹では、規則的に前舌母音の交替形が現われている。これは、中立母音 i の前舌性と合致している。

語幹内部でも、中立母音は、他の前舌母音と共起することができる。

- (9) a) ĩimee 'sound'
- b) gisiũin 'member'

こうした事実から、Steriade は、たとえ中立母音であっても、語幹の第1音節にある場合には、母音調和を惹き起すことができると主張する。ところが、これに対しては、不都合な例が存在する。

- (10) a) jilaa — gaar 'with the gnat'
- b) diktatur — aar 'with the dictatorship'
- c) bidon — oor 'with the churn'

もし第1音節の中立母音に調和を発動する力があるのであれば、a) に対しては、*jileegeer, c) に対しては、*bideneer のような形を付与してしまうはずである。ところが、実際には、後舌母音が現われている。いったい、a) の後舌性や c) の円唇性を、いかなる要素が決定しているというのであろうか。

この例とは逆に、語幹末の中立母音が、接尾辞の調和を惹き起す例も存在す

る。

(11) Stems — Converb

- a) lagxii — geed ‘falling down a heavy thing’
- b) ulasxii — geed ‘flashing red’
- c) baixii — geed ‘waiting for a while’

Steriade の枠組では、語幹末は、調和の適用を受けられる位置ではあるが、調和を惹き起す位置ではない。

中立母音以外の母音でも、語幹末で、調和を惹き起す場合がある。

(12) Stems — Ablative

- a) tsemodaan — aas ‘from the suitcase’
- b) Tömörtogoo — goos ‘from Tömörtogoo (personal name)’
- c) Dašinčilen — ees ‘from Dašinčilen (place name)’
- d) Šaraxöb — öös ‘from Šaraxöb (place name)’

どれも、同一語幹内で後舌母音と前舌母音が共起している点で、調和の例外である。けれども、接尾辞の調和については、語幹末の母音が、規則的な仕方、調和を決定しているように思われる。この事実を、Steriade の枠組では、説明できない。

さらに、母音配列に関しても、問題がある。Steriade は、母音を 3 つに分類する。調和を惹き起すものと、調和の適用を受けるものと、調和を阻止するものとである。唇の調和では、u と ü が調和を阻止する母音である。この場合、注意すべきことは、u と ü が調和過程を阻止するために働くのは、専ら、接尾辞においてである。再び、例 (5) に戻ると、

(5) Stems — Causative — Perfective

- a) tol — uul — aad
- b) böl — üül — eed

唇の調和は、語幹と完了形接尾辞の間に使役形接尾辞が介在しているために、阻止されている。そうでなければ、(13) の示すように、完了形接尾辞は、唇の調和の適用を受ける。

(13) Stems — Perfective

a) tol — ood ‘having counting’

b) böł — ööd ‘having acted as shaman’

(5) の母音配列は、o—uu—aa と ö—üti—ee のように、[−high, +round] — [+high, +round] — [−high, −round] の順である。ところが、語幹内部では、このような順序の母音配列は見出されない。もし Steriade の主張するように、語幹と接尾辞を1つの調和過程で説明しようとするならば、上記の母音配列の相違を説明できないであろう。

以上の事実から、次のことがわかる。

(I) 語幹と接尾辞とに、同一の調和のステイタスを与えることはできない。

むしろ、語幹は、個々に、レキシコンの中に、十分な母音の素性指定を受けて記載されていると考えるのが妥当である。

(II) 中立母音は、通常、母音調和に参加しない。

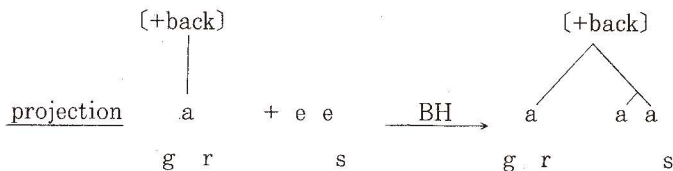
(III) 調和の適用を受けるのは、接尾辞母音だけである。その際、調和素性は、語幹末の母音によって付与される。

4. 舌の調和の分析

接尾辞の基底母音は、[−back, −round] の素性をもつ母音である。その理由は、[−back, −round] 以外の母音を含む非交替接尾辞（調和の適用を受けない接尾辞）は存在しないからである。尚、舌の調和は、前舌母音を後舌音に変換する規則であるから、これを Backing Harmony（今後 BH と略称）と呼ぶことにする。

4-1 後舌母音語幹と前舌母音語幹

(14) a) gar — aas ‘from the hand’

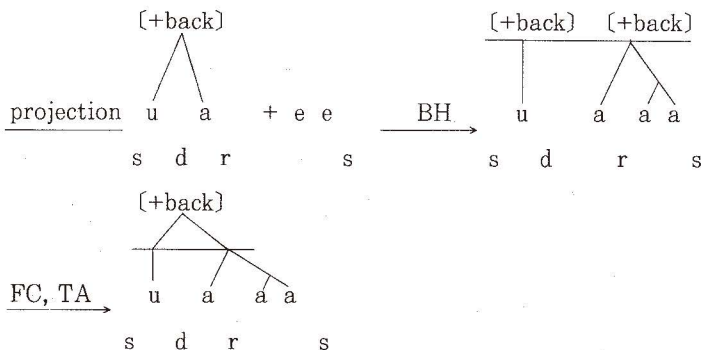


b) ger — ees 'from the house'

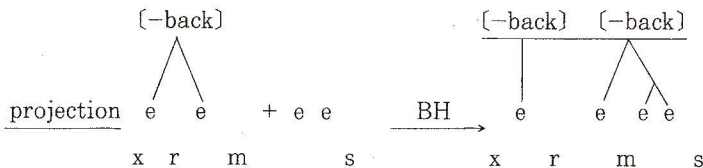


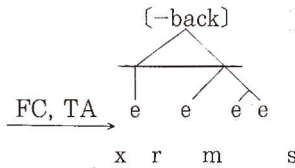
語幹の母音は、後舌性に関して、基底で指定を受けている。(14a) では、語幹の後舌母音が接尾辞の前舌母音と樹形図を形成することにより、 $[+back]$ の素性が接尾辞の母音に分配され、その母音を $[+back]$ に変換する。(14b) では、語幹の前舌母音が接尾辞の前舌母音と樹形図を形成する。このとき、 $[-back]$ の素性は *vacuos* に分配される。

(15) a) sudar — aas 'from the chronicle'



b) xerem — ees 'from the squirrel'





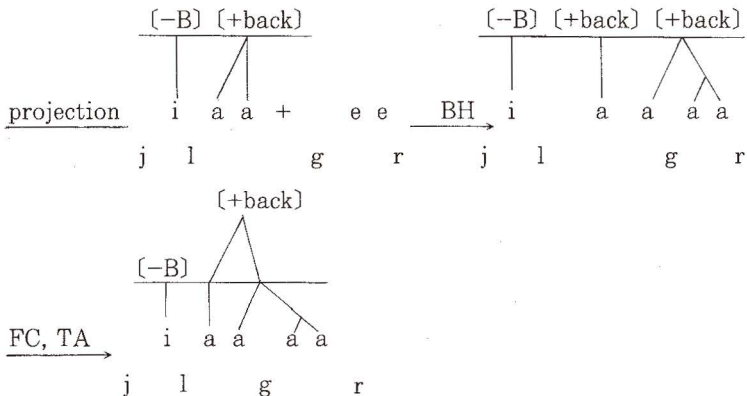
(15) では、語幹の 2 つの母音が、すでに樹形図を形成している。これに接尾辞の母音が付加されるとき、語幹末の母音が調和を惹き起すのだから、この母音が新たに接尾辞の母音と樹形図を形成する。その際に分配される素性は、a) では [+back], b) では [-back] である。最後にフット (foot) をフット構築規則 (Foot Construction, 今後 FC と略称) により、再調整規則 (Tree Adjustment, 今後 TA と略称) によって残りの語幹母音と樹形図を形成する。

4-2 混合母音語幹

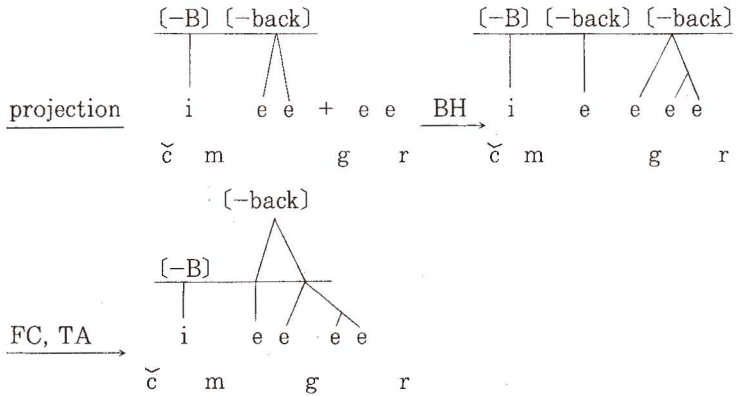
語幹に中立母音をもつ語幹を混合母音語幹という。混合母音語幹は、中立母音の位置によって、2 つの型に分類される。

4-2-1 第 1 音節に中立母音のある語幹

(16) a) jilaa — gaar ‘with the gnat’



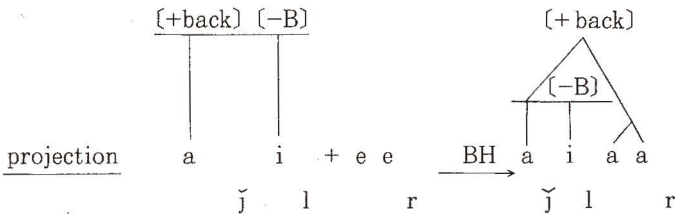
b) čimee — geer ‘with the sound’



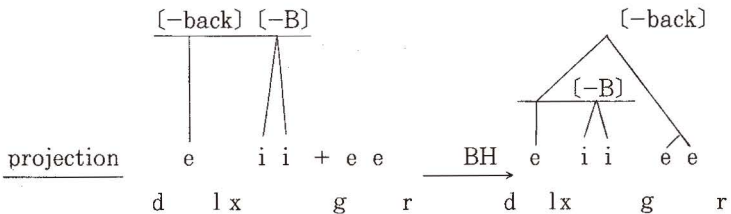
基底で語幹母音は樹形図とフットを形成している。フットがある理由は、中立母音が舌の調和 (BH) の適用を受けないように、 $[-B]$ という規則素性を付与されているからである。 $[-B]$ の存在によって、中立母音は、けして他の母音と樹形図を作ることはない。

4-2-2 語幹末に中立母音のある語幹

(17) a) aĵil — aar 'with the work'



b) delxii — geer 'with the world'



語幹末に中立母音がある場合にも、中立母音は他の母音と樹形図を作ることはない。また、フットをすでに構成しているので、調和素性の分配は、中立母

音を飛び越える形でなされる。

4-3 例外的に中立母音が調和を決定する場合

4-3-1 中立母音語幹

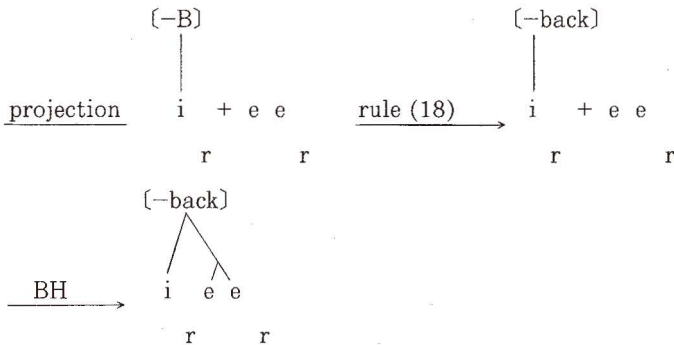
語幹が中立母音だけからなる場合には、語幹末の中立母音が、接尾辞の調和を惹き起す。それは、中立母音語幹では、例外素性〔-B〕を削除する、韻律レベルの規則が働くためと考えられる。

(18) 〔-B〕 Deletion Rule

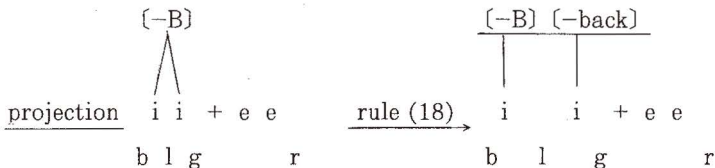
$$[-B] \longrightarrow \emptyset / \begin{array}{c} \text{---} \\ | \\ i \text{ } C_o \# \end{array} \quad \text{*in neutral vowel stems}$$

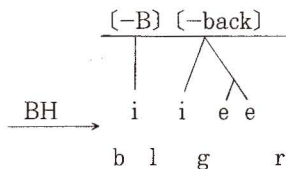
この規則によって、中立母音は、本来備わっている前舌母音の効力を回復する。この規則は、また、調和規則の前に順序づけられる。

(19) a) ir — eer ‘with the blade’



b) bilig — eer ‘with the wisdom’

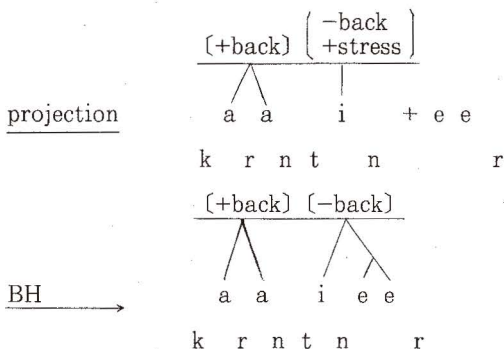




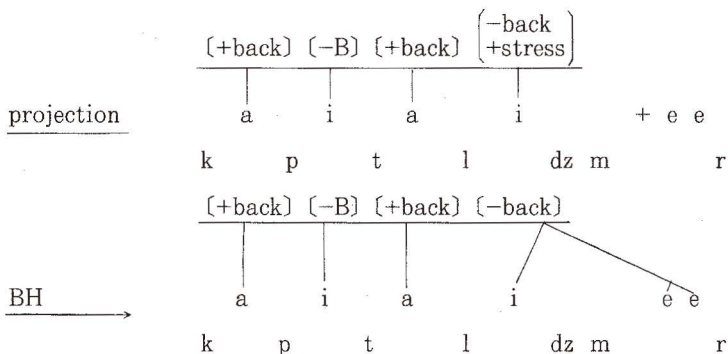
4-3-2 ロシア語からの借用語で中立母音に強勢をもつ語幹

この型の語幹は、強勢を有する [+high, -round] の母音によって、接尾辞の交替形が決定される。この母音は、モンゴル語の中立母音としてよりも、ロシア語の音韻体系に属する母音としての性格が濃いのではないかと推察される。

(20) a) karantŋn — eer 'with the quarantine'



b) kapitalŋdm — eer 'with capitalism'



a) では、i の [+stress] が、素性 [-back] を顕在化させて、接尾辞の調和を惹き起す。b) では、2つあるうちの [+stress] を有する i が a) の場合

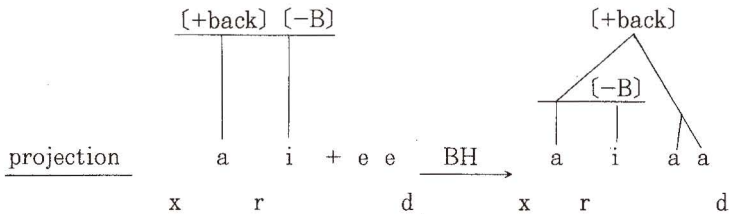
と同様、調和の決定要素になる。もう一方の *i* は、普通の中立母音と同じステイタスを与えられる。

4-3-3 -xii で終る語幹

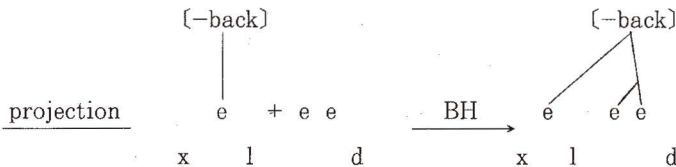
動詞語幹が -xii という音節で終る場合、たとえそれが後舌母音語幹であっても、接尾辞は、前舌母音の交替形をとる。

比較という点から、最初に、-xii 以外の音節で終る語幹を分析する。接尾辞は、副動詞接尾辞 (converb suffix) である。

(21) a) xari — aad ‘returning’



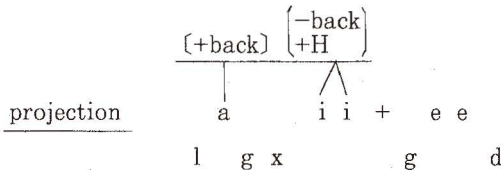
b) xel — eed ‘speaking’

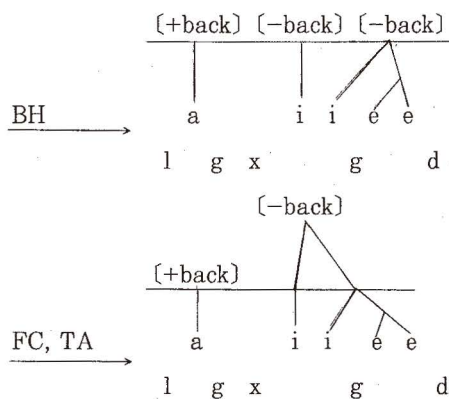


a) では、中立母音を飛び越える形で、規則通りに調和が適用し、交替形は後舌母音に変換される。b) も、普通の形の調和の例である。

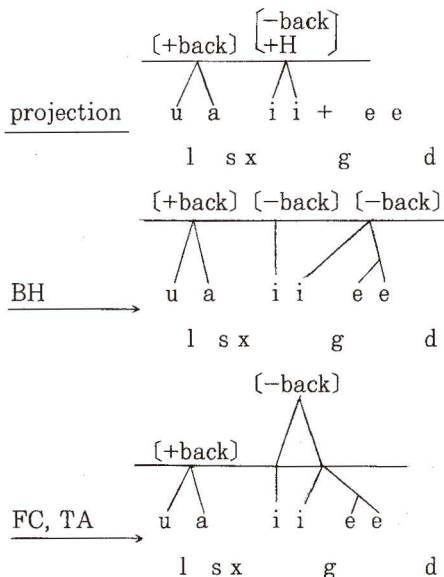
次に、-xii で終る語幹の例を分析する。

(22) a) lagxii — geed ‘falling down a heavy thing’





b) ulaxxii — geed 'flashing red'



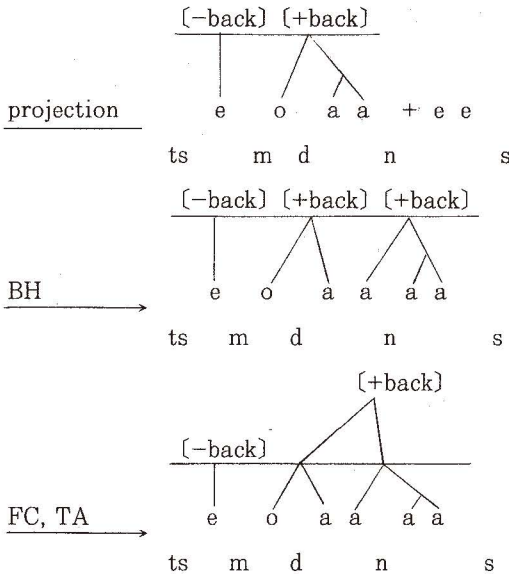
語幹の母音の素性指定のうち、音節 -xii の含む中立母音には、[+H] のような識別素性が付与されている。これは、中立母音が例外的に調和過程に関与することを示す。この事実は、-xii が、語幹内で、1つの下位区分（準独立の要素）をなすかのような印象とも一致する。但し、同じことを説明するのに、たとえば、“=”のような境界標識を用いることも可能であるが、そうした場合に、

韻律レベルとは異なるレベルでの妥当な説明が要求される。そうすると、分析が複雑になり、一貫性にも欠けるので、好ましくないように思われる。

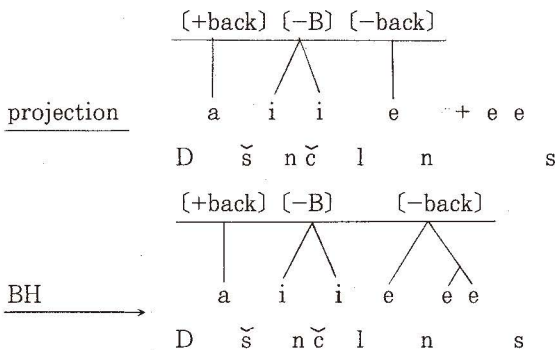
4-4 例外語幹

母音の共起上の制約に違反している語幹については、どうであろうか。

(23) a) tsemodaan — aas 'from the suitcase'



b) Dašinčilen — ees 'from Dašinčilen'



a) と b) 共に、語幹母音はそれぞれ、後舌性に関して、異なる素性指定を

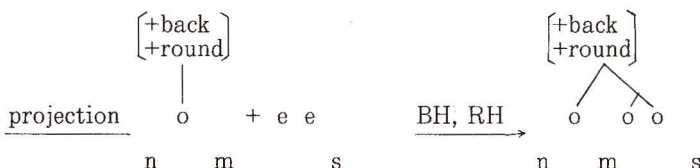
受けている。語幹末の母音が接尾辞の母音と樹形図を作り、正しい派生形が得られる。

5. 唇の調和の分析

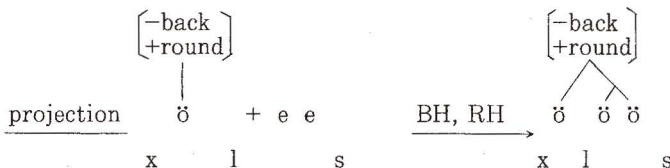
舌の調和と唇の調和は、同時に適用される。但し、途中に u や ü が介在する場合には、唇の調和だけ、その適用が阻止される。尚、唇の調和は、非高段母音を円唇母音に変換する規則であるから、これを Rounding Harmony (今後 RH と略称) と呼ぶことにする。

5-1 普通の語幹

(24) a) nom — oos ‘from the book’



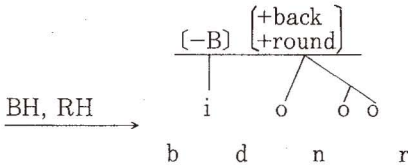
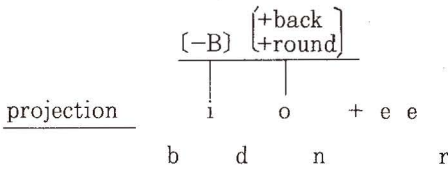
b) xöl — öös ‘from the foot’



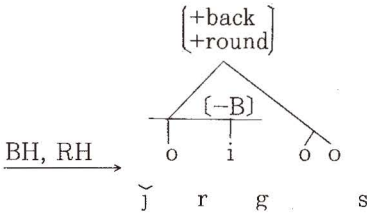
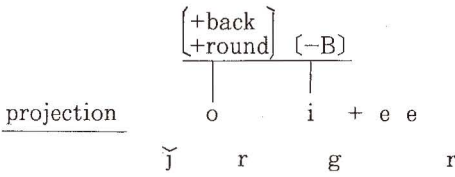
舌の調和と唇の調和は同時に適用するので、語幹の母音の素性は、後舌性と円唇性に関して付与されている。2つの調和過程の順序立てを考慮に入れずに済ませることができるという点も、韻律理論による分析の利点の1つといえる。

5-2 混合母音語幹

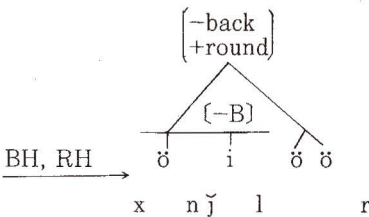
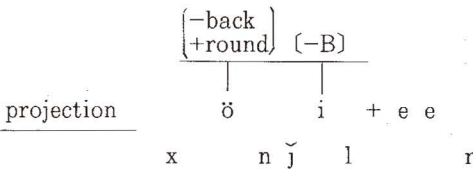
(25) a) bidon — oor ‘with the churn’



b) jorig — oor 'by the purpose'



c) xönjil — öör 'with the blanket'

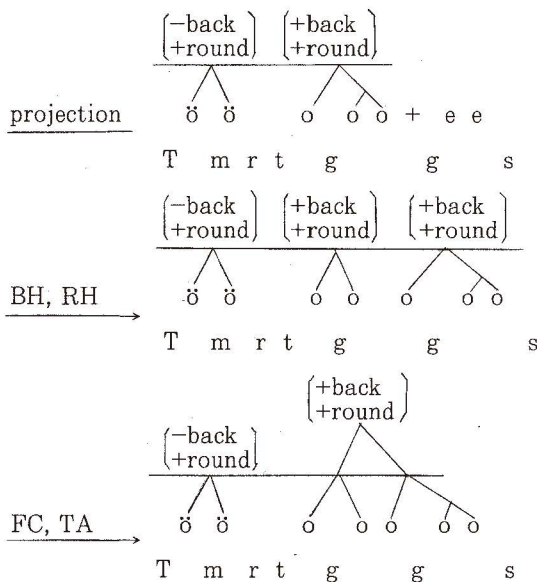


a) は、第1音節に中立母音がある例で、b) と c) は、語幹末に中立母音がある例である。どちらも、中立母音以外の母音で、語幹末にもっとも近い母音が、接尾辞の交替形を決定している。

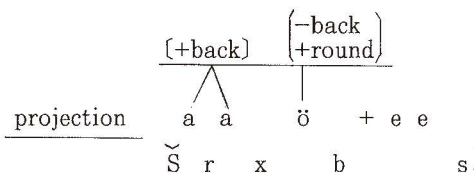
5-3 例外語幹

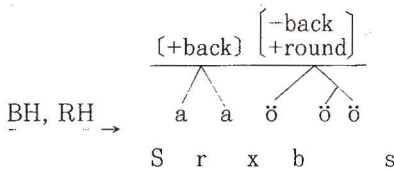
語幹の母音配列の制約に違反している例では、どのような分析が可能であろうか。

(26) a) Tömörtogoo — goos 'from Tömörtogoo'



b) Šaraxöb — öös 'from Šaraxöb'





a) と b) 共に、語幹の母音は、後舌性と円唇性に関して、素性の指定を受けている。このうち、調和を惹き起すのは、語幹末母音であることは、これまでの例と同様である。

6. 二重格変化

ここでは、調和過程は繰り返し適用することと、[+high, +round] の母音は唇の調和を阻止することを証明するために、二重格変化の接尾辞を分析する。

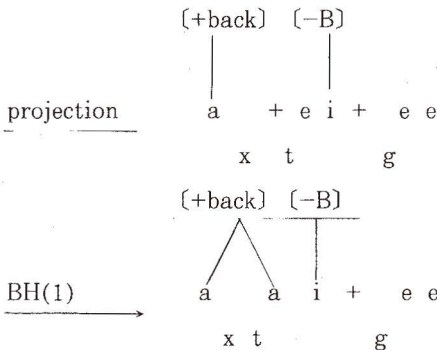
二重格変化というのは、語幹に接尾辞が2つ続く形をいう。

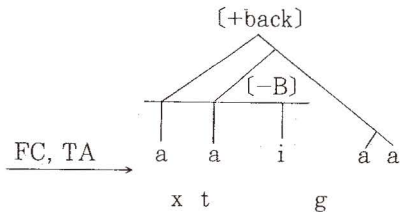
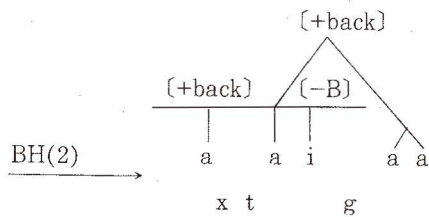
6-1 一般的な形

以下の例が示すように、母音調和は繰り返し適用する。

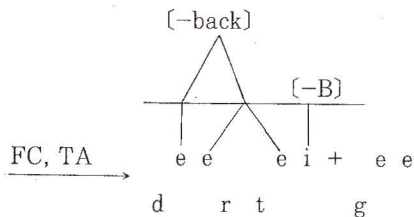
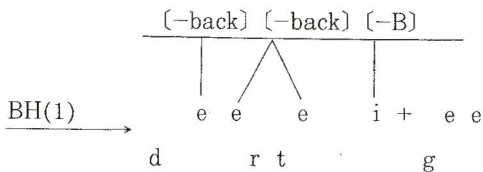
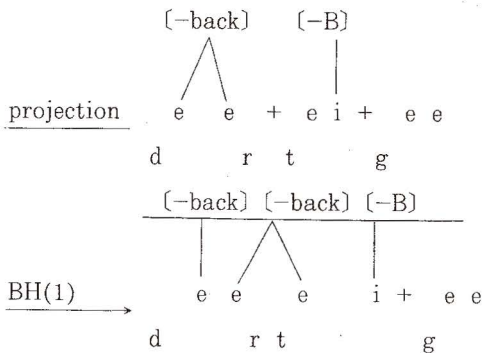
(27) Stems — Comitative — Possessive

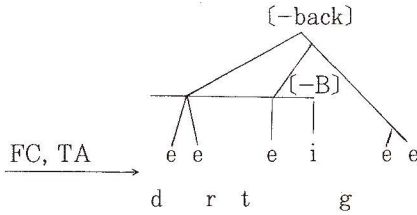
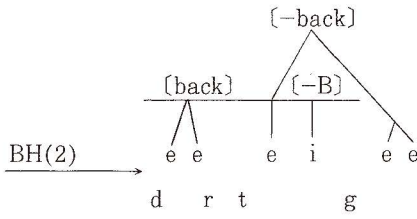
a) ax — tai — gaa 'with his elder brother'



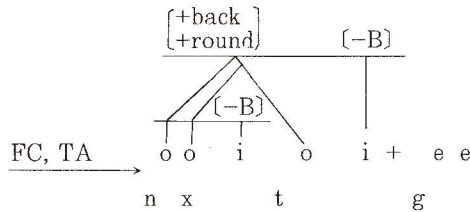
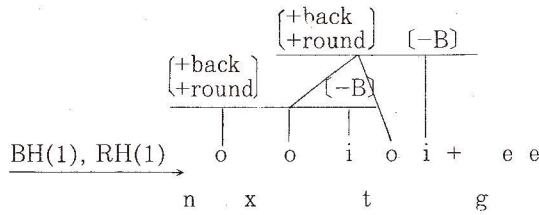
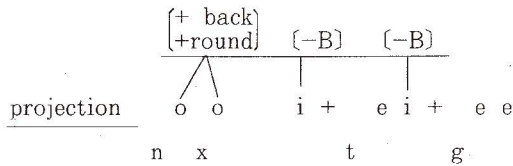


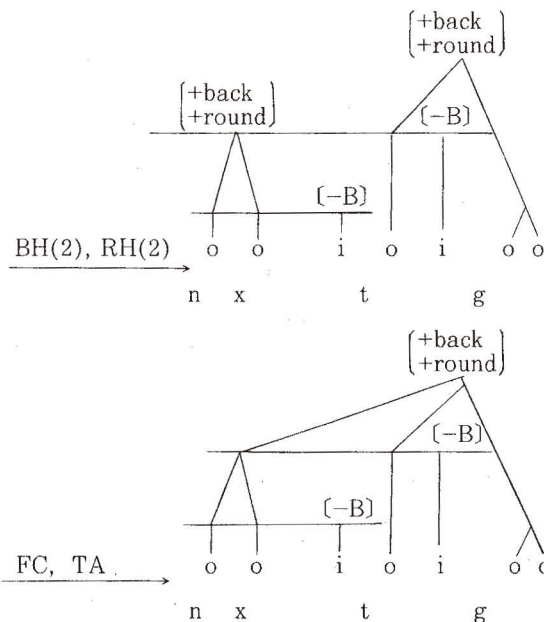
b) deer — tei — gee 'with his long garment'





c) noxoi — toi — goo 'with his dog'





語幹の中立母音も接尾辞の中立母音も、基底で [-B] と指定されている。a) と b) では、第1回目の BH の適用で、中立母音以外の接尾辞母音が、語幹末の非中立母音と樹形図を作る。b) では、その後、フットの構築と樹形図の調整が行なわれる。次いで、第2回目の BH が適用し、新たに付加される接尾辞母音とその直前の非中立母音とが樹形図を構築する。最後に、再調整され、正しい派生形が得られる。c) では、以上の過程の他に、RH の適用が加わる。けれども、派生そのものが複雑になるわけではないことは、図から判断できるであろう。

6-2 tei の場合

モンゴル語には、öi という形の二重母音はない。

(28) a) nōxör — tei — — göö 'with one's own friend'

b) nōxör — tei — gee

a) を見ると、円唇化が、二重母音 ei を飛び越えて適用しているかのようである。ところが、この二重母音のうち e に限って言えば、既出の諸例を参照

すればわかるように、円唇化され得るはずの母音なのである。

Steriade (1979) では、共同格接尾辞 *tei* を規則通りに円唇化し、その結果得られた母音に今度は所有格接尾辞の円唇化を惹き起させ、最後に、非円唇化規則を適用して、共同格の円唇母音だけを非円唇化させる。この非円唇化規則は、次のように定式化されている。

(29) (=Steriade's (20)) Derounding Rule

$$\left[\begin{array}{c} +\text{syll} \\ -\text{high} \\ -\text{back} \end{array} \right] \longrightarrow [-\text{round}] / \text{---} \left[\begin{array}{c} +\text{syll} \\ +\text{high} \\ -\text{back} \end{array} \right]$$

(28a) の形を派生させるためには、規則 (29) を所有格接尾辞母音の円唇化の後適用しなければならず、一方、(28b) の形を派生させるには、規則 (29) を、所有格接尾辞母音の円唇化の前に適用しなければならない。

(30) a) *nöxör — tei — göö*

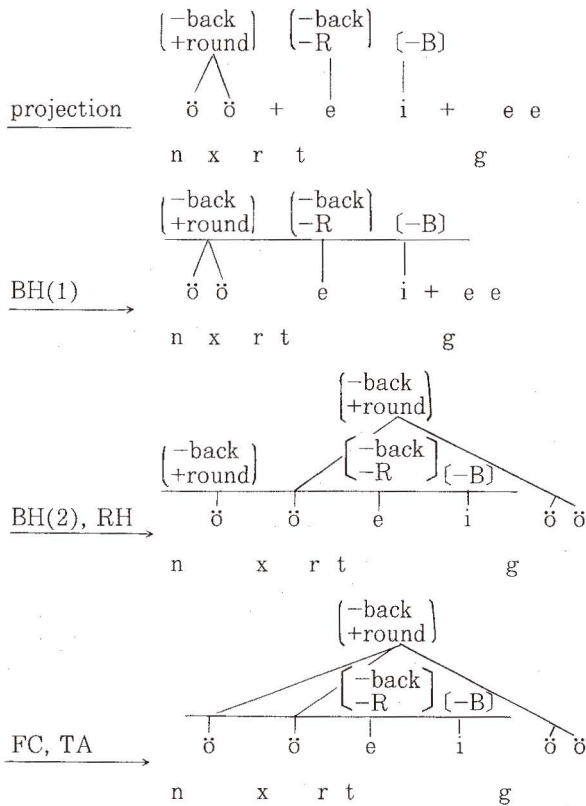
$$\begin{array}{l} \text{BH(1), RH(1)} \text{ } \underline{\text{nöxör} + \text{töi}} \text{ } \text{BH(2), RH(2)} \text{ } \underline{\text{nöxör} + \text{töi} +} \\ \text{göö} \text{ } \underline{\text{Rule(29)}} \text{ } \underline{\text{nöxör} + \text{tei} + \text{göö}} \end{array}$$

b) *nöxör — tei — gee*

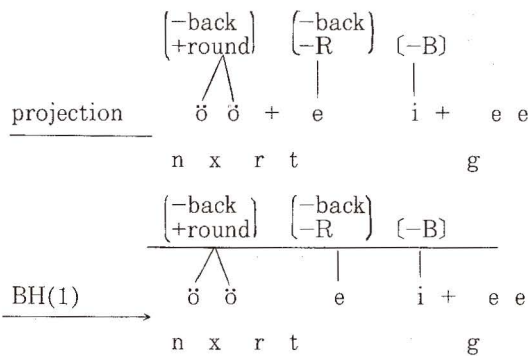
$$\begin{array}{l} \text{BH(1), RH(1)} \text{ } \underline{\text{nöxör} + \text{töi}} \text{ } \underline{\text{Rule(29)}} \text{ } \underline{\text{nöxör} + \text{tei}} \text{ } \text{BH(2)} \text{ } \underline{\hspace{1cm}} \\ \text{nöxör} + \text{tei} + \text{gee} \end{array}$$

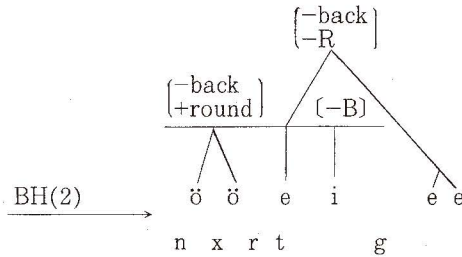
この解決法には、少くとも、2つの問題点があるように思われる。第1に、非円唇化規則の順序づけが所局的 (local) であること、第2に、非分節的なレベルでの分析の中に分節的な規則を導入してしまっていることである。代案として、韻律レベルだけで、今まで提示してきた方法を用いて、この問題を扱うことのできる解決法が存在する。それは、共同格接尾辞 *tei* の最初の母音に、[-R] のような識別素性を付与する方法である。

(31) a) *nöxör — tei — göö*



b) nöxör — tei — gee





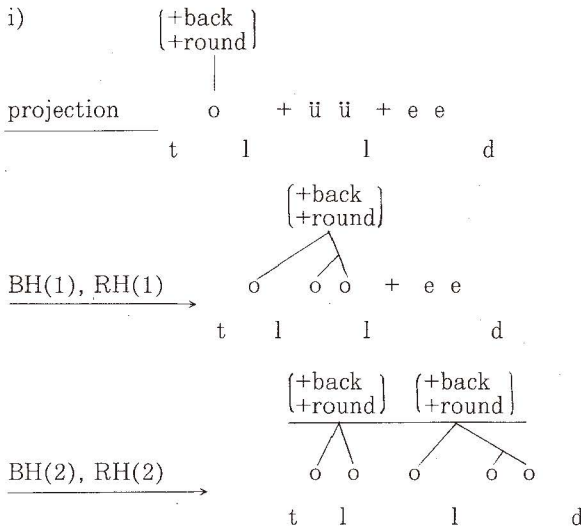
a) と b) は, [-R] があるために, 円唇母音と共同格接尾辞母音との樹形図を作らない。a) では, 語幹の円唇母音が所有格接尾辞母音と樹形図を作り, 再調整された後, 正しい形を派生させる。一方, b) では, 共同格接尾辞の非中立母音が所有格接尾辞母音と樹形図を構築する。語幹母音の素性 [+round] と共同格接尾辞母音の識別素性 [-R] との排他性から, 語幹母音が2つの接尾辞の樹形図に参加することはない。

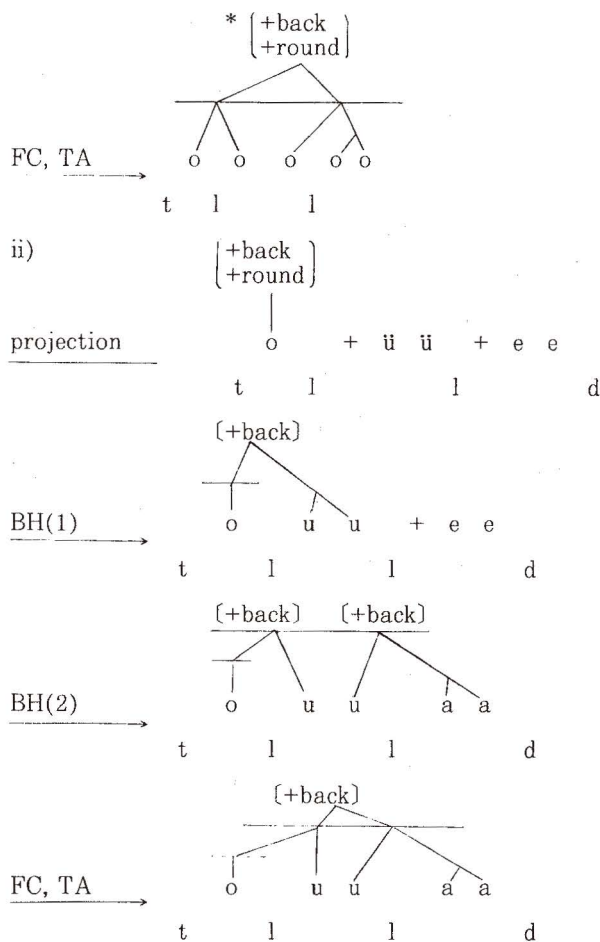
6-3 唇の調和を阻止する不透明要素

素性 [+high, +round] をもつ母音, u と ü は, 唇の調和を阻止する。

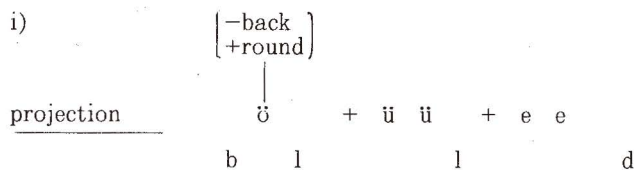
(32) Stems — Causative — Perfective

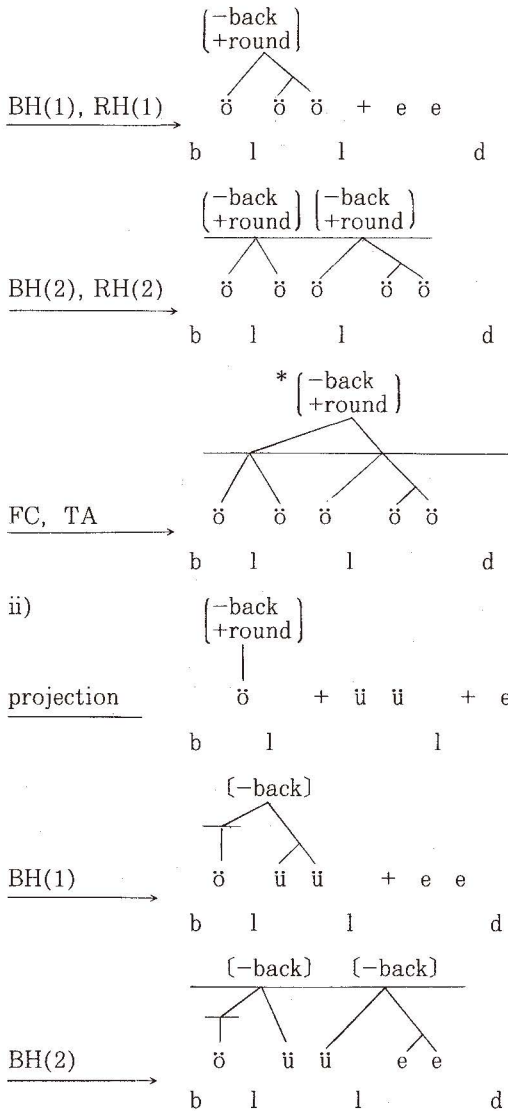
a) tol — uul — aad ‘since he caused to count’

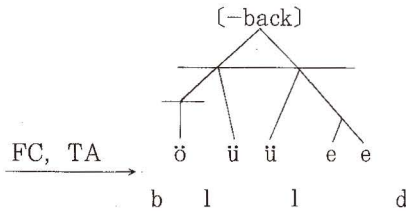




b) bol — üül — eed 'since he caused to act as shaman'







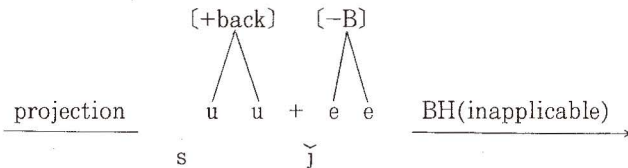
a) と b) の各 i) は、通常のやり方で母音調和を適用させ、その結果、誤った形を生み出してしまう。これは、使役形接尾辞に対して、語幹の母音の円唇性を付与してしまうような樹形図を構築してしまったためであると考えられる。代りに、語幹の調和を惹き起す母音と使役形接尾辞の母音との間を、異なるフットを介在させて結びつける方法を立てることができる。各 ii) の例が示す通りである。語幹母音の円唇性は、フットの存在のためにいわば濾過され、後舌性のみが使役形接尾辞母音に分配される。後は、従来通りに繰り返して調和が適用され、正しい形を派生する。不透明母音と唇の調和の関係は、以上のように、フットレベルの違いから簡潔に説明できるのである。

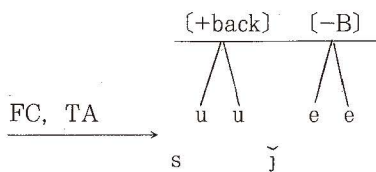
7. 非交替接尾辞の扱い方

モンゴル語には、交替形をもたない接尾辞が存在する。この接尾辞の母音は、本来非円唇前舌母音であるが、基底で、中立母音と同じ [-B] の識別素性の指定を付与されていると考えることができる。その理由は、調和に関して、中立母音とまったく同じふるまいをするからである。

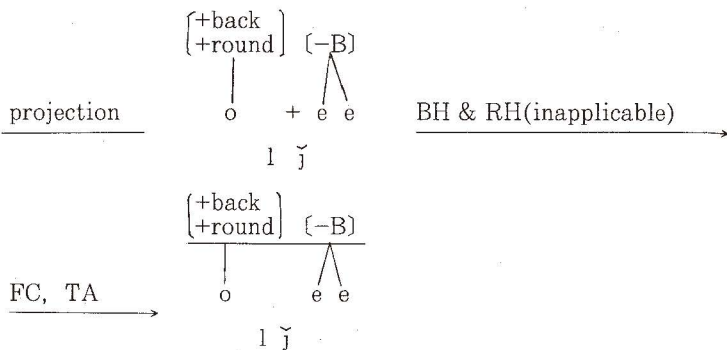
(33) Stems — Past

a) suu — j̃ee 'sat'

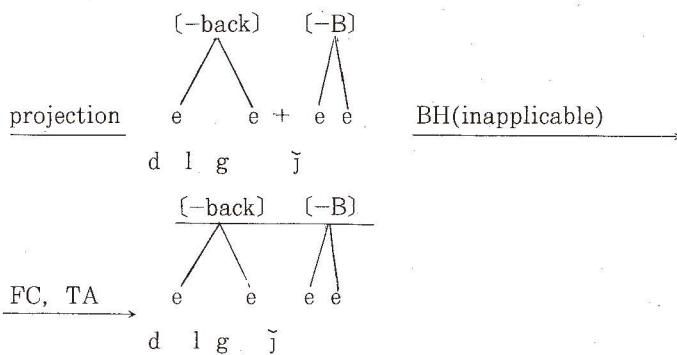




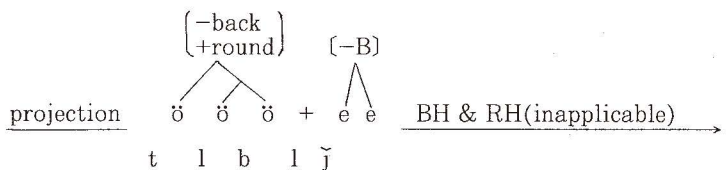
b) ol — ʃee 'discovered'

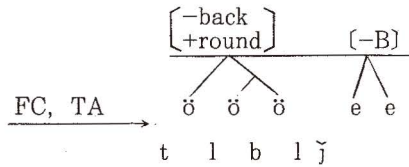


c) delge — ʃee 'spread'



d) tölöböl — ʃee 'planned'





a) から b) の各例とも, $[-B]$ の指定があるため, 語幹母音と接尾辞母音と同じ樹形図を作ることはない。それゆえ, 調和素性の分配は行なわれずに, フットが構築される。

8. ま と め

これまでの分析結果をまとめると, 次のようになる。

- (I) 語幹の母音は, 後舌性と円唇性に関して, 基底で十分な素性の指定を与えられている。
- (II) 接尾辞の母音だけが, 調和の適用を受ける。
- (III) 接尾辞の基底母音は, 前舌母音である。
- (IV) 語幹末の非中立母音が, 調和素性を決定する。
- (V) 舌の調和と唇の調和は, 同時に繰り返し適用する。
- (VI) 調和自体が, フットを構築する効果をもつ。
- (VII) 調和に関して例外的なふるまいをする母音には, 基底で識別素性が付与されている。この素性は, 分節音レベルのものではなく, 韻律レベルのものである。

以上の事実を踏まえて, 舌の調和と唇の調和を定式化すると, 次のようになる。

(34) a) Backing Harmony Rule

Projection: Vowels

Opaque segment: _____

Harmonizing feature: $[+\text{back}]$ or $[-\text{back}]$

Direction: left to right (right braching)

b) Rounding Harmony Rule

Projection: Vowels

Opaque segment: $\left\{ \begin{array}{l} +\text{high} \\ +\text{round} \end{array} \right\}$ vowels

Harmonizing feature: [+round]

Direction: left to right (right branching)

参 照 文 献

- Chinchor, N. (1978) "On the Treatment of Mongolian Vowel Harmony," *NELS* IX. 171-294.
- Clements, G. N. (1977) "Neutral Vowels in Hungarian Vowel Harmony: An Autosegmental Interpretation," *NELS* VII. 49-64.
- (1980) *Vowel Harmony in Nonlinear Generative Phonology: An Autosegmental Model*. IUCL: Bloomington.
- Halle, M. and J. -R. Vergnaud. (1978) *Metrical Structures in Phonology*. Unpublished ms., M. I. T.
- (1980) "Three Dimensional Phonology," *Journal of Linguistic Research* 1. 83-105.
- Hashimoto, K. (1979) *Vowel Harmony in Generative Phonology: A Case Study on Mongolian*. Unpublished Master's Thesis.
- Hayes, B. P. (1980) *A Metrical Theory of Stress Rules*. Doctoral dissertation, M. I. T.
- Liberman, M. and A. Prince. (1977) "On Stress and Linguistic Rhythm," *Linguistic Inquiry* 8. 249-335.
- Poppe, N. 1970. *Mongolian Language Handbook*. Center for Applied Linguistics: Washington, D. C.
- Safir, K. (1979) *MIT Working Papers in Linguistics Papers on Syllable Structure, Metrical Structure and Harmony Processes*. Vol. 1. M. I. T.
- Steriade, D. (1979) "Vowel Harmony in Khalkha Mongolian," in K. Safir (ed.) 25-42.
- Zubizarreta, M. L. (1979) "Vowel Harmony in Andalusian Spanish," in K. Safir (ed.) 1-11.

歌曲「野ばら」に関する覚書

坂 西 八 郎

エルンスト・シャーデ

Einige Verzeichnisse der „Heidenröslein“-Vertonungen*

Hachirō Sakanishi

in gemeinschaftlicher Arbeit mit

Ernst Schade**

I. „Heidenröslein“-Vertonungen

in alphabetischer Anordnung nach den Komponisten

I.-a. Bibliotheken, die Kopien von Vertonungen zur Verfügung gestellt haben.

The British Library London/Großbritannien

Bayerische Staatsbibliothek München/BRD

Deutsche Staatsbibliothek-Musikabteilung-Berlin/DDR

Gesamthochschul-Bibliothek Kassel, Bereichsbibliothek
im AVZ/BRD

Hessische Landes- und Hochschulbibliothek Darmstadt
Musikabteilung/BRD

* This register is a part of the collection of the melodies of „Heidenröslein“ (Johann Wolfgang von Goethe), which has been collected by H.Sakanishi and E. Schade. The melodies are in manuskript.

** Prof. Dr. E. Schade, Germanist (Gesamthochschule Kassel BRD)

Det Kongelige Bibliotek København/Dänemark
 Kungl. Musikaliska Akademiens Bibliotek, Stockholm/
 Sweden
 Ludwig-Erk-Sammlung Wetzlar/BRD
 Murhard'sche und Landesbibliothek Kassel
 (in der Gesamthochschul-Bibliothek Kassel)/BRD
 Nationale Forschungs- und Gedenkstätten der klassischen
 Literatur in Weimar Goethe- und Schillerarchiv/DDR
 Öffentliche Bibliothek der Universität Basel/Schweiz
 Patenschaft der Stadt Wetzlar für das ostdeutsche Lied-
 Bibliothek-/BRD
 Schweizerisches Musik-Archiv Zürich/Schweiz
 Sächsische Landesbibliothek Dresden/DDR
 Staatsbibliothek Preussischer Kulturbesitz Musikabteilung
 Berlin/BRD
 Universitätsbibliothek Bremen/BRD
 Universitätsbibliothek Gießen/BRD
 Zentralbibliothek Zürich Kantons-, Stadt- und Uni-
 versitätsbibliothek/Schweiz

I.-b. Komponisten

1. **Beethoven, Ludwig van** (1770–1827): 1818/22

Entwürfe in seinen „Taschenskizzenheften“.

1. Heft aus Beethovens Aufenthalt in Möd-
 ling, Sommer 1818. (Siehe Nottebohm,
 S. 137).
2. Heft aus dem Jahre 1820.
 (Siehe Nottebohm, S. 474).
3. Um 1820, wahrscheinlich 1822.
 (Siehe Nottebohm, S. 576).

In:

Gustav Nottebohm, Zweite Beethoveniana.

Hg. von Eusebius Mandyczewski. Leipzig
1887.

Max Friedlaender, Gedichte von Goethe
in Compositionen seiner Zeitgenossen.
Weimar 1896, S. 133.

2. **Bellermann, Joh. Gottfr. Heinrich**(1832–1903): 1883

Sängerfahrt.

Zehn vierstimmige Lieder für die Jugend im
Freien zu singen.

Opus 31, Nr. 9.

Berlin : Schlesinger (1883).

3. **Blanc, Adolf:**

**Fünf Lieder für Sopran oder Tenor mit
Pianoforte.** (S. 16–19).

Leipzig : Hofmeister

4. **Brahms, Johannes** (1833–1897): 1858

Volks-Kinderlieder mit hinzugefügter
Klavierbegleitung. Nr. 6. (Reichardt'sche
Melodie mit kleinen Veränderungen).
Leipzig, Winterthur: J. Rieter-Biedermann
(1858).

5. **Bronsart, Ingeborg von:**

**Drei Lieder für 1 Singstimme mit Piano-
forte.**

Opus 25, Nr. 2 (S. 7-10).

Leipzig : Breitkopf & Härtel

6. **Bürde, Jeanette Antonie (1799-?):**

**Zwei Gedichte von Houwald und Goethe in
Musik gesetzt.**

Berlin : T. Trautwein, Seite 10-11.

7. **Dalberg, Friedrich von (1760-1812):**

1793/94

Lieder. Dritte Sammlung.

Ihro Durchlaucht der Frau Herzogin von
Pfalz-Zweybrücken zugeeignet.

Nr. 4: Rößgen auf der Hayde.

Mainz : Schott (1793 oder 1794)

8. **Decker, Constantin:**

**Sieben Lieder für eine Bariton- oder Alt-
stimme mit Begleitung des Pianoforte.**

Opus 2, Nr. 4.

Berlin : Schlesinger.

9. **Deelman, L. H.:** nach 1870

L. H. Deelman's Text-Inspirationen.

Lieder für Haus, Schule, Kirche, Vereine
nebst Konzertsaal.

10. Heft. Kinderlieder usw.

Nr. 14.

Leipzig : Wilh. Dietrich.

10. **Dorn, Heinrich Ludw. Egmont (1804–1892):** 1832

Sechs Gesänge für vier Männerstimmen.

Opus 13. Nr. 4.

Leipzig : Fr. Kistner (1832).

11. **Engel, David Hermamm (1816–1877):**

**Fünf Chorlieder für Sopran, Alt, Tenor und
Baß.**

Opus 52, Nr. 3.

Leipzig : Fr. Kistner.

12. **Finsterbusch, Daniel Reinhold (1827–1902):**

1) **Sechs Lieder für Sopran, Alt, Tenor und
Baß. Nr. 5.**

Leipzig : C. F. Kahnt.

13. 2) In: „Immergrün.“ Lieder für eine Singstimme mit Klavierbegleitung.
Band 1, Nr. 22.

(Entspricht der Ausg. f. gem. Chor)

14. **Futterer, Carl:**

Heidenröslein.

Für Gesang und Klavier.

Manuskript aus dem Nachlaß.

Öffentliche Bibliothek der Universität Basel
(kr XXVII 95).

15. **Gade, Niels Wilhelm (1817–1890):**

1845

Neun Lieder (im Volkston) für zwei Sopranstimmen mit Begleitung des Pianoforte.

Opus 9, Nr. 6.

Leipzig : Breitkopf & Härtel 1845.

Neuere Ausgabe (Volksausg.) 1889.

Auch in:

Duetten-Kranz. Sammlung vorzüglicher
Lieder und Gesänge für zwei weibliche Stimmen.
Nr. 9.

Leipzig : Breitkopf & Härtel o. J.

16. **Götsch, Georg** (1895–1956): publ.
Deutsche Chorlieder für drei gleiche Stimmen, 1949
 3 Bde.
 Bd. 2, S. 96.
 Wolfenbüttel : Möseler (1949).

17. **Grell, August Eduard** (1800–1886):
Kinderlieder mit Begleitung des Pianoforte
 (oder ohne Begleitung zu singen).
 Opus 21, Nr. 4.
 Berlin : Trautwein.

18. **Grimmer, Friedrich**
Zwölf Lieder von Goethe.
 Manuskript (von zeitgen. Hand) in Goethes
 Notensammlung. Seite 8.

19. **Grönland, Peter** (1761–1825): 1817/18
Lieder, Balladen und Romanzen von Göthe.
 (50 Lieder) Seite 5: Heidenröslein.
 Leipzig : Breitkopf & Härtel (1817
 od. 1818).

Auch in:

Max Friedlaender (Hg.), „**Gedichte von Goethe in Compositionen seiner Zeitgenossen**“.

Nr. 8: P. Grönland, Heidenröslein.

Weimar : 1896

20. Grosheim, Georg Christoph (1764–1841):

Sammlung deutscher Gedichte in Musik
gesetzt. IV. Theil, Seite 13.

Mainz : B. Schott.

21. G'schrey, Richard (1872/76–?):

1910

Lieder und Gesänge für eine Singstimme
mit Begleitung des Pianoforte. 8 Hefte.

Heft 6: Acht Lieder.

Opus 13, Nr. 8.

Leipzig : F. Hofmeister (1910).

22. Harthan, Hans:

Vier Lieder für gemischten Chor.

Opus 26, Nr. 2.

Breslau : Julius Mainauer.

23. **Hartmann, Johann Peter Emil** (1805–1900): komp. 1832
Sechs Gesänge für eine Singstimme mit
 Begleitung des Pianoforte. publ.
 Opus 13, Nr. 1. 1839
 Leipzig : Fr. Kistner (um 1839).

Auch in:

Romancer og Sange.

Opus 13: Sex Sange til tyske Texter.

Nr. 1.

København : Wilhelm Hansens Musik-
 Forlag.

24. **Hauptmann, Moritz** (1792–1868):
 In: A. Gräßner (Hrsg.), **Sammlung von**
Liedern und Gesängen für gemischten Chor.
 Heft II: für Schulchöre.
 Nr. 57: M. Hauptmann, Heidenröslein
 (Opus 25).
 Hildburghausen: F. W. Gadow & Sohn,
 (2. Aufl. 1898).

25. **Henneberg, Carl Alb. Wilh. Richard** (1853–1925): 1884/85
Tre Sångar för Sopran eller Tenor med
 accompagnement af Piano.
 Nr. 3.

Stockholm : Elkan & Schildknecht (1884/85).
(1884/85).

26. Hollaender, Alexis (1840–1924): 1884

Sechs Duette für Sopran und Alt mit

Begleitung des Pianoforte.

Opus 10, Nr. 1.

Leipzig : Breitkopf & Härtel.

Auch in:

Duettenkranz. Sammlung vorzüglicher Lieder
und Gesänge für 2 weibliche Stimmen mit
Begleitung des Pianoforte.

II. Reihe (Nr. 21–40).

Nr. 26: A. Holländer, Haidenröslein, Op. 10,

Nr. 1.

Leipzig : Breitkopf & Härtel.

27. Hollaender, Alexis (1840–1924):

**Sechs Quartette für gemischten Chor a
capella.**

Opus 25, Nr. 1.

Berlin : N. Simrock.

28. Hollaender, Alexis (1840–1924):

Sechs Lieder für vierstimmigen Frauenchor.

Opus 28, Nr. 1.

Berlin : Schlesinger.

29. Huberti, Gustave:

La Rose de bruyère. Haidenröslein.

Pour Baryton ou Mezzo-Sopran.

Paroles de Goethe (franz. und deutsch).

Bruxelles : R. Bertram.

30. Jadassohn, Salomon (1831–1902):

**Neun volkstümliche Lieder für eine oder
zwei Singstimmen mit Pianoforte.**

Opus 72, Nr. 6.

Leipzig : Breitkopf & Härtel.

Weitere Ausgabe:

**9 Folk-Songs for two Voices with Piano-
forte Accompaniment.**

1887

English translation by Mrs. John P. Morgan.

Opus 72, Nr. 6: Haidenröslein/Rose-bud on
the heather.

New York : G. Schirmer (1887).

31. Joseffy, Rafael (1853–1915):

Neun Lieder für eine Singstimme mit
Begleitung des Pianoforte.

Nr. 7.

Leipzig : C. F. Kahnt.

32. Kienlen, Johann Christoph (1783–1829)

1810

Zwölf Lieder von Göthe.

Nr. 1.

Leipzig : Peters (1810).

Auch in:

E. L. Schellenberg (Hrsg.)

„Deutsche Volkslieder“.

Bd. 1, S. 82: J. C. Kienlen, Heidenröslein.

Auch in:

M. Friedlaender (Hrsg.), **„Gedichte von
Goethe in Compositionen seiner Zeitge-
nossen“.**

Nr. 9: J. C. Kienlen: Heidenröslein.

Weimar : 1896.

33. Kleffel, Arno (1840–1913):

Zehn zweistimmige Lieder (für hohe und
tiefe Stimme) mit Begleitung des Pianoforte.

Opus 8, Heft I (Nr. 1-5), Heft II (Nr. 6-10)

Nr. 6.

Berlin : Carl Simon.

34. Ladendorff, Otto:

**Drei Gesänge für 3 Frauenstimmen mit
Klavierbegleitung.**

Opus 9, Nr. 1.

Berlin : C. Simon.

35. Lehár, Franz (1870-1948):

1928

In: Operette „Friederike“.

London : Glocken Verlag Ltd. (1928).

36. Liebeskind, Josef (1866-1916):

**Sechs Lieder für eine Singstimme mit
Klavierbegleitung.**

Opus 9, Nr. 2.

Leipzig : Max Brockhaus.

37. Malling, Jörgen Henrik (1836-1905):

1857

In: Musikalsk Museum, Seite 48.

Aarg 11 : 12 (1857).

Auch in:

Sange med Pianoforteakkompagnement.

Kjøbenhavn : Wilhelm Hansen (1894).

38. Mangold, Carl Amadeus (1813–1889):

Vier Lieder von Göthe mit Begleitung des
Piano-Forte.

Opus 1, Nr. 2.

39. Mangold, Carl Amadeus (1813–1889):

Fünf Göthelieder für eine mittlere Stimme
mit Begleitung des Pianoforte.

Opus 71, Nr. 4.

Darmstadt : Georg Thies.

40. Marschner, Franz (1855–1932):

1877

Ausgewählte Lieder für eine Singstimme
mit Klavierbegleitung.

Opus 2, Nr. 1 (komponiert 1877).

Wien : Josef Eberle.

41. Möhring, Ferdinand:

**Deutsche Lieder mit Begleitung des Piano-
forte.**

Opus 3, Nr. 4.

Berlin : Crantz.

42. Moniuszko, Stanisław (1819–1872):

Polna Różyczka. Ujrzał chłopiec z polnych
wzgórz różyczke wśród zyta.

In: Wielca Poeci.

Polskie Wydawnictwo Muzyczne, 1956.

43. Müller, Carl Christian (1831–1914):

1890

Heidenröslein.

Opus 48.

In: **Neue ausgewählte Chöre für Männer-
stimmen.**

Nr. 95: C. C. Müller, Heidenröslein.

Berlin : Friedrich Luckhardt (1890).

44. Müller, Richard (1830–1904):

Fünf Lieder für Männerstimmen.

Opus 18, Nr. 3.

Leipzig : Merseburger.

45. Nägeli, Hans Georg (1773–1836):

1794/95

Lieder. In Musik gesetzt von H. G. Naegeli.

Seite 4.

Zürich : Verlag des Verfassers(1794/95).

46. Nyvall, Jacob Natanael (1894-?): 1920

Rosen i hagen. En liten visa för en Röst
med Piano.

(Gossen såg en liten ros).

Stockholm : Svala och Söderlund (1920).

47. Philipp, Rudolf:

**Sechs Lieder für eine Singstimme mit
Begleitung des Pianoforte.**

Opus 2, Nr. 3.

Hamburg : Cranz.

48. Ramann, Bruno (1832-1897):

Drei Lieder für dreistimmigen Frauenchor
mit Begleitung des Pianoforte.

Opus 50, Nr. 1.

Berlin : M. Bahn
(früher T. Trautwein).

49. Reichardt, Johann Friedrich (1752-1814): 1793/94

Goethe's lyrische Gedichte. Mit Musik von
J. F. R., Seite 1.

Berlin : Verl. d. neuen berlin.
Musikhdl. 1793 od. 94.

Auch in:

**Goethe's Lieder, Oden, Balladen und
Romanzen** mit Musik von J.F. Reichardt.

Erste Abtheilung. Seite 8.

Leipzig : Breitkopf & Härtel (1809).

Auch in:

Max Friedlaender, (Hrsg.), **Gedichte von
Goethe in Compositionen seiner Zeitgenossen.**
Weimar 1896.

50. **Reissiger, Carl Gottlieb** (1798–1859):

**Gesänge und Lieder von Förster, Göthe und
Pulvermacher** für eine Sopran-, Mezzo-
Sopran-, Tenor- oder Bariton-Stimme mit
Begleitung des Pianoforte.

Opus 79, Nr. 3.

Leipzig : Carl August Klemm.

51. **Romberg, Andreas Jacob** (1767–1821):

1793

Oden und Lieder von Klopstock, Herder und
Göthe in Musik gesetzt mit Begleitung des
Pianoforte. Nr. 10.

Bonn, Cöln : N. Simrock (1793).

52. Sahr, Heinrich von:

Sechs Lieder für eine Sopran-Stimme mit
Begleitung des Pianoforte.

Opus 14, Nr. 4.

Leipzig : Bartholf Senff.

53. Scheiding, Fritz:

21 ausgewählte Lieder und Gesänge für eine
Mittelstimme mit Pianofortebegleitung.

Opus 1, Nr. 6.

Nürnberg : Wilh. Schmid Nachf. 2. Aufl.

54. Schnyder von Wartensee, FranzXaver (1786–1868):

1823

Acht deutsche Gesänge von Göthe, Gleim,
Miller, Götz und Rückert für eine Singstimme
mit obligater Clavierbegleitung.

Nr. 2: Heidenröslein.

55. Nr. 3: Andere Melodie zum Heidenröslein.

1823

Bonn, Cöln : N. Simrock (1823).

56. Schubert, Franz (1797–1828):

Opus 3, Nr. 3, komponiert am 19. August 1815/1821
1815, publiziert 1821.

Auch in:

M. Friedlaender (Hrsg.), **Gedichte von
Goethe in Compositionen seiner Zeitgenossen.**
Nr. 10.

Weimar : 1896.

57. Schumann, Robert (1810–1856):

1849

Opus 67, Nr. 3 (komp. 1849).
Verlag Fürstner 1849.

Weitere Publikation:

Romanzen und Balladen für Chor von
Robert Schumann.
Heft 1. Opus 67, Nr. 3.
Leipzig : F. Whistling.

58. Schuster, August Carl (1807–1877):

Sechs Lieder für vier Männerstimmen
ohne Begleitung. 1. Heft, Nr. 3.

Leipzig : Breitkopf & Härtel.

59. Schwencke, Carl (1797–1870):

Sechs Gedichte von Goethe in Musik gesetzt
für eine Tenor- oder Sopran-Stimme mit
Begleitung des Pianoforte.

61. Werk, Heft 1, Nr. 4.

Braunschweig : G. M. Meyer jr.

60. Selle, Gustav F. (1829–1913):

1908

**Zwei Chorlieder für den vierstimmigen
gemischten Chor.**

Opus 31, Nr. 1.

Berlin, Leipzig : Paul Fischer (1908)

61. Stegmayer, Ferdinand (1803–1863):

Vier Lieder mit leichter Klavierbegleitung.

Nr. 1.

Berlin : T. Trautwein.

62. Svedbom, Per Jonas Vilhelm (1843–1904):

komp.

Manuskript:

1900

Vildros. Gossen såg en vildros stå.

Schwedische Übersetzung von C. Snoilsky.

Kungl. Musikaliska Akademiens Bibliotek
Stockholm/Sweden.

63. **Terry, Richard Runciman** (1867–1938): komp.
The Wild Rose. Once a boy a wild rose Juni
spied. Unison song. 1887
London : J. Curwen & Sons (1924).

64. **Tomaschek, Wenzel Johann** (1774–1850): vor 1821
Gedichte von Goethe für den Gesang mit
Begleitung des Piano-Forte.
1. Heft, Seite 3ff. 53. Werk.
ohne Ort u. Jahr (Prag, vor 1821).

Auch in:

M. Friedlaender (Hrsg.), **Gedichte von
Goethe in Kompositionen seiner Zeitgenossen.**
Weimar: 1916.

65. **Vollenwyder, Heiner** (1914–1971):
Heidenröslein (Goethe).
Frauenchor.
Zürich : Hug & Co.

Weitere Ausgabe:

66. Gesang mit Pianobegleitung

Ohne Ort, Verlag u. Jahr, Seite 20f.

67. Wehner, Arnold:

**Sechs Gesänge für Sopran, Alt, Tenor und
Baß.**

Opus 4, Nr. 5.

Leipzig : Breitkopf & Härtel.

(Breitkopf & Härtel's Chorbibliothek Nr.
1254).

68. Werner, Heinrich (1800–1833):

1827 od.

In: **Arion**. Sammlung auserlesener Gesang-
stücke mit Begleitung des Pianoforte.

28

Dritter Band, 17. Heft, S. 99, Nr. 128.

Braunschweig : Fr. Busse (1827 od. 1828)

69. Weyrauch, August Heinrich von:

1820

Lieder in Musik gesetzt...

Bd. 2: Zehn deutsche Lieder für 1 Sing-
stimme mit Klavierbegleitung.

Dorpat : Selbstverlag (1820)

- 70. Weyse, Christoph Ernst Friedrich (1774–1842):** komp.
Vermischte Compositionen. (Lieder und 1790–94
 Klavierstücke) u. a. Heidenröslein: publ.
 Sah ein Knab' ein Röslein stehn/Hederosen: 1799
 Drengen fandt en Rose staae. Die dänische
 Übersetzung von Fr. Höegh-Guldberg.
 Kopenhagen : S. Sönnichsen (1799).

Auch mit dänischem Titel:

Blandede Compositioner.

Kopenhagen : Sönnichsen.

Auch in:

Romancer og Sange.

Manuskript in „Jugendarbeiten“ (1790–94).

Det Kongelige Bibliotek København.

- 71. Wilm, Nicolai von (1834–1911):**
Drei Lieder für eine Sopran- oder Tenor-
Stimme mit Begleitung des Pianoforte.
 Opus 10, Nr. 3.
 Leipzig : C. F. W. Siegel.

- 72. Würst, Richard Ferdinand (1824–1881):** komp.
Drei dreistimmige Lieder für zwei Soprane zwischen
und Alt mit Begleitung des Pianoforte. 1848–51

Leipzig : Fr. Kistner.

73. Wunderlich, A.:

1907

**Lieder, Romanzen und Balladen für eine
Singstimme mit Begleitung des Pianoforte.**

Nr. 1.

München : Josef Seiling (1907).

74. (ohne Komponistenangabe)

1844

In: „**Liederkranz für den Berliner Gesellen-
Verein.**“

Hrsg. von Herrmann Hauer.

Nr. 66 (Seite 60).

Berlin : Enslin (1844).

Weitere Vertonungen

In Musikverzeichnissen und in der Literatur werden weitere Vertonungen des „Heidenrösleins“ angegeben, sie waren jedoch nicht auffindbar:

Abt, Franz :
(1819–1885)

Männerchor/
gemischter Chor

Ander, A. : Verlag Bachmann.

Aue, Wilhelm : in: „Minnesang und Lautenklang“ Singstimme mit

- Lautenbegleitung
Lieder zur Laute od. Gitarre. Heft 1.
Dresden : Aurora (1918).
- Bock, G.** : „Ein musikalischer Scherz.“
Gießen : Verlag Challier.
- Brauer, W.** : Opus 4, Nr. 3.
Verlag Brauer.
- Brauns, O.** : Opus 5, Nr. 5.
Heinrichshofen.
- Eijden, J. v.** : Nr. 3.
Roothaan
- Gersbach, Josef** : _____
- Held, J. E.** : _____
- Hering, Karl Gottlieb** : „Gesänge für Männerchore.“ Männerchor
Bd. 1, S. 11.
Dresden : C. Meinhold.
auch in:
W. Wedemann's „100 Volks-
lieder.“
Band 1, Seite 140.
Weimar 1836.
- Ihm, M.** : Opus 9' Nr. 1.
Halle : Neubert.
- Köhler, Louis** : Opus 11. 2 Singstimmen
(1820-1886) mit Klavierbegl.
- Kroemer, Walter** : „Vier Lieder im Volkston.“ Singstimme
Dresden : Aurora (1919). mit Klavierbegl.
Nr. 2.

- Lecerf, Justus Amadeus**: „Gesänge für 4 Männer- Männerchor
stimmen.“
Heft 2, Nr. 5.
Berlin : F. S. Lischke.
- Lenz, Leopold** : „Sieben deutsche Gesänge.“ Singstimme
Opus 7. mit Klavierbegl.
Augsburg: Gombart & Co.
- Linke, Hermann** : „Weiße Lilien.“ Geistl. u. Singstimme
Weltliches in Haus-und Kinder- mit Klavierbegl.
liedern.
Leipzig : C. Begas.
- Mangold, K. G.** : Opus 26, Nr. 12. Singst. (Sopran)
Verlag B & B. (Bote & Bock) mit Klavierbegl.
- Meyer, H.** : Opus 6, Nr. 8.
Verlag André.
- Müller, Adolf jun.** : Opus 4. I, Nr. 6.
(1839–1901) Roz. i. B.
- Nakonz, Guido** : „Fünf Lieder...“ Opus I, Nr. 4. Singstimme
Leipzig : Fritzs. mit Klavierbegl.
- Naret-Koning, J.** : Nr. 1. Sohler.
- Nemes, B.** : Opus 8, Nr. 5.
Roz. i. B.
- Oehrl, Robert** : Berlin : Continental Verl. 2 Singstimmen
(1928) mit Klavierbegl.
- Plachy, W.** : _____
- Ramrath, K.** : _____
- Rieff, G. J. v.** : Vo. Nr. 6.
Schott Verlag.

- Schädel, B.** : Opus 29. XII, Nr. 1.
Verl. Sch. & Co.
- Schultze, G.** : Opus 22.
Verlag Cranz.
- Stubbe, A.** : _____ Männerchor
- Taubert, Wilhelm** : „Sechs deutsche Lieder...“ Singstimme
(1811–1891) Opus 5, Nr. 2. mit Klavierbegl.
- Voigt, Th.** : Opus 9, Nr. 3.
Kahnt.
- Wallbach, L.** : Opus 19, Nr. 3.
Verlag Cranz.
- Wenigmann, W.** : Opus 7, Nr. 2.
Naus.
- Zois, H. v.** : Alb. Nr. 27.
Weinberger & H.

II. Verzeichnis der Vertonungen in chronologischer Folge

Vorbemerkungen :

Eine chronologische Anordnung der Vertonungen ist nicht exakt durchzuführen, da

- in den Notendruckten meistens die Angabe der Drucklegung fehlt,
- Verlage häufig Vordatierungen vorgenommen haben,
- die Sekundärliteratur in vielen Fällen unterschiedliche Daten nachweist,
- in der Sekundärliteratur nicht immer zwischen Niederschrift und Veröffentlichung eines Werkes differenziert.

Zur Erstellung dieses chronologischen Verzeichnisses wurde deshalb folgender Weg beschritten:

- voneinander abweichende Daten der Sekundärliteratur werden mit aufgenommen,
- bei fehlenden Daten der Entstehung oder Publikation der Melodie wird aufgrund der Lebensdaten eines Komponisten die Zuordnung zu einem halben Jahrhundert vorgenommen.

Trotzdem kann ein Teil der Vertonungen keiner Epoche zugeordnet werden, da in einer Anzahl von Fällen sowohl Werkdaten als auch Lebensdaten des Komponisten fehlen.

II.-a. Daten zur Entstehung und Publikation des Textes

- 1773 Abdruck des Gedichts durch Herder mit einem Kommentar unter der Überschrift „Fabelliedchen“ mit dem Textanfang
 „Es sah ein Knab' ein Röslei steh'n...“
 in seinem Aufsatz „Über Ossian und die Lieder alter Völker“
 in der Sturm-und-Drang-Schrift „Von deutscher Art und Kunst einige fliegende Blätter“ (Hamburg: Bode 1773) mit dem Vermerk „ein älteres deutsches Lied für kinder“.
- 1779 Abdruck in Herders „Volkslieder“, zweiter Teil (Leipzig: Weygand, Teil I: 1778; Teil II: 1779) mit der Überschrift „Röschen auf der Heide“ und der Ausgabe „aus der mündlichen Sage“.
- 1789 Das Gedicht erscheint in etwas abgewandelter Form unter der Überschrift „Heidenröslein“ und dem Textanfang
 „Sah' ein Knab' ein Röslein steh'n“
 in „Goethes Schriften“ als Werk Goethes mit der

Angabe 1771 als Entstehungsjahr.

II.-b. Verzeichnis der Vertonungen

II.-b.-a. Ende des 18. Jahrhunderts

- | | | |
|---------|--|-------------|
| 1793 | A. J. Romberg (1767–1821) | Lied-Nr. 51 |
| 1793/94 | F. v. Dalberg (1760–1812) | Lied-Nr. 7 |
| | (M. Friedl.: 1793; H. J. Moser: 1794; H. Holle: 1794; MGG: 1793/94) | |
| 1793/94 | J. F. Reichardt (1752–1814) | Lied-Nr. 49 |
| | (M. Friedl.: 1793; H. J. Moser: 1794; H. Holle: 1794) | |
| 1794/95 | H. G. Nägeli (1773–1836) | Lied-Nr. 45 |
| | (handschr. Verm. auf Orig.: 1794; M. Friedl.: 1795) | |
| 1799 | Chr. E. F. Weyse (1774–1842) | Lied-Nr. 70 |
| | komponiert 1790–94. | |

II.-b.-b. Erste Hälfte des 19. Jahrhunderts

- | | | |
|----------|------------------------------------|-------------|
| 1810 | J. Chr. Kienlen (1783–1829) | Lied-Nr. 32 |
| 1817/18 | P. Grönland (1761–1825) | Lied-Nr. 19 |
| 1818/22 | L. v. Beethoven (1770–1827) | Lied-Nr. 1 |
| 1820 | A. H. v. Weyrauch | Lied-Nr. 69 |
| 1821 | F. Schubert (1797–1828) | Lied-Nr. 56 |
| vor 1821 | W. J. Tomaschek (1774–1850) | Lied-Nr. 64 |

| | | |
|---------|---|-------------|
| 1823 | X. Schnyder v. Wartensee (1786–1868) | Lied-Nr. 54 |
| 1827/28 | H. Werner (1800–1833) | Lied-Nr. 68 |
| 1832 | H. Dorn (1804–1892) | Lied-Nr. 10 |
| 1839 | J. Hartmann (1805–1900) komp. 1832 | Lied-Nr. 23 |
| 1844 | ohne Komponistenangabe | Lied-Nr. 74 |
| 1845 | N. W. Gade (1817–1890) | Lied-Nr. 15 |
| 1848–51 | R. Würst (1824–1881) | Lied-Nr. 72 |
| 1849 | R. Schumann (1810–1856) | Lied-Nr. 57 |

Ferner ist die **erste Hälfte des 19. Jahrh.** anzunehmen bei:

| | |
|--|-------------|
| J. A. Bürder (geb. 1799) | Lied-Nr. 6 |
| D. H. Engel (1816–1877)–Mitte des 19. Jh. | Lied-Nr. 11 |
| A. E. Grell (1800–1886)–Mitte des 19. Jh. | Lied-Nr. 17 |
| G. C. Grosheim (1764–1841) | Lied-Nr. 20 |
| M. Hauptmann (1792–1868) | Lied-Nr. 24 |
| C. A. Mangold (1813–1889) (opus 1) | Lied-Nr. 38 |
| S. Moniuszko (1819–1872)–Mitte des 19. Jh. | Lied-Nr. 42 |
| C. G. Reissiger (1798–1859) | Lied-Nr. 50 |
| A. C. Schuster (1807–1877) | Lied-Nr. 58 |
| C. Schwencke (1797–1870) | Lied-Nr. 59 |
| F. Stegmayer (1803–1863) | Lied-Nr. 61 |

II.–b.–c. Zweite Hälfte des 19. Jahrhunderts

| | | |
|------|-----------------------------------|-------------|
| 1857 | J. Malling (1836–1905) | Lied-Nr. 37 |
| 1858 | J. Brahms (1833–1897) | Lied-Nr. 4 |
| 1877 | F. Marschner (1855–1932) | Lied-Nr. 40 |
| 1883 | H. Beller mann (1832–1903) | Lied-Nr. 2 |

| | | |
|---------|----------------------------------|-------------------|
| 1884 | A. Hollaender (1840–1924) | Lied-Nr. 26/27/28 |
| | u. später | |
| 1884/85 | R. Henneberg (1853–1925) | Lied-Nr. 25 |
| 1887 | S. Jadassohn (1831–1902) | Lied-Nr. 30 |
| 1887 | R. R. Terry (1867–1938) | Lied-Nr. 63 |
| 1890 | C. C. Müller | Lied-Nr. 43 |

Ferner ist die **zweite Hälfte des 19. Jahrh.** als Entstehung anzunehmen:

| | |
|--|----------------|
| L. H. Deelmann (nach 1870) | Lied-Nr. 9 |
| R. Finsterbusch (1827–1902) | Lied-Nr. 12/13 |
| R. Joseffy (1853–1915) | Lied-Nr. 31 |
| A. Kleffel (1840–1913) | Lied-Nr. 33 |
| J. Liebeskind (1866–1916) | Lied-Nr. 36 |
| C. A. Mangold (1813–1889) (opus 71) | Lied-Nr. 39 |
| R. Müller (1830–1904) | Lied-Nr. 44 |
| B. Ramann (1832–1897) | Lied-Nr. 48 |
| N. v. Wilm (1834–1911) | Lied-Nr. 71 |

II.-b.-d. 20. Jahrhundert

| | | |
|----------|------------------------------------|-------------|
| 1900 | V. Svedbom (1843–1904) | Lied-Nr. 62 |
| 1907 | A. Wunderlich | Lied-Nr. 73 |
| 1908 | G. F. Selle (1829–1913) | Lied-Nr. 60 |
| 1910 | R. G'schrey (1872 od. 76–?) | Lied-Nr. 21 |
| vor 1914 | I. V. Bronsart | Lied-Nr. 5 |
| 1920 | J. Nyvall (1894–?) | Lied-Nr. 46 |
| 1928 | F. Lehár (1870–1948) | Lied-Nr. 35 |
| 1949 | G. Götsch | Lied-Nr. 16 |

Ferner:

H. Vollenwyder (1914–1971)

Lied-Nr. 65/66

Nicht zeitlich zugeordnet werden können:

| | |
|----------------------|-------------|
| A. Blanc | Lied-Nr. 3 |
| C. Decker | Lied-Nr. 8 |
| C. Futterer | Lied-Nr. 14 |
| F. Grimmer | Lied-Nr. 18 |
| H. Harthan | Lied-Nr. 22 |
| G. Huberti | Lied-Nr. 29 |
| O. Ladendorff | Lied-Nr. 34 |
| F. Möhring | Lied-Nr. 41 |
| R. Philipp | Lied-Nr. 47 |
| H. v. Sahr | Lied-Nr. 52 |
| F. Scheiding | Lied-Nr. 53 |
| A. Wehner | Lied-Nr. 67 |

III. Verzeichnis der musikalischen Besetzung

III.-a. Einstimmige Melodie

| | | |
|-------------------------------------|---------|-------------|
| Beethoven, L. v. (1770–1827) | 1818–22 | Lied-Nr. 1 |
| ohne Komponistenangabe | 1844 | Lied-Nr. 74 |

III.-b. Singstimme mit Klavierbegleitung/ (Orchester)

| | | |
|------------------|-------------------|------------|
| Blanc, A. | Sopran oder Tenor | Lied-Nr. 3 |
|------------------|-------------------|------------|

| | | |
|--------------------------------------|-------------------------------|---------------------|
| Brahms, J. (1833–1897) | 1858 | Lied-Nr. 4 |
| Bronsart, I. v. (1840–1913) | | Lied-Nr. 5 |
| Bürde, J. (geb. 1799) | | Lied-Nr. 6 |
| Dalberg, F. v. (1760–1812) | 1793/94 | Lied-Nr. 7 |
| Decker, C. (?) | Bariton oder Alt | Lied-Nr. 8 |
| Deelman, L. H. (?) | nach 1870 | Lied-Nr. 9 |
| Finsternbusch, R. (1827–1902) | | Lied-Nr. 13 |
| Futterer, C. (1873–1927) | | Lied-Nr. 14 |
| Grell, A. E. (1800–1886) | | Lied-Nr. 17 |
| Grimmer, F. (?) | | Lied-Nr. 18 |
| Grönland, P. (1761–1825) | 1817/18 | Lied-Nr. 19 |
| Grosheim, G. Chr. | | Lied-Nr. 20 |
| (1764–1841) | | |
| G'schrey, R. (1872 od. 76.–?) | 1910 | Lied-Nr. 21 |
| Hartmann, J. (1805–1900) | 1832/39 | Lied-Nr. 23 |
| Henneberg, R. (1853–1925) | Sopran oder Tenor | 1884/85 Lied-Nr. 25 |
| Huberti, G. (1843–1910) | Bariton oder Mezzo- Sopran | Lied-Nr. 29 |
| Joseffy, R. (1853–1915) | | Lied-Nr. 31 |
| Kienlen, J. Ch. (1783–1829) | 1810 | Lied-Nr. 32 |
| Lehár, F. (1870–1948) | Tenor mit Orchester | 1928 Lied-Nr. 35 |
| Liebeskind, J. (1866–1916) | | Lied-Nr. 36 |
| Malling, J. H. (1836–1905) | 1857 | Lied-Nr. 37 |
| Mangold, C. A. (1813–1889) | | Lied-Nr. 38 |
| Mangold, C. A. (1813–1889) | Mittlere Stimme | Lied-Nr. 39 |
| Marschner, F. (1855–1932) | 1877 | Lied-Nr. 40 |
| Möhring, F. (?) | | Lied-Nr. 41 |
| Moniuszko, S. (1819–1872) | | Lied-Nr. 42 |

| | | |
|--|--------------|-------------|
| Nägeli, H. G. (1773–1836) | 1794/95 | Lied-Nr. 45 |
| Nyval, J. N. (1894–?) | 1920 | Lied-Nr. 46 |
| Philipp, R. (?) | | Lied-Nr. 47 |
| Reichardt, J.F. (1752–1814) | 1793/94 | Lied-Nr. 49 |
| Reissiger, C. G. (1798–1859) Sopran od. Mezzo- Sopran od. Tenor od. Bariton | | Lied-Nr. 50 |
| Romberg, A. (1767–1821) | 1793 | Lied-Nr. 51 |
| Sahr, H. v. (?) Sopran | | Lied-Nr. 52 |
| Scheiding, F. (?) Mittelstimme | | Lied-Nr. 53 |
| Schnyder v. Wartensee (1786–1868) | 1823 | Lied-Nr. 54 |
| Schnyder v. Wartensee (1786–1868) | 1823 | Lied-Nr. 55 |
| Schubert, F. (1797–1828) | 1815/21 | Lied-Nr. 56 |
| Schwencke, C. (1797–1870) Tenor oder Sopran | | Lied-Nr. 59 |
| Stegmayer, F. (1803–1863) | | Lied-Nr. 61 |
| Svedbom, V. (1843–1904) | 1900 | Lied-Nr. 62 |
| Terry, R. R. (1867–1938) | 1887/1924 | Lied-Nr. 63 |
| Tomaschek, W. J. (1774–1850) | vor 1821 | Lied-Nr. 64 |
| Vollenwyder, H. (1914–1971) | | Lied-Nr. 66 |
| Werner, H. (1800–1833) | 1827/28 | Lied-Nr. 68 |
| Weyrauch, A. H. (?) | 1820 | Lied-Nr. 69 |
| Weyse, Ch. E. F. (1774–1842) | 1790–94/1799 | Lied-Nr. 70 |
| Wilm, N. v. (1834–1911) Sopran oder Tenor | | Lied-Nr. 71 |
| Wunderlich, A. (?) | 1907 | Lied-Nr. 73 |

III.-c. Zwei Singstimmen mit Klavierbegleitung

| | | | |
|----------------------------|-----------------------|------|-------------|
| Gade, N. W. (1817-1890) | 2 Sopranstimmen | 1845 | Lied-Nr. 15 |
| Hollaender, A. (1840-1924) | Sopran und Alt | 1884 | Lied-Nr. 26 |
| Jadassohn, S. (1831-1902) | | 1887 | Lied-Nr. 30 |
| Kleffel, A. (1840-1913) | hohe und tiefe Stimme | | Lied-Nr. 33 |

III.-d. Drei Frauenstimmen mit Klavierbegleitung

| | | | |
|------------------------|---------------------|---------|-------------|
| Ladendorff, O. (?) | 2 Sopranst. und Alt | | Lied-Nr. 34 |
| Ramann, B. (1832-1894) | 2 Sopranst. und Alt | | Lied-Nr. 48 |
| Würst, R. (1824-1881) | 2 Sopranst. und Alt | 1848-51 | Lied-Nr. 72 |

III.-e. Chorsätze

III.-e.-a. Dreistimmiger Chor für gleiche Stimmen

| | | |
|-----------------------------|------|-------------|
| Götsch, G. (1895-1956) | 1949 | Lied-Nr. 16 |
| Vollenwyder, H. (1914-1971) | | Lied-Nr. 65 |

III.-e.-b. Vierstimmiger Frauenchor

| | | |
|----------------------------|--|-------------|
| Hollaender, A. (1840-1924) | | Lied-Nr. 28 |
|----------------------------|--|-------------|

III.-e.-c. Vierstimmiger Männerchor

| | | |
|---------------------------|------|-------------|
| Dorn, H. (1804-1892) | 1832 | Lied-Nr. 10 |
| Müller, C. C. (1831-1914) | 1890 | Lied-Nr. 43 |

| | |
|------------------------------------|-------------|
| Müller, R. (1830–1904) | Lied-Nr. 44 |
| Schuster, A. C. (1807–1877) | Lied-Nr. 58 |

III.–e.–d. Vierstimmiger gemischter Chor

| | |
|-------------------------------------|------------------|
| Bellermann, H. (1832–1903) | Lied-Nr. 2 |
| Engel, D. H. (1816–1877) | Lied-Nr. 11 |
| Finsterbusch, R. (1827–1902) | Lied-Nr. 12 |
| Harthan, H. (?) | Lied-Nr. 22 |
| Hauptmann, M. (1792–1868) | Lied-Nr. 24 |
| Hollaender, A. (1840–1924) | Lied-Nr. 27 |
| Schumann, R. (1810–1856) | 1849 Lied-Nr. 57 |
| Selle, G. F. (1829–1913) | 1908 Lied-Nr. 60 |
| Wehner, A. (?) | Lied-Nr. 67 |

IV. Biographische Angaben zu den Komponisten

IV.–a. Quellen mit Angabe der benutzten Abkürzungen

| | |
|--------------------------|---|
| ADB | Allgemeine Deutsche Biographie. 56 Bände. Leipzig: Duncker u. Humblot 1875–1912. |
| Eitner Biogr. | Eitner, Robert: Biographisch-Bibliographisches Quellen-Lexikon. 11 Bände. (Leipzig: Breitkopf u. Härtel 1900). Ausgabe: Graz, Akad. -Druck-u. Verl. -Anst. 1959. |
| Frank Tonk. -Lex. | Frank, Paul: Kurzgefaßtes Tonkünstler-Lexikon. Neu bearbeitet und ergänzt von Wilhelm Altmann. 12. Aufl. Leipzig 1926; 14. Aufl. Regensburg 1936; 15. Aufl. Wilhelmshaven 1971. |

- Gerber biogr. Lex.** **Gerber, E. L.:** Neues biographisches Lexikon der Tonkünstler.
- Goodman Mus.** **Goodman, Alfred A.:** Musik von A-Z. Vom Gregorianischen Choral zu Jazz und Beat. München: Südwest Verlag 1971.
- Grove's Dict.** Grove's Dictionary of Music and Musicians. 9. Vol. 1 Suppl. -Vol. Ed. by Eric Blom. London 1954-61.
- Mendel Mus. Conv.** **Mendel, Hermann:** Musikalisches Conversations-Lexikon. Eine Encyklopädie der gesamten musikalischen Wissenschaften. 11 Bände, 1 Erg. -Band, Erste Ausgabe: Berlin 1870-83. Neue Stereotyp-Ausg.: Leipzig.
- MGG** Die Musik in Geschichte und Gegenwart. Allgem. Enzyklopädie der Musik. 14 Bde. Hg. von **F. Blume**. Kassel u. a.: Bärenreiter 1949-68.
- Moser Mus.** **Moser, Hans Joachim.** Musikgeschichte in hundert Lebensbildern. Stuttgart: Reclam 1952.
- Müller Deutsch. Mus.** **Müller, Erich H.:** Deutsches Musiker-Lexikon. 1926.
- Musiol Conv. -Lex.** **Musiol, Robert:** Conversations-Lexikon der Tonkunst. 1881-1888.
- Riemann Mus. -Lex.** **Riemann, Hugo.** Musik-Lexikon. Leipzig 1882, 12. Aufl. neubearb. v. W. Gurlitt, Mainz 1959-67.
- Schilling Enc.** **Schilling, Gustav:** Encyclopädie der gesamten musikalischen Wissenschaften. Stuttgart: Köhler.
- Schilling Univ. -Lex.** **Schilling, Gustav/Gaßner, F. S.:** Universal-Lexikon der Tonkunst. Stuttgart: Köhler 1835-38 u. 1842.
- Sohlmans Mus.** Sohlmans Musiklexikon. Bd. 3, Stockholm 1951.
- Wörner Gesch.** **Wörner, Karl H.:** Geschichte der Musik. Ein Studien- und Nachschlagebuch. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 3. Aufl. 1961.
- Wurzbach Biogr. Lex.** **Wurzbach, Constant von.:** Biographisches Lexikon des Kaiserthums Oesterreich. 58 Teile. Wien 1856-89.

Bibliotheken,

die bibliographisches Material zur Verfügung gestellt haben:

Bayerische Staatsbibliothek München

Bibliothek des Abgeordnetenhauses Berlin

Freie Universität Berlin, Institut für Musikwissenschaften.

Deutsche Bibliothek, Abteilung „Deutsches Musikarchiv“, Berlin-West

Hessische Landesbibliothek Darmstadt

Hessische Landesbibliothek Wiesbaden

Institut für Musikwissenschaft der Universität Erlangen-Nürnberg

Landesbibliothek Coburg

Musikwissenschaftliches Institut der Universität Köln

Musikwissenschaftliches Institut der Universität Tübingen

Staats- und Stadtbibliothek Augsburg

Städt. Musikbibliothek München

UB Bremen

UB Braunschweig

UB Düsseldorf

UB Regensburg

UB der Technischen Universität Braunschweig

UB Würzburg

IV.-b Kurzbiographien

(Von E. Schade konzipiert)

Beethoven, Ludwig van

geb. am 16. (?) 12. 1770 in Bonn, gest. am 26. 3. 1827 in Wien.

Komponist und Dirigent.

Sohn eines Tenoristen der kurfürstlichen Kapelle, zunächst Schüler

seines Vaters, dann des Hoforganisten Christian Gottlob Neefe. Mit 15 Jahren Cembalist der kurfürstl. Kapelle. 1787 kurze Zeit Schüler Mozarts in Wien. Seit 1792 ständiger Wohnsitz in Wien, zunächst Schüler Haydns, dann Johann Schenks (Kontrapunkt), Georg Albrechtsbergers (Fuge) und Antonio Salieris (ital. Gesangskomposition). 1808–1811 Ehrensold, um Ruf Jérôme Bonapartes nach Kassel auszuschlagen. Findet in seiner Musik nie gehörten individuellen Ausdruck, gekennzeichnet durch rhythmische Kraft, melodische Expansion motivische und thematische Schlagkraft.

Werke: Sinfonien, Konzerte, eine Oper, Ouvertüren, Kirchenmusik, Klavierwerke, Violinmusik, Kammermusik, Lieder.

(ADB; MGG; Riemann Mus. -Lex.; Wörner Gesch. d. Mus.)

Bellermann, Johann Gottfried Heinrich

geb. am 10. 3. 1832 in Berlin, gest. am 10. 4. 1903 in Potsdam. Gesanglehrer an Schulen, Musikforscher und Komponist.

Besucht in Berlin die Schule „Graues Kloster“, dann das Königliche Institut für Kirchenmusik. Schüler des Liederkomponisten Eduard August Grell. 1853 Anstellung als Gesanglehrer im „Grauen Kloster“ als Nachfolger Grells. 1866 Professur für Musik an der Universität in Berlin. 1867 Leiter des Akademischen Gesangvereins, ab 1875 Mitglied der Königlichen Akademie der Künste.

Werke: vorwiegend a-capella-Musik, daneben Klavierlieder, lediglich ein Chorwerk mit Orchester. Ferner musikwissenschaftliche Arbeiten.

(Riemann Mus. -Lex., MGG)

Blanc, Adolf

unbekannt.

Brahms, Johannes

geb. am 7. 5. 1833 in Hamburg, gest. am 3. 4. 1897 in Wien.

Konzertpianist, Dirigent und bedeutender deutscher Komponist der Romantik.

Zunächst Unterricht bei seinem Vater, dann Schüler von Eduard Marx-Tritt anfänglich als Konzertpianist auf, seit 1860 jedoch vor allem Komponist. Lebt vorübergehend in Düsseldorf und Detmold (Klavierlehrer und Chormeister), vorwiegend jedoch in Hamburg, ab 1862 in Wien. 1863–64 Dirigent der Singakademie Wien, 1872–75 Chor-dirigent der Gesellschaft der Musikfreunde in Wien. In vielen seiner Kompositionen wird sein enges Verhältnis zum Volkslied deutlich, an das er sich melodisch anlehnt und das er nachempfndet.

Werke: Sinfonien, Requiem, Klavierwerke, Violinmusik, Kammermusik, Kirchenmusik und Lieder.

(MGG; Wörner Gesch. d. Mus.)

Bronsart, Ingeborg von (geb. Starck)

geb. am 24. 8. 1840 in St. Petersburg, gest. am 17. 6. 1913 in München.

Pianistin.

Schülerin von Martinow, Henselt und Liszt. Hat sich auf dem Gebiet der Klavierkomposition einen Namen gemacht. Schried außerdem 4 Opern, Cellostücke und Lieder. Ab 1862 verheiratet mit Hans

Bronsart von Schellendorf (1830–1913), Pianist und Komponist.

(Riemann Mus. -Lex.)

Bürde, Jeannette Antonie (geb. Milder)

geb. am 11. 11. 1799 in Hüttleindorf bei Wien.

Sängerin und Liederkomponistin.

Bereits im 7. Lebensjahr Klavier-Unterr., bald darauf Gesangsunterricht b. Tomaselli, später bei Kapellmstr. Livrati. Ging 1816 mit ihrer Schwester Hofopernsängerin Anna Pauline Milder-Hauptmann nach Berlin. Trat als Sängerin und Pianistin auf, ab 1823 Mitglied der Singakademie in Berlin. Verheiratet mit dem Maler Prof. Bürde. Nach dessen Tod Lehrerin für Gesang und Klavier in Berlin. Komponierte Lieder (etwa 10 Hefte), bekundet darin „Streben nach Einfachheit und Natürlichkeit“.

(Mendel Mus. Conv.)

Dalberg, Johann Friedrich Hugo von

geb. am 17. 5. 1760 in Aschaffenburg, gest. am 26. 7. 1812 in Hemsheim b. Worms.

Domkapitular, Pianist und Komponist.

Studierte in Göttingen Theologie und beschäftigte sich mit Musik als Liebhaber. Sein Lehrer in Musiktheorie und Komposition war Ignaz Holzbauer (1711–1783). Er hatte später in Trier, Worms und Koblenz höhere Kirchenämter inne. Die Beurteilung seiner Leistungen auf musikalischem Gebiet sind unterschiedlich. Franz Schubert bezeichnete ihn als Musikliebhaber, „wie es wenige gibt“,

und der es „mit Meistern aufnimmt“. Er lobte sein Klavierspiel, besonders sein extemporiertes Fantasieren, und von seinen Kompositionen pries er vor allem seine Klaviersonaten. Demgegenüber wurden seine Kompositionen in der Leipziger Zeitung kritisiert. Unter seinen Liedkompositionen gibt es viele Vertonungen Goethe'scher und Herder'scher Texte.

Werke: Kammermusik, Sonaten, Variationen, Kantaten, Melodramen und Lieder.

(ADB, Eitner Biogr., Riemann Mus. -Lex., MGG)

Decker, Constantin

unbekannt.

Deelman, L. H.

unbekannt.

Dorn, Heinrich Ludwig Egmont

geb. am 14. 11. 1804 in Königsberg, gest. am 10. 1. 1892 in Berlin.
Kapellmeister, Musikschriftsteller und Komponist.

Studierte zunächst Jura, obgleich die Wahl der Musik als Lebensberuf bereits feststand. Ausbildung in Leipzig und Dresden, wo er Bekanntschaft mit C. M. v. Weber machte, ferner in Prag, Wien und Berlin. Dort Schüler von Ludwig Berger (Klarinette), Karl Friedrich Zelter und Bernhard Klein. Nach kurzer Tätigkeit als Musiklehrer in Frankfurt a. M., 1828 als Kapellmeister nach Königsberg, von dort 1829 ans Hoftheater nach Leipzig. 1832 nach Hamburg, kurz darauf als Musiklehrer und Kirchenmusikdirektor nach Riga, wo er

eine Liedertafel nach Zelter'schem Vorbild gründete. 1843 als Theaterkapellmeister nach Köln. 1845 Gründung einer Musikschule, dem späteren Konservatorium. Von 1844–1847 Durchführung der Niederrheinischen Musikfeste. Von 1849–1869 Hofoperkapellmeister in Berlin und Mitglied der Akademie der Künste. Ferner Mitarbeiter der „Neuen Berliner Musikzeitung“. Schrieb Opern, Ballettmusiken, Klavierstücke und Lieder. Seine Lieder waren verbreitet, beliebt waren seine humorvollen Lieder.

(Riemann Mus. -Lex., Goodman Mus., MGG)

Engel, David Hermann

geb. am 22. 1. 1816 in Neu-Ruppin; gest. am 3. 5. 1877 in Merseburg.

Orgelvirtuose und Komponist.

Schon in früher Jugend Klavier- und Orgelunterricht, 1835–1837 Besuch der Musikschule Friedr. Schneiders in Dessau, 1837–1840 Unterricht bei Ad. Hesse in Breslau. 1840 Rückkehr nach Neu-Ruppin, tätig als Kunstforscher und Komponist. 1841 als Musiklehrer nach Berlin, ab 1848 bis zu seinem Tode Domorganist und Gesanglehrer am Domgymnasium in Merseburg. Ernennung zum Kgl. Musikdirektor.

Werke: Orgelstücke, Klavierstücke, Psalmen und Lieder. Hrsg. eines Choralbuches; Aufsatz „Über Chor und instruktive Chormusik“.

(Mendel, Mus. Conv.)

Finsterbusch, Daniel Reinhold

geb. 1827, gest. am 17. 9. 1902 in Glauchau b. Zwickau. Kantor, Musikdirektor, Dichter und Komponist.

Werke: Oratorien, Motetten usw.

(Frank Tonk. -Lex.)

Futterer, Carl

geb. am 21. 2. 1873 in Basel, gest. am 5. 11. 1927 in Ludwigshafen.
Schweizer Komponist.

Sohn eines Kaufmanns. Besuch des Gymnasiums in Basel, danach Beginn des Jurastudiums in Heidelberg. Nach Volljährigkeit widmete er sich ausschließlich der Komposition. In erster Linie Autodidakt, wenn auch Unterricht in Musiktheorie bei Hans Huber. Förderung durch den Klarinettisten und Komponisten Hermann Wekel (1858–1928) und durch H. Wagner-Schönkirch. Erst ab 49. Lebensjahr in Basel, Wien, Freiburg/Breisg. und Berlin mit seinen Kompositionen Erfolge. Erhielt 1925 -als er vor dem wirtschaftlichen Ruin stand- eine Professur für Komposition an der Musikhochschule Mannheim-Ludwigshafen.

Werke: Opern, Orchesterswerke, Melodramen, Musik für Bläser, Kammermusik, Lieder und Männerchöre.

(Riemann Mus. -Lex., MGG Suppl.)

Gade, Niels Wilhelm

geb. am 22. 2. 1817 in Kopenhagen, gest. am 21. 12. 1890 in Kopenhagen.

Dänischer Komponist und Dirigent.

Sohn eines Instrumentenbauers, erhielt zunächst Unterricht im Violinspiel, Schüler von Cr. E. F. Weyse, als Komponist im wesent-

lichen Autodidakt. Mitglied der Kopenhagener Hofkapelle. 1843 als Stipendiat nach Leipzig, dort Freundschaft mit Schumann und Mendelssohn-Bartholdy. Kurzer Aufenthalt in Italien. 1844–48 zweiter Dirigent des Gewandhaus-Orchesters, nach Mendelssohns Tod (1847) sein Nachfolger. Ging zurück nach Kopenhagen, dort Organist und Leiter der Konzerte des Musikvereins, 1861 Ernennung zum Hofkapellmeister. In der Nachfolge von Mendelssohn-Bartholdy und Schumann verfolgte er deren Ziele.

Werke: Sinfonien, Ouvertüren, Suiten, Werke f. Str.-Orch., Kammermusik, Vokal- und Chormusik, Lieder.

(Goodman Mus.; Wörner Gesch.; Riemann Mus. -Lex.)

Götsch, Georg

geb. am 1. 3. 1895 in Berlin, gest. am 26. 9. 1956 in Friedrichshafen.

Lehrer, Musik- und Chorerzieher im Sinne der Jugendmusikbewegung, Herausgeber von Liederbüchern und Chorwerken.

Sohn eines Eisengießers, Chorknabe, mit 15 Jahren Mitglied des „Wandervogels“. Besuch des Lehrerseminars in Berlin. 1914 Kriegsfreiwilliger, bis 1920 als russischer Kriegsgefangener in Sibirien, nach Rückkehr Volksschullehrer in Berlin. 1924–1929 Studium der Musik. 1926–31 Dozent für Musik an der Musikhochschule und für Musik und Tanz an der Hochschule für Leibesübungen in Berlin. 1927 Gründung des „Musikheims“ in Frankfurt a. d. Oder, bis 1943 dessen Direktor. Ab 1943 Musikerzieher und Maler am Bodensee. Als Leiter der „Musischen Gesellschaft“ Veranstaltung von musischen Lehrgängen, bekannt als Chorleiter. Er war mit Fritz Jöde und Walter

Hensel wegweisender Anreger der deutschen Jugendmusik nach dem ersten Weltkrieg und beispielgebend für die Musikerziehung der Gegenwart.

Werke: Herausgeber von Chorwerken, vor allem für Schulen, Literatur für Musik- und Chorerziehung.

(Riemann Mus. -Lex., MGG)

Grell, August Eduard

geb. am 6. 11. 1800 in Berlin, gest. am 10. 8. 1886 in Steglitz b. Berlin.

Organist, Kirchenmusiker, Chordirigent und Komponist.

Ab 6. Lebensjahr Klavierunterricht, später auch Unterricht in Gesang und Musiktheorie. Ausbildung bei Zelter in Berlin und 1819/20 in Erfurt. In Berlin tätig: 1816 Organist an der St. Nicolaikirche, 1817 Mitglied der Berliner Singakademie, dort 1832 Vizedirigent neben Rungenhagen; Ernennung zum kgl. Musikdirektor, 1839 Hoforganist am Dom, 1843–45 Lehrer des neu errichteten Domchores, 1841 Mitglied der Akademie der Künste, 1853–1875 Direktor der Berliner Singakademie, 1858 Ernennung zum Professor. Nach Hugo Moser gehört er zu den zwei Dutzend „Schumannianern“, die Schumanns künstlerische Ziele in ihrer Art abzuwandeln versuchten. Vertrat die extreme Ansicht, daß die Vokalmusik die eigentliche Musik sei und bezeichnete das Emporkommen der Instrumentalmusik als Verfall der reinen Kunst. Komponist vor allem kirchenmusikalischer Werke, wie Psalmen, Hymnen, Oratorien (ca. 60 Werke); daneben auch zahlreiche Lieder für Männerstimmen (für die Zelter'sche Liedertafel), für gemischten Chor sowie ein- und zweist.

Lieder mit Klavierbegleitung.

(Mendel Mus. Conv., Wörner Gesch., MGG; Riemann Mus. -Lex.)

Grönland, Peter

geb. am 15. 10. 1761 in Wilster/Holstein, gest. am 30. 12. 1825
in Kopenhagen.

Jurist, daneben Musikschriftsteller und Liederkomponist.

1782–85 Jurastudium in Kiel, daneben Mitarbeit an Cramers „Magazin der Musik“. Nach Ausbildungsabschluß 1787 als Kopist in der deutschen Kanzlei in Kopenhagen tätig. 1794 ökonomischer Administrator der Kgl. Porzellanfabrik Kopenhagen, 1795 Archivrat und Mitdirektor der neuerrichteten Schatzkammeradministration, 1801 Beförderung zum Justizrat. Daneben musikalisches Wirken, wofür er während des Studiums in Kiel angeregt wurde. Vor allem Komposition von Liedern, Oden, Sonetten, Balladen und Romanzen, die er meist anonym herausgab.

(MGG; Schilling Univ. -Lex., Riemann Mus. -Lex.)

Grimmer, Friedrich

unbekannt.

Grosheim, Georg Christoph

geb. am 1. 7. 1764 in Kassel, gest. am 18. 11. 1841 in Kassel.
Musiker, Komponist und Musikpädagoge.

Neuntes von 12 Kindern eines Hofmusikers des Landgrafen von Hessen. Klavier- und Generalbaßunterricht bei einem Freund des Vaters. 1781–82 Bratschist in der Hofkapelle in Kassel. Schreibt Kammer-

musik und Orchesterwerke für die wöchentlichen Hofkonzerte. 1782–1835 Musiklehrer am Lyceum Fridericianum und Musikalienhändler in Kassel. 1800–1802 Musikdirektor der Kasseler Hofkapelle. Nach Auflösung der Hofkapelle Gesanglehrer an der Bürgerschule, Freundschaft mit dem Dichter Carl v. Münchhausen (1759–1836). Nach Theater-Neugründung in Kassel Ernennung zum Musikdirektor, später auch Verleihung des Dokortitels durch die Universität.

Werke: Orgelpräludien, Klavierfantasien, Variationen und kleiner Orchesterwerke, 2 Opern, Klaviertrios, Chorgesänge, Arien und Lieder, („Hessische Kadettenlieder“ 1782), Sammlung von Volksliedern u. Herausgabe für die Schule (9 Teile). Mehrst. Choräle und religiöse Gesänge mit Orgelbegleitung. Hrsg. der Musikzeitschrift „Euterpe“. Daneben auch musikwissenschaftliche Arbeiten. (Gerber biogr. Lex.; Mendel Mus. Conv., Riemann Mus. -Lex.)

G'schrey, Richard

geb. am 27. 8. 1876 (od. 1872) in Heidelberg.

Klavierlehrer und Komponist.

Sohn eines Realschullehrers in Heidelberg. Zunächst Studium der Klassischen Philologie an den Universitäten Heidelberg und München. 1900–1904 Musikstudium an der Akademie der Tonkünste in München, dort dann auch als Klavierlehrer tätig.

Werke: Musik zu klass. Dramen, Klavierstücke, vor allem Lieder, „Leitfaden der Klavierspieltechnik“ (München 1918).

(Frank Tonk. -Lex.; Müller Deutsch. Mus.)

Harthan, Hans

unbekannt.

Hartmann, Johann Peter Emil

geb. am 14. 5. 1805 in Kopenhagen, gest. am 10. 3. 1900 in Kopenhagen.

Bedeutender Musikpädagoge und Komponist Dänemarks.

Sohn eines Organisten der Garnisonskirche in Kopenhagen. Zunächst Klavier- und Violinunterricht bei seinem Vater. 1827/28 juristisches Examen, anschließend im Staatsdienst, unterstützt daneben seinen Vater in seiner Organistenstelle an der Garnisonskirche. Schüler von Chr. E. F. Weyse, mit dem er die ital. Musik in Dänemark einführte. 1836 auf Anregung Marschners Reise durch Deutschland (Bekanntschaft mit Spohr), Frankreich und durch die Schweiz. 1867 Direktor des Konservatoriums in Kopenhagen. Erlangte in seiner Zeit Ansehen als Komponist, in seinen Kompositionen Verwendung nordischer Stoffe.

Werke: Ballette, Sinfonien, Kantaten, Kammermusik und Lieder.

(Goodman Mus.; Mendel Mus. Conv., Riemann Mus. -Lex.)

Hauptmann, Moritz

geb. am 13. 10. 1792 in Dresden, gest. am 3. 1. 1868 in Leipzig.

Violinist, Komponist und Musiktheoretiker.

Sohn eines Kgl. Sächsischen Ob.-Landbaumeisters. Sollte Architekt werden, widmete sich jedoch von seinem 19. Lebensjahr an

ganz der Musik. 1811 Schüler von Louis Spohr in Gotha (Violine und Komposition), 1812 Geiger in der Dresdener Hofkapelle. 1813 Reise nach Prag und Wien, 1815 als Privat-Musiklehrer im Hause des Fürsten Repuin in Petersburg, Moskau, Pultawa und Odessa. 1820 Rückkehr nach Dresden. 1822–42 Mitglied der kurfürstlichen Hofkapelle in Kassel (unter Leitung von L. Spohr) und Lehrer für Musiktheorie und Komposition. Sammlung älterer Musik. Ab 1842 Kantor der Thomasschule und Kirchen-Musikdirektor in Leipzig, ferner Lehrer für Musiktheorie am Leipziger Konservatorium. 1850 mit R. Schumann Gründung der Bach-Gesellschaft, Mitarbeit an der Bach-Gesamtausgabe und der Händel-Gesamtausgabe. Versucht in der Nachfolge Mendelssohn-Baltholdis und Schumanns deren Ziele zu verwirklichen. Verleihung der Ehrendoktorwürde.
Werke: Gesänge, Violinduette, Sonaten, Divertimenti, Streichquartette, eine Oper, Motetten, Messen, Kantaten und Lieder mit Klavierbegleitung.

(Goodman Mus., Mendel Mus. Conv., MGG, Wörner Gesch., Riemann Mus. -Lex.)

Henneberg, Carl Alb, Wilh. Richard

geb. am 5. 8. 1853 in Berlin, gest. am 19. 10. 1925 in Malmö.
 Schwedischer Pianist, Korrepetitor und Dirigent.

Schüler von W. Rust in Berlin, ab 1870 als Konzertbegleiter und als Korrepetitor an der Italienischen Oper in London, ab 1873 Dirigenten-Tätigkeit in Bergen und ab 1878 in Stockholm, 1879–85 „Nya teater“, 1885–1907 Opernkapellmeister am Stockholmer Hoftheater. 1912–20 Dirigent des Orchesters von Malmö, 1916–21 Vorsitzender

der südschwedischen Philharmonischen Gesellschaft. Hat die Werke Richard Wagners in Schweden bekanntgemacht.

Werke: eine Oper, Musiken zu Dramen, Ballettmusiken, Orchesterwerke, ein Klavierkonzert, Kammermusik, Klavierstücke, Chöre und Lieder.

(Mendel Mus. Con., Riemann Mus. -Lex.)

Hollaender, Alexis

geb. am 25. 2. 1840 in Ratibor (Schlesien), gest. am 5. 2. 1924 in Berlin.

Gesanglehrer und Chordirigent.

1850 Besuch des Gymnasiums in Breslau. Unterricht in Orgel und Violoncello, leitete bereits als Schüler den Chor der Lehranstalt. 1858–1861 Studium der Philosophie und Komposition (E. A. Grell, A. W. Bach). 1861 Lehrer an Kullaks „Neuer Akademie der Tonkunst“, wo er die Chor- und Klavierklasse unterrichtete. Bis 1902 Leitung des Konzert-Vereins, des späteren „Holländischen Vereins“, der 1870 mit dem Cäcilienverein zusammengeschlossen wurde. Ab 1877 auch Gesanglehrer an der Viktoria-Schule. 1875 Ernennung zum Kgl. Musik-Direktor, 1888 zum Professor. 1903 Dozent an der Humboldt-Akademie. Gehörte zu den Kleinmeistern des 19. Jh., Sein Vorbild war R. Schumann dessen Einfluß besonders in den Frühwerken zu erkennen ist.

Werke (insges. 64), darunter 1 Klav.-Quintett, Klavierstücke, Lieder, Chorlieder u. fünf-st. a-capella-Gesänge. Ferner ein Schulwerk für das Chorsingen und eine Ausgabe von Schumanns Klavierwerken.

(Mendel Mus. Conv., Riemann Mus. -Lex., MGG)

Huberti, Gustave

geb. am 14. 4. 1843 in Brüssel, gest. am 28. 6. 1910 in Schaerbeek
b. Brüssel.

Belgischer Komponist und Musikpädagoge.

Schüler des Brüsseler Konservatoriums, 1865 Auszeichnung mit dem Prix de Rome. Reisen nach Deutschland und in Italien. 1874 Direktor der Musikschule in Mons, ab 1877 Dirigent und Privatlehrer in Antwerpen und Brüssel. 1889 Professor der theoretischen Harmonielehre am Brüsseler Konservatorium.

Werke: Symphonien, ein Klav.-Konzert, Orch.-Suiten, Oratorien, auch Kinderoratorien, Balladen, Hymnen und Lieder.

(Mendel. Mus. Conv)

Jadassohn, Salomon

geb. am 13. 8. 1831 in Breslau, gest. am 1. 2. 1902 in Leipzig.
Musikpädagoge, Chordirigent und Musiktheoretiker.

Unterricht in Klavier, Violine und Harmonielehre in Breslau, bis 1849 Besuch des Konservatoriums in Leipzig, anschließend Unterricht bei Liszt in Weimar bis 1851, 1853 wieder nach Leipzig, Schüler von M. Hauptmann. Dort auch Tätigkeit als Musiklehrer. 1856 Leitung des Leipziger Synagogenchores, 1866 Dirigent des Gesangsvereins „Psalterion“. 1867–1869 Leitung der „Euterpe-Konzerte“. Ab 1871 Lehrer am Leipziger Konservatorium für Theorie, Komposition und Instrumentation. 1887 Erwerb des Dr. phil., 1893 Ernennung zum Kgl. Professor.

Genoß besonderen Ruf als Musikpädagoge. Auch seine musiktheoretischen Erörterungen über das Wesen der Melodie sind von Bedeu-

tung. Schrieb zahlreiche Unterrichtswerke. Seine Kompositionen sind von geringerer Bedeutung, den guten Kompositionen sagt man „Geschick und Geschmack“ nach.

(Goodman Mus., Riemann Mus. -Lex., MGG)

Joseffy, Rafael

geb. am 3. 7. 1853 in Miskolcz/Hunfalu (Ungarn), gest. am 25. 6. 1915 in New York.

Pianist aus Ungarn, später in den USA.

Mit 8 Jahren Klavierunterricht bei Stephan Heller, dann bei Brauer in Budapest. 1867 Schüler des Leipziger Konservatoriums, 1868 nach Berlin, Unterricht bei Tausig und 1870/71 bei Liszt in Weimar. Ab 1872 Konzerte in Berlin, Wien und in allen Musikzentren des Kontinents. 1879 Auswanderung in die USA, 1888–1906 Klavierlehrer am Nationalkonservatorium in New York.

Werke: vor allem Klavierkompositionen und eine „School of Advanced Piano-Playing“, New York 1902 („Meisterschule des Klavierspiels“).

(Frank Tonk. -Lex., Grove's Dict., Riemann Mus. -Lex.)

Kienlen, Johann Christoph

getauft am 14. 12. 1783 in Ulm, gest. am 7. 12. 1829 in Dessau. Theater-Kapellmeister und Komponist.

Sohn eines Stadtmusikers aus Ulm. Trat vom 7. Lebensjahr an als Wunderkind (Klavier, Gesang) auf. Münchner Gönner schickten ihn

zur Ausbildung nach Paris. Dort Unterricht in Komposition bei Cherubini. Danach Stadtmusikdirektor in Ulm. 1810/11 wurde seine Vertonung von Goethes „Claudine von Villa Bella“ in München und Stuttgart mit wenig Erfolg aufgeführt. Machte sich jedoch 1811 als Liederkomponist einen Namen, Ernennung zum Bayerischen Musikdirektor. Ging 1811 als Theater-Kapellmeister nach Baden bei Wien und dann nach Preßburg. 1817 nach Berlin, wo er Bühnenmusiken schrieb. 1823 wurde er Korrepetitor und Gesanglehrer. Ging 1827 zurück nach Ulm, jedoch im folgenden Jahr wohl zum Fürsten Radziwill nach Posen. Starb 1829 gemütskrank und mittellos in Dessau. Schrieb verschiedene Orchesterwerke, am bemerkenswertesten jedoch seine zahlreichen Liedkompositionen, darunter 12 Lieder zu Goethe-Texten.

(Schilling Univ. -Lex., Riemann Mus. -Lex., MGG; falsche Angaben in Mendel Mus. Conv.)

Kleffel, Arno

geb. am 4. 9. 1840 in Pößneck (Thüringen), gest. am 15. 7. 1913 in Nikolassee b. Berlin.

Kapellmeister und Komponist.

Besuchte das Gymnasium in Meiningen, lehnte vorgesehenes Theologiestudium ab und besuchte das Konservatorium in Leipzig, außerdem Privatschüler von Moritz Hauptmann in Leipzig. Zunächst Musiklehrer an einer höheren Lehranstalt in Jacobstadt (Kurland). Musiklehrer an einer höheren Lehranstalt in Jacobstadt (Kurland). 1863-67 Kapellmeister der Musikalischen Gesellschaft in Riga, 1867 am Stadt-Theater in Köln, ferner in Amsterdam, Detmold, Bremen,

Görlitz, Breslau, Stettin, Augsburg, Magdeburg. 1873–1880 am Friedrich-Wilhelmstädtischen Theater in Berlin, 1886–92 und 1894–1904 am Stadt-Theater in Köln, ab 1895 auch Lehrer für Instrumentation und Partiturspiel am Kölner Konservatorium, zwischenzeitlich Theorielehrer am Stern'schen Konservatorium in Berlin, ab 1904 Dirigent des Stern'schen Gesangsvereins Berlin. Ab 1910 Lehrer der Kgl. Hochschule für Musik in Berlin und Vorsteher der Opernschule. Daneben Musikreferent des Berliner Lokalanzeigers. **Werke:** eine Oper, Musik zu Goethes „Faust“ und zu einem Weihnachtsmärchen, Ouvertüren, ein Streichquartett, Klavier- und Violinstücke und ein- und mehrstimmige Lieder.

(Mendel Mus. Conv., Riemann Mus. -Lex., Frank Tonk. -Lex.)

Ladendorff, Otto

unbekannt.

Lehár, Franz

geb. am 30. 4. 1870 in Komorn a. d. Donau (Slowakei), gest. am 24. 10. 1948 in Bad Ischl.

Österreichischer Geiger, Militärkapellmeister und Operettenkomponist.

Sohn eines K. K. Militärkapellmeisters. 1882–1888 Musikstudium als Geiger am Prager Konservatorium, daneben heimlich Tonsetzunterricht bei Fibich. Wurde mit Arbeiten Anton Dvorak und Johannes Brahms vorgestellt. Zunächst als Konzertmeister am Stadt-Theater Barmen-Elberfeld. Während seiner Dienstzeit im ungarischen Militär zum Militärkapellmeister avanciert -was unge-

wöhnlich war-, kurz darauf Leiter des groß ausgestatteten Marine-Orchesters in Pola. Wirkte ab 1898 in Budapest und 1899–1902 in Wien. 1902 Aufgabe der Militärkapellmeister-Laufbahn und Verpflichtung als erster Kapellmeister am „Theater an der Wien“. Hat durch die plötzlichen Erfolge seiner Operetten „Wiener Frauen“ und „Der Rastelbinder“ die Stelle jedoch nicht mehr angetreten, wirkte allein noch als Operettenkomponist. Lebte bis 1945 in Bad Ischl, nach dem Krieg in Zürich, starb in Bad Ischl. Lehár entwickelte innerhalb der „Wiener Operette“ einen eigenen Stil, oft als „Lehár'sche Tanzoperette“ bezeichnet, in der der gesungene Walzer der mondänen Hauptpersonen im Brennpunkt steht.

(Goodman Mus., Moser Mus., Riemann Mus. -Lex.)

Liebeskind, Josef

geb. am 22. 4. 1866 in Leipzig, gest. am 10. 8. 1916 in Leipzig.

Komponist und Herausgeber.

Schüler von Bernsdorf und W. Rust. Ab 1885 am Leipziger Konservatorium. Schrieb Orchesterwerke (1 Symphonie, 3 Serenaden), Kammermusik (2 Streichquartette, 1 Klaviertrio), Chöre und einige Klavierlieder. Mehr Bedeutung durch die Sammlung und Herausgabe der Werke von Gluck, Haydn, Dittersdorf und Mozart. Übersetzte Wotguennes thematisches Verzeichnis der Werke Glucks ins Deutsche und gab 1911 einen Nachtrag dazu heraus.

(Riemann Mus., Frank Tonk. -Lex.)

Malling, Jørgen Henrik

geb. am 31. 10. 1836 in Kopenhagen, gest. am 12. 7. 1905 in Kopenhagen.

Dänischer Musikpädagoge.

Studierte zuerst in Kopenhagen bei Gade, dann in Paris. 1869–77 als Organist in Svendborg, 1877–79 in Norrköping/Schweden, danach in Wien und München, ab 1895 meist in Wien. Ab 1901 Theorielehrer am Kopenhagener Konservatorium. Anhänger der Methode Chev , die er D nemark verbreitete. Er  bersetzte auch Schriften Gheves.

Werke: Kantate „Kyvola“, Opern, Kammermusik, Klavierst cke und Lieder.

(Frank Tonk. -Lex., Riemann Mus. -Lex.)

Mangold, Carl Ludwig Amand (Amadeus)

geb. am 8. 10. 1813 in Darmstadt, gest. am 5. 8. 1889 in Oberstdorf/Allg u.

Chordirigent und Komponist.

Erster Unterricht in Klavier, Violine, Gesang und Komposition bei seinem Vater und seinem  lteren Bruder. 1831 Mitglied der Darmst dter Hofkapelle, 1836–39 Studium am Konservatorium in Paris. 1839 R ckkehr nach Darmstadt, Direktor des Musikvereins, des M nnergesangsvereins „S ngerkranz“ und des Damengesangsvereins „C cilia“, 1848–1869 auch Hofmusikdirektor und 1869–75 Leiter des „Mozart-Vereins“ (M nnergesang und Kammermusik). Auch als Musiklehrer t tig, u. a. am Gymnasium und am Polytechnikum. 1848 Ernennung zum Hof-Musik-Direktor. Bekannte Pers n-

lichkeit des Musiklebens im 19. Jh. mit großem Lehrtalent. Pfl egte die Musik Bachs. Seine Kompositionen in seiner Zeit beliebt, vor allem seine Männerquartette wegen ihres Schwungs und ihrer Natürlichkeit.

Werke: 375 Lieder (ein- und mehrstimmig), Männer- und gemischte Chöre mit und ohne Orchester, Kantaten, Oratorien, Opern, Melodramen, Ouvertüren und Sinfonien.

(Mendel Mus. Conv., Riemann Mus. -Lex., MGG)

Marschner, Franz, Ludwig Veit

geb. am 26. 3. 1855 in Leitmeritz (Böhmen), gest. am 22. 8. 1932 in Weißpyhra bei Pöggstall (Nieder-Österreich).

Österreichischer Lehrer, Musikästhetiker und Komponist.

1873 Studium der Geschichte und Germanistik an der Universität Prag und promovierte 1879 zum Dr. phil., daneben auch Klavier- und Orgelunterricht. 1878–82 als Realschulprofessor in Prag und Wien tätig, ab 1883 an der Lehrerinnenbildungsanstalt in Wien. 1883–85 Besuch des Wiener Konservatoriums und Unterricht bei Anton Bruckner. Seine Kompositionen fußen auf der klassischen Polyphonie und der romantischen Harmonik seiner Zeit und werden von Dvřák, Brahms und Bruckner gelobt.

Werke: ca. 150 Lieder, Gesänge, Balladen für Gesang mit Klavier-, Orgel- oder Orchesterbegleitung.

(Riemann Mus. -Lex.)

Möhning, Ferdinand

unbekannt.

Moniuszko, Stanisław

geb. am 5. 5. 1819 in Ubiel/Gouvernement Minsk, gest. am 4. 6. 1872 in Warschau.

Polnischer Komponist.

Erster Klavierunterricht bei seiner Mutter, Musikstudium in Warschau (1827–30) und Berlin (1837–39). Zunächst Tätigkeit als Organist und Klavierlehrer in Wilna, ab 1858 Opern-Kapellmeister am Theater in Warschau. 1848 Aufführung seiner Oper „Halka“, zur polnischen Nationaloper wurde, damit Begründer eines polnisch-nationalen Stils. Dann Direktor der Warschauer Oper. Bekanntschaft mit Liszt in Weimar, Smetana in Prag, Rossini in Paris, Auber und Gounod. Zuletzt Professor für Harmonie und Komposition am Konservatorium in Warschau.

Werke: Opern, Ballette, Chorwerke, Messen, ein Requiem, Streichquartette, Klavierstücke und ca. 300 Lieder.

(Goodman Mus., Riemann Mus. -Lex.)

Müller, Carl Christian

geb. am 3. 7. 1831 in Meiningen, gest. am 4. 6. 1914 in New York. Musiklehrer.

Ab 1854 als Lehrer vor allem für Musiktheorie in New York tätig. Komponierte Sinfonien, Orgelsonaten, Kammermusik und Lieder und gab „Harmonic exercises“ heraus.

(Frank Tonk. -Lex.)

Müller, Richard

geb. am 25. 1. (od. Febr.) 1830 in Leipzig, gest. am 1. 10. 1904 in Leipzig.

Gesanglehrer und Chordirigent.

Erster Musikunterricht bei seinem Vater, Schüler der Thomasschule, dort erster Präfect des Chores. Ausbildung durch Moritz Hauptmann. 1849 Gründung des akademischen Gesangvereins „Arion“ in Leipzig, einer der besten Gesangvereine in Leipzig. Musiklehrer an der Thomas-und Nicolaischule und an der Real-und ersten Bürgerschule in Leipzig.

Werke: geistliche und weltliche Chöre für gemischten Chor und Männerchor, Lieder für Singstimme mit Instrumentalbegleitung und andere Kompositionen.

(Frank Tonk. -Lex., Mendel Mus. Conv.)

Nägeli, Hans Georg

geb. am 26. 5. 1773 in Wetzikon bei Zürich, gest. am 26. 12. 1836 in Zürich.

Schweizer Musikpädagoge, Komponist und Verleger.

Schon als Zehnjähriger Leitung des Wetzikoner Musikkollegiums, das von seinem Vater gegründet worden war. 1790 zum Musikstudium nach Zürich. 1791 Eröffnung einer Musikalienhandlung mit einer Leihbibliothek, die er wenig später durch einen Verlag erweiterte. 1805 Gründung des Züricher Singinstituts, dem er 1810 einen Männerchor angliederte, die erste Vereinigung dieser Art in der Schweiz. 1819 Eröffnung einer neuen Musikalienhandlung. 1819—

25 mehrere Vortragsreisen nach Süddeutschland mit Vorlesungen über Musik, u. a. setzte er sich für eine Reform des Gesangunterrichts ein.

Wendete die Ideen Pestalozzis auf eine musikalische Volksbildung an. Als Komponist widmete er sich vor allem der Volksmusik, insbes. dem Solo-und Chorlied, wobei er die Form in der Musik über den Inhalt stellte und in der Bewegung das Grundelement der Tonkunst sah.

Werke: mehrere Klavierstücke, Chöre, Lieder, Herausgeber von Schriften über Pestalozzi und über Gesanglehre.

(Riemann Mus. -Lex., MGG, Goodman Mus.)

Nyval, Jacob Natanael

geb. am 23. 7. 1894.

Kirchenmusiker und Gesanglehrer.

(Sohlman's Mus.)

Philipp, Rudolf

unbekannt.

Ramann, Bruno

geb. am 17. 4. 1832 in Erfurt, gest. am 13. 3. 1897 in Dresden.
Gesang-und Musiklehrer.

Schüler von Moritz Hauptmann. Seit 1871 in Dresden ansässig, dort bekannter Musiklehrer, vor allem für Gesang. Er ist aber auch Dramatiker und Lyriker. Als Komponist 84 Werke geschrieben, folgt mit seinen Klavier-und Gesangswerken der Richtung Schumanns.

(Eitner Biog., MGG)

Reichardt, Johann Friedrih

geb. am 25. 11. 1752 in Königsberg/Ostpreußen, gest. am 27. 6. 1814 in Giebichenstein bei Halle.

Liederkomponist, Kapellmeister und Musikschriftsteller.

Sohn eines Stadtpfeifers und Lautenisten. Erhielt ersten Musikunterricht im Elternhaus. Reiste als Wunderkind am Klavier durch das Baltikum. Studierte Philosophie in Königsberg, dann in Leipzig, wo er sich jedoch ganz der Musik zuwendete. Schüler von Thomas-kantor J. A. Hiller in Leipzig und Kreuzkantor Homilius in Dresden. 1771-74 Reisen durch Deutschland. 1775 Anstellung als Hofkapellmeister Friedrichs II. in Potsdam. 1782 Herausgabe des „Musikalischen Kunstmagazins“, dem später noch andere Musikzeitschriften folgten. Studienaufenthalte in Italien, Frankreich und England. Kehrt 1786 nach Berlin zurück. Als Sympathisant der Französischen Revolution Entlassung aus dem preußischen Staatsdienst. 1791-94 nach London, Kopenhagen und Stockholm, fand jedoch keine Anstellung. 1794 Rückkehr nach Deutschland, Direktor eines Salzbergwerks in Halle, erwarb ein Gut in Giebichenstein bei Halle. Sein Gut wird Treffpunkt von Musikern und Dichtern. 1806 Flucht vor Franzosen, 1808 durch Jérôme Bonaparte Berufung als Kapellmeister nach Kassel, jedoch bald darauf Rückkehr nach Giebichenstein, dort Aufenthalt bis zu seinem Tode. Zählt neben J. A. P. Schulz und C. F. Zelter zur Berliner Liederschule. Komponierte viele Lieder, die dem Schubert'schen Stil am nächsten kommen. Gehört zu den bedeutendsten Kultur- und Musikkritikern

Deutschlands -Musikkritik als Mittel der Aufklärung.

Werke: etwa 1000 Lieder in 30 Sammlungen, ferner viele kultur und musikkritische Schriften.

(Goodman Mus., Moser Mus., Riemann Mus. -Lex., MGG)

Reissiger, Carl Gottlieb

geb. am 31. 1. 1798 in Belzig b. Wittenberg, gest. am 7. 11. 1859 in Dresden.

Kapellmeister und Komponist.

Entstammt einer Kantorenfamilie, ersten Klavier-und Violinunterricht bei seinem Vater. 1811 zur Leipziger Thomasschule, Unterricht in Gesang, im Klavierspiel und in der Komposition. 1818 Beginn des Theologiestudiums in Leipzig, zuletzt vor allem Musik. 1821-22 Fortsetzung des Musikstudiums in Wien und München, danach Rückkehr nach Leipzig. Ab 1823 Kompositionslehrer an der königlichen Musikschule in Berlin, 1824-25 Bildungsreisen nach Frankreich, Italien und in die Niederlande, 1826 als Nachfolger C. M. v. Webers Musikdirektor der Dresdener Oper, 1851 Ernennung zum Hofkapellmeister. Ab 1830 auch Dirigent der Dresdener Liedertafel. 1856-59 Künstlerischer Leiter des Konservatoriums in Dresden. Seine Solo-und Chorlieder erfreuten wegen ihrer leichten Faßbarkeit und meisterhaften Fraktur.

Werke: schrieb Opern (standen jedoch im Schatten R. Wagners), eine Sinfonie, Streichquartette, Kammermusik, 10 Messen, 95 Liedersammlungen (58 mit Sololiedern, 27 mit Duetten und 9 mit Chorliedern). Sein Werkverzeichnis geht bis opus 206.

(Mendel Mus. Conv., Schilling Enc., Riemann Mus. -Lex., MGG)

Romberg, Andreas Jacob

geb. am 27. 4. 1767 in Vechta bei Münster, gest. am 10. 11. 1821 in Gotha.

Geiger, Kapellmeister und Komponist.

Bereits mit 7 Jahren öffentliches Auftreten als Violinvirtuose, ab 1784 Konzertreisen mit seinem Vetter Bernhard Romberg durch Deutschland, Holland, Italien und Frankreich. 1790–93 Geiger in der kurfürstlichen Kapelle in Bonn. 1791 Reise mit Beethoven nach Mergentheim. Folgte 1800 seinem Vetter nach Paris, kam jedoch 1802 nach Hamburg zurück, wo er als Musiklehrer tätig war. 1809 wurde ihm von der Universität Kiel der Titel eines Dr. phil. h. c. verliehen. Wurde 1815 Nachfolger Spohrs als Hofkapellmeister in Gotha. Hat in der Nachfolge Haydns und Mozarts nicht über seine Zeit hinausgewirkt, obwohl er zu seiner Zeit ein beliebter Komponist war.

Werke: 10 Sinfonien, 8 Opern, Violinkonzerte, Kammermusik (23 Streichquartette, 12 Rondo und Capriccien für Violine), 30 Gesangswerke mit Orchester und Lieder.

(Riemann Mus. -Lex., Goodman Mus., MGG)

Sahr, Heinrich von

unbekannt.

Scheiding, Fritz

unbekannt.

Schnyder von Wartensee, Franz Xaver

geb. am 18. 4. 1786 in Luzern, gest. am 27. 8. 1868 in Frankfurt a. M.

Schweizerischer Musiklehrer und Komponist.

Verbrachte seine Kindheit in Luzern, bekam 1810/11 Verbindung zu Nägeli (s. d.). Ging 1811 nach Wien, kehrte aber im folgenden Jahr nach Luzern zurück. Wurde Musiklehrer an Pestalozzis Institut in Yverdon. Ging 1817 nach Frankfurt a. M. und veranlaßte 1828 die Gründung des Frankfurter „Liederkranzes“. Rief 1847 die „Stiftung von Schnyder von Wartensee“ ins Leben zur Förderung künstlerischer und wissenschaftlicher Arbeiten. Kritiker seiner Zeit stellten seine Goethe-Chöre neben denen Schuberts. Andere beanstanden zuviel Formalismus in seinen Kompositionen, den sie mit Nägelis Einfluß begründen.

(Riemann Mus. -Lex., MGG)

Schubert, Franz Peter

geb. am 31. 1. 1797 in Lichtenthal bei Wien, gest. am 19. 11. 1828 in Wien.

Österreichischer Komponist.

Stammt aus Lehrerfamilie. Konviktschüler, an der Wiener Hofkapelle als Sopranist ausgebildet, Schüler von Holzer, Ruzickas und Salieris. 1813–1817 Schulgehilfe bei seinem Vater. Danach freischaffender Komponist in Wien. Stand im Mittelpunkt eines großen Freundeskreises („Schubertiaden“), zu dem bekannte Dichter, Maler, Komponisten und Musiker gehörten. 1811–24 Hauslehrer der

Familie Esterházy in Zelesz/Ungarn. 1825 und 1827 erfolglose Bewerbungen um Kapellmeisterstellen. 1827 Veranstaltung des einzigen öffentlichen Konzertes mit eigenen Werken. Als Komponist vorwiegend Autodidakt. Trotz des frühen Todes hat er ein Werk von gewaltigem Umfang mit persönlicher Note hinterlassen. **Werke:** Klavierwerke (kleine Formen und 22 Sonaten), 8 Sinfonien, Kammermusik, 7 Messen m. Orch., Chorwerke, Opern, Singspiele, Schauspielmusiken und über 600 Lieder.

(MGG, Goodman Mus., Moser Mus., Riemann Mus. -Lex., Wörner Gesch.)

Schumann, Robert

geb. am 8. 6. 1810 in Zwickau, gest. am 29. 7. 1856 in Endenich b. Bonn.

Komponist und Musikschriftsteller.

Sohn eines Verlagsbuchhändlers, in der Schulzeit vorwiegend Beschäftigung mit Literatur. 1828–30 Jurastudium in Leipzig und Heidelberg, daneben Klavierunterricht bei Friedrich Wieck in Leipzig. Ab 1830 widmete er sich ganz der Musik. Aufgabe der Pianistenlaufbahn wegen Fingerlähmung, Konzentration auf Komposition und Musikschriftstellerei. 1834 Gründung der „Neuen Zeitschrift für Musik“, die er 10 Jahre redigierte. 1843 Kompositionslehrer am Konservatorium in Leipzig. 1844 nach Dresden, dort ab 1847 Leitung mehrerer Gesangvereine, für die er auch komponierte. 1850–53 Städtischer Musikdirektor in Düsseldorf. Aufgabe der Stelle wegen eines Gehirnleidens, starb in der Heilanstalt Endenich. Große Zahl Kompositionen, ausgewiesen durch eine reiche Melodik

und Harmonik. Gehört zu den Hauptvertretern der musikalischen Romantik in Deutschland.

Werke: Sinfonien, Orchesterwerke, Konzerte, Kammermusik, Klavierwerke, eine Oper, Schauspielmusiken, Chorwerke mit und ohne Orchester, Lieder und Liederzyklen.

(MGG, Goodman Mus., Moser Mus., Riemann Mus. -Lex., Wörner Gesch.)

Schuster, August Carl

geb. am 6. 8. 1807 in Oelsnitz/Voigtland, gest. am 15. 3. 1877 in Basel.

Sänger (Bariton).

Studium der Theologie und Musik. Ausbildung zum Konzertsänger (Bariton). Als Konzertsänger am Gewandhaus in Leipzig. Ging nach Zürich, dort Sänger und Dirigent von Gesangsvereinen. Reisen nach Frankreich und Italien, Rückkehr nach Zürich. Musik-Direktor verschiedener Opern-Gesellschaften. 1841 nach Basel, dort Mitglied der Kapelle und Direktor einiger Gesangsvereine.

Werke: Liedkompositionen (Lieder, Romanzen, Balladen).

(Mendel Mus. Conv.)

Schwenecke, Carl

geb. am 7. 3. 1797 in Hamburg, vermißt nach dem 7. 1. 1870, zuletzt Nußdorf b. Wien.

Pianist und Komponist.

Sohn des Organisten Chr. Friedr. Gottlieb Schw., Nachfolger C. Ph.

E. Bachs als Stadtkantor in Hamburg. Erster Klavierunterricht bei seinem Vater. Ungewöhnliche Fertigkeiten als Pianist, die er meist autodidaktischen Studien verdankte. Mit 17 Jahren auf Konzertreisen durch Deutschland. Skandinavien (Stockholm, Bergen), Rußland (Petersburg, Moskau), Österreich (Wien) und Frankreich (Paris). Als Klavierlehrer wird seine Gründlichkeit gelobt.

Werke: Messe, Kammermusikwerke, Klavierkompositionen (Rondos, Fantasien, Variationen), Lieder.

(Mendel Mus. Conv., Schilling Enc., Riemann Mus. -Lex., MGG.)

Selle, Gustav F.

geb. 1829, gest. 31. 8. 1913 in Freienwalde/Brandenburg. Schulgesanglehrer.

War von 1862–1912 Gesanglehrer am Gymnasium mit dem Titel eines Professors.

Werke: Chöre mit Orchester und Chorlieder. Autor eines Schulgesang-Lehrbuchs.

(Frank Tonk. -Lex)

Stegmayer, Ferdinand

geb. am 25. 8. 1803 in Wien, gest. am 6. 5. 1863 in Wien. Pianist, Kapellmeister und Komponist.

Sohn eines Hofschauspielers und Operndirektors. Frühzeitig Musikunterricht bei Triebensee, Riotte, Unterricht in Komposition bei Albrechtsberger und Segfried. 1819 Korrepetitor am Theater in Linz, dann am Kärntnerthor-Theater in Wien. 1825 Musikdirektor

am Königsstädter Theater in Berlin. Vagierendes Künstlerleben: 1820–30 Kapellmeister der Röckel'schen deutschen Operntruppe in Paris, 1831–32 Theater-Kapellmeister in Leipzig, 1839 in Bremen, 1840 Musikmeister der russischen Fürstin Narischkin in Odessa, bis 1842 in Paris. 1843–46 zweiter Kapellmeister am Städtischen Theater in Prag. Zurück nach Wien: Operndirigent am Josephstädter Theater. Nach Auflösung des Theaters Gesanglehrer, Chormeister des Wiener Männergesangsvereins, 1853–57 Lehrer am „Conservatorium der Gesellschaft der Musikfreunde“. 1858 zusammen mit Dr. Aug. Schmidt Gründung der Singakademie. Professor am Präparandenkurs zu St. Anna, Kapellmeister am Operntheater, dann am Carltheater.

Werke: vor allem aus der ersten Zeit seines Wirkens: Kantaten, Festouvertüren, Kammermusik, Kirchenmusik, Märsche, Klavierstücke, Lieder.

(Mendel Mus. Conv., Riemann Mus. -Lex., Wurzbach Biogr. Lex.)

Svedbom, Per Jonas Fredrik Vilhelm

geb. am 8. 3. 1843 in Stockholm, gest. am 24. 12. 1904 in Stockholm.

Schwedischer Komponist und Musikpädagoge.

1861 Gründung eines Musikvereins zur Aufführung von Orchesterwerken. 1872 Promotion zum Dr. phil. an der Universität Uppsala, dort auch für kurze Zeit Dozent für Literaturgeschichte. Zum Studium der Komposition nach Berlin. 1876–1901 Sekretär der Kgl. Musikakademie und von 1877–1903 Lehrer für Musikgeschichte am Stockholmer Konservatorium, 1901–1903 auch dessen Direktor. Als Spätromantiker Anhänger Schumanns. Versuchte in Verbindung mit

dem schwedischen Volkslied einen nationalen Stil zu schaffen.

Werke: Klavierstücke, Chöre, Lieder.

(Frank Tonk. Lex., Grove's Dict.)

Terry, Richard Runciman

geb. am 3. 1. 1865 in Ellington (North-umberland/USA), gest. am 18. 4. 1938 in London.

Englischer Komponist und Musikwissenschaftler.

Wurde 1890 Organist und Musikdirektor in Elstow, 1892 Organist und Chormeister an St. John's in Antigua (Westindien), ab 1896 an Downside Abbey in England, 1901–1924 an der Westminster Cathedral in London. Leiter der Tudor Church Music Publications, Herausgeber des Westminster Hymnal, des offiziellen kath. Gesangbuchs für England, und Redakteur einer Wochenschrift. Verdienste um die Wiederbelebung älterer englischer Kirchenmusik, wobei er auch moderne Komponisten veranlaßte, im Stil alter Kirchenmusik zu schreiben. 1911 Ehrendoktor der Universität Durham, 1922 geadelt. Widmete sich zuletzt ganz der Musikforschung.

Werke: einige Messen, Motetten und Kirchenmusik, Herausgeber von Werken aus dem 16. u. 17. Jahrhundert und vieler Liedersammlungen für den praktischen Gebrauch.

(Riemann Mus. -Lex., Goodman Mus.)

Tomaschek (Tomaczek), Wenzel Johann

geb. am 17. 4. 1774 in Skuteč (Böhmen), gest. am 3. 4. 1850 in Prag.

Musikpädagoge und Komponist.

1786 Besuch des Minoritengymnasiums in Iglau, 1790 nach Prag. Ab 1797 zunächst Studium der Rechte und der Mathematik, widmete sich jedoch später ganz dem Musikstudium. 1806 Zuerkennung einer lebenslangen Pension mit freier Wohnung bei dem Grafen Buquoy, seinem Schüler. Nach 1820 Leiter einer eigenen Musikschule. Bekanntschaft mit Haydn, Mozart, Beethoven und mit Goethe. Seine Kompositionen stehen im Übergang zwischen Klassik und Romantik. Sein Werkverzeichnis umfaßt 114 Opuszahlen, darunter Sinfonien, Klavier-Konzerte, Kammermusik, Tänze, Märsche, geistliche Werke und Lieder, darunter 9 Hefté Goethe-Lieder op. 53–61, Schiller-Lieder op. 24, 29, 31 und tschechische Lieder op. 48, 50, 71 u. 82.

(Goodman Mus.)

Vollenwyder, Heiner

geb. 1914, gest. 1971.

(Schweizerisches Musik-Archiv Zürich; Briefliche Mitteilung)

Wehner, Arnold

unbekannt.

Werner, Heinrich

geb. am 2. 10. 1800 in Kirchholfeld bei Erfurt, gest. am 3. 5. 1833 in Braunschweig.

Musiklehrer, Dirigent und Komponist in Braunschweig.

Komponierte Klavierstücke, Männerquartette und einige Lieder, u. a. nach Texten von Goethe, Seine „Heidenröslein“-Vertonung ist die bekannteste geworden.

(Goodman Mus.)

Weyrauch, August Heinrich

unbekannt.

Weyse, Christoph Ernst Friedrich

geb. am 5. 3. 1774 in Altona, gest. am 8. 10. 1842 in Kopenhagen.

Dänischer Komponist deutscher Herkunft und Organist.

Erste musikalische Ausbildung bei seiner Mutter. Weitere Ausbildung vor allem in Komposition bei J. A. P. Schulz in Kopenhagen, dem Komponisten der Lieder im Volkston. Siedelte 1789 ganz nach Kopenhagen über, wobei er zuerst bei J. A. P. Schulz lebte. Wurde 1794 Organist an der Reformierten Kirche, 1801 an der Frauenkirche in Kopenhagen, wo er bis zu seinem Tode tätig war. Lehrer von J. P. E. Hartmann (s. d.) und N. W. Gade (siehe dort), Begründer einer nationalen dänischen Musik. Komponist zahlreicher Kirchenmusikwerke, Singspiele, Lieder.

(Riemann Mus. -Lex., Goodman Mus.)

Wilm, Peter Nikolai von

geb. am 4. 3. 1834 in Riga, gest. am 20. 2. 1911 in Wiesbaden.

Pianist, Kapellmeister und Komponist.

Ab 1851 musikalische Ausbildung am Konservatorium in Leipzig. Ging 1855 nach Riga, wo er 1857 zweiter Kapellmeister am Stadt-

Theater wurde. 1860 Lehrer für Klavier und Musiktheorie am Nikolaj-Institut in St. Petersburg. 1875 nach Dresden, 1878 nach Wiesbaden. Hauptschaffen auf dem Gebiet der Klavierliteratur, aber auch Kammermusikwerke und Motetten. Herausgeber einer Sammlung von 150 russischen Volksliedern und Moskauer Zigeunerliedern. Seine Transkriptionen russischer Volkslieder für Klavier trugen zu einer Popularisierung russischer Lieder in vielen Ländern bei.

(Mendel Mus. Lex., Riemann Mus.-Lex., MGG)

Wüst, Richard Ferdinand

geb. am 22. 12. 1824 in Berlin, gest. am 9. 10. 1881 in Berlin. Vielseitiger Musiker: Geiger, Gesang- und Kompositionslehrer, Komponist und Musikkritiker.

Erster Violinunterricht bei H. Ries, Berlin. Besuch der Akademie der Künste in Berlin, 1843 Unterricht in Komposition bei Mendelssohn-Bartholdy, mit dem er nach Leipzig ging. Weiteren Violinunterricht bei F. David in Leipzig. Zunächst Violinvirtuose, Konzertreise nach Paris. 1847 als Musiklehrer in Berlin, besonders für Gesang. 1856 Gründung eines Streichquartetts mit Laub, Radeke und Bruhns. Ab 1858 Lehrer für Komposition an der Kullack'schen „Neuen Akademie der Tonkunst“. Konzertreferent beim „Berliner Fremdenblatt“, 1874–75 Redakteur der Neuen Berliner Musikzeitung von G. Bock. 1852 Auszeichnung mit der goldenen Medaille für Kunst, 1856 Ernennung zum Kgl. Musikdirektor, 1874 zum Professor, 1877 zum Senatsmitglied der Akademie der Künste. War Gegner Richard Wagners.

Werke: Opern, Sinfonien, Orchesterwerke (Serenaden, Ouvertüren, Variationen), Konzerte, Kammermusik, Kantaten und Lieder. Verfasser einer Elementarlehre f. Musik („Leitfaden der Elementartheorie“ Berlin 1867; Boston 1893).

(ADB, Grove's Dict., Mendel Mus. Conv., Musial Conv., Riemann Mus.-Lex., Frank Tonk.-Lex.)

Wunderlich, A.

unbekannt.

V. Literatur

V.-a. Literatur

Abert Hermann : Goethe und die Musik.

Stuttgart: J. Engelhorn's 1922.

Albrecht, Michael von: Goethe und das Volkslied.

Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1972.

(Libelli, Bd. 163).

Baier, Adalbert : Das Heidenröslein oder Goethe's Sessenheimer Lieder in ihrer Veranlassung und Stimmung.

Heidelberg: G. Weiß 1877.

Cawley : Zur Entstehungsgeschichte des Heidenrösleins.

In: Goethe-Jahrbuch. 34. Jg. (1913), Seite 206–209.

Challier, Ernst : E. Challier's großer Liederkatalog. Bd. 1 ff.

Berlin: E. Challier 1885 ff.

Dunger, Hermann : Das Heidenröslein, eine Goethesche Dichtung oder ein Volkslied?

In: Archiv für Litteraturgeschichte. 10. Jg. (1881),
S. 193–208.

Eliaeson, Ake/Percy, Gösta: Goethe in der nordischen Musik.

Stockholm: Seelig & Co (1959).

Fischer-Lamberg, Hanna: Der junge Goethe. Band II: April 1770–Sept.

Berlin: de gruyter & Co. 1963.

Friedlaender, Max: Gedichte von Goethe in Compositionen seiner Zeitgenossen.

Weimar: Verlag der Goethe-Gesellschaft. Bd. I: 1896;
Bd. II: 1916.

Friedlaender, Max: Goethes Gedichte in der Musik.

In: Goethe-Jahrbuch. 17. Jg. (1896), S. 176–181.

Friedlaender, Max: Das deutsche Lied im 18. Jahrhundert.

Hildesheim: Georg Olms, Photomech. Nachdr. 1962.

Goethe und die Musik. Inhaltsangabe zu den Abhandlungen.

In: Goethe-Jahrbuch der Goethe-Gesellschaft in
Japan. XIX. Band (1977).

Goethelieder. Einstimmige Gesänge aus dem Bestande des Ver-
lages Breitkopf & Härtel.

In: Mitteilungen des Verlages B. & H. Nr. 159.
Oktober 1931.

Heinertz, N. Otto: Heidenröslein. En dikts genesis.

In: Moderna Språk. Svensk Tidskrift för undervisning
i de tre Huvudspråken Tyska, Engelska, Franska. 35.
Jg. (1941), S. 164–172.

Herder, Johann Gottfried: Stimmen der Völker in Liedern. („Volkslieder“).

In: Herder's Werke. Fünfter Theil. Hg. von Wollheim
da Fonseca.

Berlin: Hempel 1869.

Herders Sämmtliche Werke. Hg. von Bernhard Suphan. Band 25.

Berlin: Weidmannsche Buchhdl. (1877–1903).

Herder, Johann Gottfried: „Fabelliedchen“ aus Herders „Auszug aus einen Briefwechsel über Ossian und die Lieder alter Völker“. (1773).

In: Gustav Könnecke, Deutscher Literaturatlas.

Marburg: Elwert 1909. Seite 76.

Holle, Hugo : Goethes Lyrik in Weisen deutscher Tonsetzer bis zur Gegenwart.

München: Wunderhorn-Verlag 1914.

Kossmann, E. F. : Zum Heidenröslein.

In: Goethe-Jahrbuch. 29. Jg. (1908), S. 174–177.

Michels, Victor : Buchbesprechung: Joseph Eug, „Das Heidenröslein“. (Berlin: Paetel 1897).

In: Euphorion. VII. Jg., S. 167–170.

Moser, Hans Joachim: Goethe und die Musik.

Leipzig: C. F. Peters (1949).

Nottebohm, Gustav : Zweite Beethoveniana. Nachgelassene Aufsätze.

Leipzig: C. F. Peters 1887.

Schuh, Willi : Goethe-Vertonungen.

Zürich: Artemis-Verlag (1952).

Suphan, Bernhard : Röslein auf der Heiden.

In: Archiv für Litteraturgeschichte. 5. Jg. (1876), Seite 84–92.

Waldberg, Max von : Goethe und das Volksied.

Berlin: 1889.

V.-b. Nachtrag

Aelst, Paul von der: Blumm und Außbund Allerhand Außerlesener Weltlicher Züchtiger Lieder und Reigen...so wol auß Französischen als Hoch und Nieder Teutschen Gesang- und Liederbüchern zusammen gezogen und in Truck verfertigt.

Gedruckt zu Deventer 1602.

Das sind die beliebtesten Goethe-Gedichte. In: LIT-Magazin für Kunden des Buchhandels. Hrsg. v. Börsenverein des Deutschen Buchhandels. Jg. 1982, H. 2, S. 7.

Grube, A. W.: Deutsche Volkslieder.

Iserlon 1866. (VomKehrrim des Volkslieds S. 204 f.)

Joseph, Eugen: Das Heidenröslein.

Berlin: Paetel 1897.

Der junge Goethe. Hrsg. von Max Max Morris. Neue Ausgabe in 6 Bänden.

Leipzig: Insel Verlag 1910.

Der junge Goethe. Hrsg. von Hanna Fischer-Lamberg. Neubearb. Ausgabe in 5 Bänden.

Berlin: Walter de Gruyter 1963.

Goethes Schriften.

Leipzig: Göschen 1787-1790. 1.-8. Band.

Goethe's Werke. Stuttgart, Tübingen: Cotta 1827-1830.

Goethes Werke. Hrsg. von Erich Trunz. 689

München: C. H. Beck. 9. neubearb Aufl. 1981.

Goethelieder in Weisen ihrer Zeit. Hg. vom Arbeitskreis für Hausmusik.

Kassel. Basel: Bärenreiter 1949.

Müller-Blattau, Josef Maria: Es stehen drei Sterne am Himmel. (Volkslieder, von Goethe im Elsaß gesammelt, mit Melodien und Varianten aus Lothringen).

Kassel, Basel: Bärenreiter 1955.

Stein, Franz A. : Verzeichnis deutscher Lieder seit Haydn.

Bern, München: Francke 1967.

/

教官学術研究発表集録

文 科 編

(昭和56. 4. 1～57. 3. 31)

人 文 科 学

- | | | | |
|-------|-------------------------------|---------------------|------------------------|
| 石山 敬雄 | 老齡化社会と道德教育 | 日本道德教育学会誌「道德と教育」 | 1981, (229) |
| 馬場 雄二 | 日本人の創造性の開発に関する一連の基礎的研究 (その6) | 人間工学 Supplement | 17, 136-137 (1981) |
| 馬場 雄二 | 日本人の創造性の開発に関する一連の基礎的研究 (その7) | 日本教育心理学会第24回総会発表論文集 | 1981. 8 |
| 馬場 雄二 | 日本人の創造性の開発に関する一連の基礎的研究 (その8) | 日本心理学会第45回大会発表論文集 | 1981. 9 |
| 馬場 雄二 | 日本人の創造性の開発に関する一連の基礎的研究 (その9) | 北海道心理学研究 | 3, 17(1981) |
| 馬場 雄二 | 日本人の創造性の開発に関する一連の基礎的研究 (その10) | 心理測定ジャーナル | 18, (1) 22-24 (1982) |
| 馬場 雄二 | 日本人の創造性の開発に関する一連の基礎的研究 (その11) | 心理学研究 | 52, (6) 330-336 (1982) |

外 国 語

- | | | | |
|--------|---|---------------------|---------------------|
| 谷村 淳次郎 | Faulkner 文学における Yeoman Farmer とその役割について | 「ウィリアム・フォークナー」 | 4, (1) 17-33 (1981) |
| 寺田 昭夫 | 無言劇としての <i>The Fox</i> | 日本英文学会北海道支部, 第26回大会 | 1981. 10. 3 |
| 坂西 八郎 | ISSA-Übersetzung mit Kommentar und Nachdichtung Deutscher Dichter und Japanischen Scherenschnitten— | 信濃毎日新聞社 | 1981 |

CONTENTS

Cultural Science

Vol. 10, No. 4

Nov., 1982

Whole No. 32

- A Study on the Relations Between Self-esteem and Some
Indices of Adjustment in Student Life
..... Nobusuke Shimizu 4(1)473
- A Study on Liberty..... Masao Shiraishi 4(21)493
- A Study of D. H. Lawrence's "The Ladybird"
—A Myth of Resurrection— Akio Terada 4(67)539
- On *the*+NP's as Notional Subjects in *there*-Sentences
..... Takeshi Higashi 4(91)563
- A Metrical Analysis of Vowel Harmony
..... Kunihiko Hashimoto 4(109)581
- Einige Verzeichnisse der „Heidenröslein-Melodien“
..... Hachiro Sakanishi and Ernst Schade 4(141)613
- Other Achievements Studies for 1981 by Professors in this
Institute..... 4(219)691

昭和57年11月26日 印 刷
昭和57年11月30日 発 行 (非売品)

編 集 兼
発 行 者 室 蘭 工 業 大 学

印 刷 所 中 西 印 刷 株 式 会 社

札幌市東区東苗穂町 505 番地

TEL (代) 781-7501

